
IS～インフィニット・ストラトス～ もう一人の例外

こうのとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニット・ストラトス〉 もう一人の例外

【Nコード】

N2820S

【作者名】

こづのとり

【あらすじ】

衝動的にやってしまった……。駄文だけど、よかったら見てね！

オリキャラ設定（前書き）

衝動的に・・・そう、衝動的にやってしまったんだ

オリキャラ設定

とりあえず。オリキャラ設定

名前：鶴来つるこ 南戸みなと

見た目：黒髪黒眼と純系日本人。眼鏡をかけており、外すと明日すら見えない

性格：温和。その一言に限る

好きなもの：友人。一生懸命な人

苦手なもの：争いごと。一生懸命に何かをすること

専用IS

灰蓮かいれん

篠ノ之束製の第4世代IS

メインカラーはグレーでどこどこに黒いラインが入っている。待機状態はグレーのガントレット

近距離限定機。

メイン装備

驟雨しゅうう

武器の形状は番傘。突撃槍の様に扱う。傘として展開する事もでき、気持ち程度の弾幕なら防ぎきることが出来る。

ギアのようなものがついており、それを切り替えることにより、多彩な攻撃を繰り出せる。

ギアの2つ併用は出来ない

「爆」・・・驟雨についているギアの一つ。驟雨に衝撃が加わると火薬が如く爆発を起こす。衝撃が加わっていなくとも、任意で爆発は可能

「旋」・・・ギアの一つ。驟雨がドリル顔負けの高速回転をする。攻撃力は凄まじいのだが、発動すると秒単位でシールドエネルギーが減るので長期使用は不可

「屈」・・・ギアの一つ。驟雨の表面に特殊なコーティングを施す。ビーム系統の攻撃限定で驟雨によって逸らす事が出来るようになる

「並」・・・ギアの一つ。特に何の効果もない。言わばノーマル状態

とりあえずはこんな感じで。
生い立ちなどは追いついてきます

・ 織斑一夏

「全員そろってますねーそれじゃあSHR始めますよー」

黒板の前で微笑むこのクラスの副担任、山田真耶先生。優しそうな印象の眼鏡な女性。

失礼ながら『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ、背伸び感があるような気がする。・・・気のせいか？

「それでは皆さん、1年間よろしくお願いしますね」

そう続ける背伸び先生。誰からも反応がない辺り、涙をそそる。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

めげない背伸び先生。その甲斐空しく返ってくるのは沈黙である。

この場合返ってきてないといった方が正しいな。ほんと同情します。

なんやかんやで出席番号順で自己紹介が始まる。

やる事もないので自己紹介を聞きながらその人の顔と名前を一致させよう。

名前を覚えておかないといろいろ不便だな。

・・・と自己紹介の流れが止まる。

「織斑くん。・・・織斑一夏くんっ」

俺の前の席の少年、織斑一夏。

この学園にたった2人しかいない男子生徒のうちの1人。ああ、もう1人は俺ね。

「は、はいっ!？」

相当ビックリしたらしい一夏少年。声が裏返ったお陰で幾分教室の空気が和らぐ。

本人は恥かしいんだろうな。可哀想に。俺だったら顔の熱で死ねるぜ。

そして背伸び先生はなぜかペコペコと頭を下げている。

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・ていうか自己紹介しますから、先生落ちついてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ!」

すごく食って掛かってる背伸び先生。いや、そんなことで嘘つく奴いないでしょ

・・・と、一夏少年は席を立てて自己紹介を始めんとしている。その前に軽く後ろを見まわしているようだ。最後に俺と目が合い、互いに苦笑いを浮かべる。『お互い大変ですね』的な意味合いで。

「えー・・・えつと織斑一夏です。よろしくお願いします」

ぺこりと一礼している。

『もつと喋って』的な空気が流れてるが俺は君の味方だ。ここで終わっても文句は言わないよ。君は頑張った。もう十分だ。

一夏少年はと言うとすつと息を整え、何かを覚悟したオーラを放

っている。

息をのむ背伸び先生他生徒一同。
そして――

「以上です」

ガタガタとずっとこける一部の生徒。ノリいいな。楽しくやっていけ
そうだ

、 織斑千冬、

パアンツ！ 教室に響く炸裂音。

炸裂音の発信源は前の席にいる一夏少年の頭からだ。

何が起こったかと言うと、俺の隣にいつの間にかいた女性、服装から見るに恐らく教師であろうその人が一夏少年をどついたのだ。

恐る恐る振り向く振り向く一夏少年。

そんな彼の第一声は

「げえっ、関羽!？」

なんとまあ突っ込みづらいフォークボールだった。

まあ、悠然と立つ様は確かに歴戦の武将と言えないでもないが、それを口にしちゃダメだろう。

女子ほとんど引いてるじゃないか

パアンツ！と二撃目が炸裂する。

さっきは後ろを向いていたため、見えなかったが今度は思いつき前を向いていたため彼の頭にヒットするまでがリアルタイムで見れてなんとも痛々しい。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

いろんな意味で鋭いツツコミが入る。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

山田先生が関羽將軍に話しかけている。

話から察するにこの関羽將軍がこの担任なのだろう……。ん？織斑？……。どこかで……

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……。…」

山田先生がなにか変な雰囲気を纏って話しかけている。

なんと言えいいのか。あまり深入りはしたくない。そんな雰囲気。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を１年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

演説のようなことをしている関羽將軍改め織斑先生。

第一印象としてはいろんな意味で『強そう』の一言に限るな。

100人俺がいても勝てそうにない。そんな印象

「キヤ———！千冬様！本物の千冬様よ！」

そんな発言を筆頭に教室が一気にヒートアップする。

肝心の千冬様はと言うとうつとおしそうに何か喋っている。

耳をふさいでいるので聞こえないが、その言葉でまた教室が沸き立ち教室内は動物園と化した。

……。一体なんて言ったんだろうか

教室の動物園状態が解除されたところで、俺も耳をふさぐのをやめ

る。

「で？挨拶もまともに出来んのか、お前は」

織斑先生が一夏少年に話しかけている。

どうやらさっきの自己紹介がお気に召さなかったらしい。

「いや、千冬姉、俺は――」

パンツともう一発。

見てるこっちが頭痛くなってくる。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

突然教室がざわつく。ん？なんかあったのか。

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男なのに『IS』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

続々と上がる声。

ああ成程、どこかで聞いた事ある名前だと思ったら一夏少年の名字だったか。

俺の中では一夏少年で固まっていたから全く気付かなかったよ。

・・・長い長いSHRの終わりを告げるチャイムが鳴る。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そんなこんなで一時限目が始まる・・・

あれ？俺自己紹介してなくね？

・篠ノ之箒（前書き）

なかなか文章が膨らまない。

篠ノ之箒

現在1時間目が終わり放課中。

この学校にいる2人の男子生徒を見る為に廊下にいるんなクラス、学年の女子高生があふれかえっている。

「アイドルになったような気分だな」

苦笑いをしながら一夏は俺に話しかける。

「そうか？俺は動物園のパンダになった気分だよ」

実際のところ、廊下にあふれかえる面々の視線は『憧れ』と言ったアイドルに向けるような視線ではなく、珍妙なものを見るような『興味』の目で見られている。

「でも手を振ってるあたりお前も満更でもなさそうだな」

「これだけ注目されて無視できるほど神経図太くないんでな」

そう言いつつ手を振る

『キャ——こっち手振ってる——！！』

『こっち見て——！！』

手を振るだけでこの歓声。パンダって大変なんだなあとしみじみ思う。

「……ちょっといいか」

この空間にいつの間にか出来た、『話しかけて的なオーラを放ちながら、自分から話しかけることはしない』という暗黙の了解をもろともせず、一夏に話しかけるポニーテール少女。
やや、教室内の空気が張り詰めている。

「………箒？」

どうやら知り合いらしい。

積る話もあるのだろうが、さすがに状況が状況（周囲に集まっているギャラリーが聞き耳を立てている）なので話ずに話せなさそうだ。

「廊下でいいか？」

場所を移動する。ポニテ少女。

名前は箒さん。ん？箒？ああ、この人が……。

「ちょっと待って箒さん！」

移動しようとしているポニテ少女を一時停止させる。

「……なんだ？」

「いや、ちょっと俺も君に用あるんだけど、一夏との話が終わってからでいいから時間貰えないかな？」

少し考える様な所作をして、答える

「わかった。話が終わってから時間を作ろう」

「ありがと。俺は屋上にいるから話終わったら来てね」

そう言つて2人と別れ屋上へ。

「・・・待たせたな。それで、用つて言うのは？」

何をするでもなく外を見ながらボーっとしていたら篤さんが来たみたいだ。

「いやー悪いね。一応確認なんだけど、篠ノ之束さんの妹の篠ノ之篤さんで間違いない？」

束さんの名前を出した途端に目つきが鋭くなる。凄くこええ

「そうだ。それがどうかしたのか？」

「あんたのお姉さん、つまりは束さんから手紙を預かってる。用と言うのはそれを渡す事だ」

俺の言が予想外だったのか目を丸くしている。

「あの人から？」

「そう。その人から」

はい と手紙を手渡す。

他にこれといって用もないので教室に戻ることにする。

「それじゃ、用は終わり。それじゃあ戻ろうか。それは一目のつかないところで読んでね。国家機密とか詰まってるらしいから」

「あ、ああ・・・。」

そう言って教室に戻って行った・・・。

・ セシリア・オルコット (前書き)

話が膨らまな (ry

・ セシリア・オルコット

2 時間目――

黙々とノートを取っていると前の席の一夏がキョロキョロと首をせわしく動かして、周りを見回してる事に気付く。

『え？なんでみんなついていけるの』みたいな感じで頭の上で『？』が踊っている

「織斑くん、なにかわからないところがありますか？」

ホラ、そんなあからさまな反応とってるから先生が心配してるじゃないか。

「あ、えつと・・・」

自分の無知をみんなに知られることは嫌だし、このままわからないままにしておくのも色々不味い。
そんな板挟み状態か。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

胸を張る山田先生

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

山田先生を頼って素直に言う一夏。

わからないままでは進歩はないのでいい判断だろう。この先生が頼れるかは別として。

「え・・・ぜ、全部、ですか・・・？」

『多少の覚悟はしていたけど、まさか全部とは・・・』と言いたげな困り顔

最悪教室の隅に控えている鬼教官こと千冬様に頼ればなんとなるさ、頑張れ一夏

「えっと・・・織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

無反応なあたり、最初の最初ですっこけたのは一夏だけらしいな。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

鬼教官が一夏に尋問をしている。

下手な返答をすれば右手に構える出席簿の餌食になるのは目に見える。どうするんだ一夏よ！？

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ

・・・もう何も言っまい

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

まあアレを電話帳と間違えるんだから馬鹿といわれてもしかたないな。

「鶴来！」

突然怒鳴り口調で呼ばれたので思わずビクツとなる

「は、はい。 为什么呢？」

「お前、参考書は読んだな？」

「ええまあ・・・一通りは」

突然俺に飛び火したのでかなり焦っているのは内緒だ

「お前と織斑は相部屋になっている。参考書は再発行してやるから、お前は参考書の内容を織斑に叩き込め。一週間だな」

「一週間！？そんなの無理にきまって・・・」

「一週間であの分厚さはちよつと・・・」

俺と一夏無理難題に口々に文句を言うが――

「やれと、言っている」

「・・・尽力します」

「・・・はい、やります」

――この人には敵わなかった。

「ほんと、すまない!」

授業が終わってすぐ一夏は俺に対し頭を下げる
参考書云々で俺を巻き添えにしたことを言っているんだろう。

「気にするな。助け合ってこそ人間だろ?」

俺今カッコいいこと言ったな

「ちょっと、よろしくて?」

不意に後ろから声がかかる

「ああよろしいですよ」

そこには金髪に青い目と見るからに異邦の人がいた。

『現代女子』と言った言葉かぴったり当てはまるような、女尊男卑
を当然と思っていて、男〃奴隷 の方程式が頭の中で出来あがつち
やうような女の子。

笑い方は『おほほほほ』がピッタリ合いそうだな

「まあ!なんですよ、そのご返事。私に話しかけられるだけでも光
栄なので、それ相応の態度と言うものがあるのではないのか
しら?」

予想外の反応に答えを窮していると

「悪いな。俺達、君がどういう人だか知らないし」

黙っていた一夏が助け船を出してくれた。助かった

「わたくしを知らない？この——」「オルコットさんだよね？セシリア・オルコットさん」

クラスの人の顔と名前は全て一致させていたため名前は知っていた。オルコットさんが喋っているときに被せたのは、思わずで、わざとではない。ほんとだよ！

「え？南戸知ってる人？」

「名前だけは知ってるよ。同じクラスだし。言うほど凄い人なのかは・・・わかんないな」

と、お互い苦笑い

「わたくしはイギリスの代表候補にして入試主席。あなたがた達のような下々の者たちとは格が違いますわ！」

代表候補か。確かにそれは凄いな。

それを鼻にかけられると小物臭しかしないが。

「なあ南戸。一ついいか？」

「おうなんだ。わかる事なら答えよう」

「代表候補生って何だ？」

クラスの子が数名ずつこける。てか聞き耳立ててたのかよ。

「あ、あなたっ本気でおっしゃってますの!？」

「おう、知らん」

清々しい馬鹿っぷりである

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国と言うのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら・・・」

これはオルコットさんの方が正しいな。なんで知らないんだ一夏よ

「まああれだ国代表のIS操縦者の候補生だ。読んで字の如くだな」

「なるほどな。勉強になったよ」

オルコットさん頭が痛そうだ。その気持ち、わからんでもないよ

「他にもわからんことがあつたら聞いてくれ。俺のわかる範囲なら答えるから」

「おおっ！頼りにしてるぜ」

「あなたもISのことわからないことがあれば、泣いて頼めば教えて差し上げてよくってよ。なにせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

俺に変な対抗心を燃やしているオルコットさん。

本当にわからないことがあったら教員に聞くけどな。

「その時は頼むよ」

とりあえずそう言っておく

「入試って、あれか？ISを動かして戦うやつ？」

そこで食いつく一夏

実は俺は束さん経由のコネを使ってこの学園に入ったため、この学園のテストは一切受けていない。

だからなんの話なのかさっぱりだ。2人で白熱しているが話が全く分からない。

よくわからないが、オルコットさんは自分だけ出来たと思っていたみたいだが、一夏もそれが出来ていたらしい。

オルコットさんはそれが気に食わず、一夏に食って掛かっている。そんな状況

——とチャイムが鳴る

「……！　またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

「えらく気にいられたみたいだな一夏」

「どこがだよ……はあ……」

代表候補からの宣戦布告（前書き）

セシリアの喋り方がいまいちよくわからない

代表候補からの宣戦布告

「それではこの時間は実戦で使われる各種装備の特性について説明する」

3時間目。山田先生から織斑先生にバトンタッチしていた。

心なしか教室全体は一層まじめに取り組もうとしている雰囲気がある。まあ怖いしな

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間の変更できないからそのつもりで」

丁寧に説明してくれる織斑先生。

『クラス長』『生徒会』とかいろいろわからない専門用語があったが、色々大変ということはわかった。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

ざわざわとしだす教室

「わ、私は鶴来くんをお願いしたいかな・・・」

一夏の名前が出た時点で想定はしてたさ・・・。

いつの間にか出来あがっていた『織斑派』と『鶴来派』の論争みた
いなのが始まる。

・・・なんとも複雑な心情だ

「お、俺っ!？」

推薦されてから少し経ってから意味を理解し、立ち上がる一夏。前
が見えん

「うるさいぞ織斑。とりあえず鶴来、お前も立て」

刺さるような期待の目線を背に立ちあがる。

こんなに期待されると断れない・・・根性ねえな俺・・・。

「自薦他薦は問わない。他にないなら、この二人で投票を行いクラ
ス代表、副クラス代表をやってもらうことになるぞ」

しんとなる教室。異存はないらしい

「待つてください！納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩いて立ち上がるオルコットさん。

因みに席的には俺の斜め後ろ。

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしにこのセシ
リア・オルコットにそのような屈辱を１年間味わえとおっしゃるの
ですか!？」

「物珍しいという理由からクラス代表を極東の猿にされては困りま
す！わたくしはこのような島国までISの技術の修練をしに来てい

るのであって、サーカスに参加する気は毛頭ございませんわ!」

人間自体長い目で見ればみんな猿だけだな

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛でなのですよ!？」

わかった! 君がクラス代表やりたいことはよくわかったから! だからもうやめなさい。

お国批判となると怒る人とかでてくるから! てかこのクラス半分以上日本人だから!

これ以上敵を作るな!

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

ほら見る。怒る人でできたじゃないか

「なっ・・・」

「あっ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「自分のやられて嫌な事は他の人にはやるなよ。常識だぞ」

思わず、口がでてしまった。

キッと睨んできたので苦笑いで返す

「決闘ですわ！」

バアンツと机を叩いて宣戦布告する。

やめてやれ・・・机には何の罪もないだろう。

「おう、いいぜ。四の五のいうよりわかりやすい」

やけに乗り気な一夏。勝算があって言ってるんだろうか・・・

「応援してるぜ。一夏」

「なにをおっしゃってますの？当・然！あなたにも参加してもらいますわよ」

決闘の頭数に俺も入ってた

「ええっ！？いや、俺あんたになんも言っていないじゃん」

「理由なんてこの際どうでもいいんですの。ただあなたがた達が気にいらなから叩きのめして差し上げる、それで充分ですわ」

俺は全くあんたと戦う理由がないんだけどな・・・

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行う。オルコットは代表候補生なのでハンデとして織斑、鶴来と連戦してもらう。オルコット、いいな？」

「ええ、むしろその程度のハンデで問題ないのか心配になるぐらいですわ」

「オルコット、織斑、鶴来はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

一週間か・・・まあそんだけあればなんとかなるだろ。

・篠ノ之束

放課後、特にやることもないので今は一夏の勉強を見ている。

「い、意味がわからん・・・なんでこんなにややこしいんだ・・・」

現状的に一夏にあの参考書を一週間で叩き込むのは無理がありそう
だ。

半年はほしい。

「頑張れ一夏！まだ100分の1も終わってないぞ。」

実際1200ページ近くある参考書の10ページ目にさしかかつて
いるところだ。

「気が遠い・・・。それにこんなに人の目があるとやり辛くて仕方
ない」

放課後になっても廊下には人ばかり

一夏の言うとおり集中なんてあったもんじゃない。

奥の方で人ごみがかき分けられている。誰かこちらに向かってきて
いるらしい。

「ああ、二人とも。まだ教室にいたんですね。よかったです」

人ごみをかき分け入ってきた山田先生。

あれをかき分けるのはさぞ大変だったろう。

「どうかしたんですか？」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

それは織斑先生も言ってたな。俺と一夏は相部屋だってまあ2人しかいない男子生徒だしそうなるのは必然か。

「俺の部屋決まってるじゃないじゃなかったんですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話だったけど」

俺はそんな話一切聞いてないけどな。

『みつくんにはIS学園に通って白式のデータとって貰うことになったから！』と突然東さんに言われたのが昨日の話。それ以外の説明は一切うけていない。

俺にIS適性はない筈なんだが何故か入学出来て、俺でも乗ることのできる専用ISが用意されてるあたり、東さんの凄さが垣間見える。

——と、話が逸れたな

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生食堂でとってくださいね」

「あの、俺の荷物は・・・？」

全寮制なんて聞いてなかったから荷造りなんてしてないぞ・・・これは困った

「あつ、鶴来くんの荷物は届いてましたよ。今はもう部屋に置いてある筈です」

流石東さん。抜け目ないな

「えっと、それじゃあ私はこれから会議があるので、これです。二人とも、ちゃんと寮へ帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

山田先生はそう言って教室から出ていく。人ごみをかき分けながら。

「・・・で、一夏はどうする？もう帰るか？」

「んー、そうだな。帰るよ、今日は疲れたし。それに早くこの状況から解放されたい」

「そうか。なら帰ろうか。我らが仮住まいに」

ピピピピピピピと携帯が鳴る

掛けてきた相手を確認して、周りに誰もいないか確認する。

ルームメイトである一夏は風呂に入っているとところだ。ほんと丁度いいタイミングで掛かってきたな。

とりあえず通話ボタンを押し、電話にでる

『もしもし』

『もっしもーし！みつくん元気ー！？』

通話相手は束さん。相変わらずテンションが高い

『ええ、まあ人並みには』

『そっかあ、元気な事はいいことだよ。学校はどう？』

『初日なんでまだわからないけど、楽しくやっていけそうです。白式のデータとりはまだ届いてない以上なんとも言えませんが・・・』

『ちつつちつつち、白式のデータは片手間でいいのだよ。君にはもつと優先すべき事があるっ！そうっ、青春さ！』

付き合いが長いのか話し声だけでどんなモーションをとっているかわかる。

『ふふっ、そうですね。折角の機会ですし、めいっぱい青春を謳歌しますよ』

『それはそうとみつくん、篝ちゃんには会ったかい？』

『ああ、会いましたよ。それと手紙渡しておきました』

束さんの妹と聞いてうさ耳力チューシャがついていると思っていたのは内緒だ

『ありがとーみつくん、じゃ、私はこの辺でっ！精々青春学園ライフを満喫してくれたまえっ』ブチっ

—— あ、切れた。・・・一方的だな

「ふーっ」

ちょうど風呂場から一夏がでて来た。

タイミングが本当にいい。実はあの人、見てるんじゃないだろうか

決闘へ向けて（前書き）

ちよつと書き方変えてみた

決闘へ向けて

食後のティータイムなう

飲んでいるのはそんな洒落た紅茶ではなく、味の深い緑茶だがまあティーであることにはかわりないし意味としては間違っていないだろう。

「そいえば一夏、月曜の決闘どうするんだ？連戦とはいえ相手は代表候補だぜ？」

とりとめて話す話題も思いつかないので今日申し込まれた決闘の事について聞いてみる
自信たつぷりだったしな

「どうって、戦って勝つに決まってるだろ。あんなに舐められて引けるかよ」

綺麗に『どうやって』という過程が吹っ飛んでいた。

どうやら一夏の中では戦ったら勝てるという方程式が出来あがっているらしい

「いやいやいや、なんで勝てる前提なんだよ。俺は作戦とかそういうのが聞きたいんだよ」

「なんだ、作戦の話か。それならそうと言ってくれよ」

「ああ、良かった、一応はあるんだな」

てつきり無計画イブランかと

「おうっ、作戦名は『ガンガンいこうぜ』だ」

「そんな抽象的なのが作戦なわけねえだろ！？つまるところ無計画じゃねえか！」

バンツと俺と一夏の間にある机を叩いて身を乗り出す。

「み、南戸・・・？」

呆氣にとられる一夏

「あ・・・いや・・・すまん」

クールダウン、クールダウン。落ちつけ俺

「と、とりあえず無計画じゃダメだ。付け焼き刃だが、模擬戦するなりしてある程度実戦経験を積んでおき、相手がどういったタイプの機体でも対応できるようイメトレしておいた方がいい」

「模擬戦にイメトレか・・・なるほど。その手があったか」

その手すら思いつかなかったのか

「あと思いつくことと言えば、相手の専用機の情報だな。・・・まあそこら辺は俺がなんとかしておこう」

「おおっ、頼もしいな」

「まあ俺も戦うことになるだろうから・・・」

「おい、起きろ！南戸、遅刻するぞ！」

「う、うう・・・もう朝か・・・眠い・・・」

一夏に叩き起こされ朝支度を始める

「ああそうだ。一夏、コレ」

そう言ってUSBを一夏に投げ渡す

「なんだこれ？」

「昨日言ってた専用機のデータ。早いに越したことはないと思っ
た。昨日の夜にやっておいた」

『何を』やったのかは内緒だが

「そ、そうか。サンキュー」

「のーぷろぶれむ」

早々に支度を済ませ、俺達の2日目の学園生活は始まった

「なあ、なんで自習なんだ？」

「俺が知るか」

今は1時間目。何か問題があったらしく3時間目まで自習だそうだ

「なんでも、誰かが昨日の夜、この学園のメインコンピュータに侵入して、学園に登録してある専用機データを全部とっちゃったらしいよー」

隣の女の子が丁寧に教えてくれる

ていうかそういう『機密漏洩した』みたいな情報って、トップシークレットじゃないのか？

女子の情報力はんばねえ・・・

「南戸・・・それって」

『昨日の夜』『専用機』でピンときたらしいー夏が俺に尋ねてくる

「・・・世の中には、知らない方がいいこともあるさ」

現在昼放課

一夏と箒（そう呼ぶように言われた）と昼飯をとっていた。

「そっぴやさあ、箒」

「・・・なんだ」

「ISのこと教えてくれないか？このままじゃ俺達何も出来ないまま負けそうだ・・・」

一夏は昨日俺がいろいろ言っただ甲斐あって現状を危惧しているらしい

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「まあ確かに馬鹿かもな、いや馬鹿だ」

「そんな馬鹿馬鹿言っくなよ・・・」

箒にも俺にも馬鹿と言われしゅんとする一夏。

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。一度、腕がなまっていないか見てやる」

「いや、俺はISのことを――」

「見てやる」

「………わかったよ」

立場弱いなこいつ

「そしらぬ顔をしているがお前もだぞ」

どうやら俺も頭数に入っていたらしい

「いや、俺剣道やったことな――」

「お前もだぞ」

「………了解」

デジャヴ？

「弱いなお前」

「……お前には言われたくないな」

剣道場に倒れ伏す俺と一夏

「どういうことだ」

そして俺達2人と連続でうちあつても息を切らしていない筈

「どういうことって言われても・・・なあ？」

「こういうこととしか、言いようがないな」

ズビシィッと竹刀が一夏に向けられる

「先ず一夏！どうしてここまで弱くなっている！？」

ズビシィッと今度は俺に竹刀に向けられる

「そして南戸！避けてかわして、かわして避けて・・・それでもお前は男か！？」

いや、素人にあんな速度の剣戟を受け止めろというのは無理があるだろう

「鍛え直してやる！お前らはIS以前に基礎がなっていない！これから毎日、放課後三時間、私が稽古付けてやる！」

ていうか昨日今日知り合った人に木刀振るって説教されるなんてレアな体験だよな

「え。それはちょっと長いような——ていうかISのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言っている！」

そうして俺達の特訓の日々は始まった

決闘へ向けて（後書き）

感想まっています

決闘当日（前書き）

戦闘描写むずい

決闘当日

それから一週間後の決闘当日

第3アリーナ・Aピットに俺、一夏、箒、織斑先生に山田先生が集まっていた

因みに連戦の順番だが一切の滞りなく、最初が一夏、次が俺と決定了した

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

専用IS『白式』に搭乗した一夏に問いかける織斑先生

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

ほっとしたような声

身内なんだ心配なんだろう

「一夏、負けるにしても多少は弱らせてくれよ。次は俺が出るんだから」

「負けないさ」

前と変わらぬ、揺るがない自信

前と違うのは、その自信が空虚ではないこと

箒につけてもらった剣道の稽古は、ISに直接的な影響はしなくと

も全くの無意味という訳ではなかったようだ

「篤」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

そんなやり取りをした後、決戦の舞台へと飛んで行った

原作と同様につき割愛

試合が終わり、ピットに戻ってくる一夏

「……どんまい一夏」

結果からいうと、一夏は負けた

なんともいえない『自爆』によって

「武器の特性を考えずに使うからあなるのだ。身をもつてわかっただろう。明日からは訓練に励め。ひまがあればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

当人はなんで負けたのかわからないって感じだし、あとで教えてやるか・・・

「次は鶴来、お前だ。とつと行ってこい」

織斑先生はさっきの一夏の負け方がそうとう気にいらなかったらしく、まだいらついている
俺に当たるな、俺に。

「南戸、俺の無念をはらしてくれ！」

「勝てよ、南戸」

一夏と箒の激励。

正直一夏と戦って相手はボロボロ・・・そんなに気負う必要はないと思うけどな

「ああ、任せとけ」

俺の専用IS『灰蓮』を展開しピットから飛び立つ

そこに待ち構えるはイギリスの代表候補生

——セシリア・オルコット

「あら、お仲間がやられたというのに、逃げもせず来ましたのね。見栄をはらずに降参してもよろしくてよ?」

「降参した方がいいのはあんたじゃねえの? さっきの戦いでご自慢

の新兵器がほぼ全滅してたじゃねえか」

セシリアの機体『ブルー・ティアーズ』のメインウェポンである、自律起動兵器『ブルー・ティアーズ』以下ビット

小さな機体でビュンビュン飛び回り、いろんな角度、方向からレーザーを放ってくる厄介な兵器だ

・・・だがそのビットはさっきの戦いで一夏が6機あるうちの4機を破壊しており、もうほとんど無力化されている

「あなた、『予備』という言葉をご存じないのかしら？」

そう言うセシリアの機体から現れる壊れた筈の4機のビット

「・・・コレって連戦の意味あんのかね」

一夏はセシリア本体には一撃も攻撃を当てていない

そして相手は代表候補生だ。30分の試合ではてるなんてことはありえないだろう

つまりはセシリアは万全な状態なのだ

「唯一の望みが断たれましたわね」

「ああ、『楽に勝てる』望みが断たれたな。・・・どちらにしても、勝つことには変わりはないさ」

灰蓮のたった一つの武器である番傘『驟雨』を呼び出しする

「随分ふざけた武器形状ですわね」

「俺は好きだけどな」

・・・そのやり取りを最後に、お互い相手の出方を見るように牽制しあう

「そこですわ」

しびれをきらしたセシリアが俺にライフルを放つ。

だが、そんな直線的な攻撃に当たる筈もなく、難無く回避し一気にセシリアとの距離を縮めようと接近する

「・・・ッ！」

近づこうとしたところに、サイド2機のビットによる迎撃。
被弾しないよう後退し回避する

流石は代表候補生、容易に近づかせてはくれないな

作戦を立てたいところだがその間にもビュンビュン飛び回っている
ビットの攻撃が続くので熟考は出来ない・・・

ところ変わって第3アリーナ・Aピット

「・・・一方的だ。このままじゃ負けるぞ、南戸」

現在行われているセシリアと南戸の戦いを見ながら、一夏はつぶやく

その言は事実で、セシリアからの攻撃はあるものの、南戸は避けるばかりで、一切の攻撃はなかった

たまに南戸が接近するものの、セシリアの迎撃により後退、といった流れで試合開始から20分ほど経っている

「負けることはない筈だ。あいつは強い・・・お前よりもな」

そう言うのは筈

「俺より強い？でもあいつ俺にも剣道で負けてたぞ？」

この一週間の稽古で何度か一夏は南戸と打ち合った事があるが、全て一夏の圧勝で終わっている

「お前、あいつと打ち合って何も違和感を感じなかったのか？」

「んー特にはないな・・・あいつ何もかも普通だったし」

南戸の能力は並の並

特別頭抜けた能力はないと、一夏は答える

「確かに、あいつは身のこなしも力もいたって普通だ。だからこそ、おかしいだろう？」

「・・・なにが？」

一夏は全くわかっていないようなので篤は説明を始める

「お前なあ・・・私とあいつが始めて打ち合った時、決着までに10分近く掛かった。なぜだと思う？」

「なぜって、真っ向から当たらず、ずっと避けてたからだろ」

「ではなぜ避けられる？ほとんど零距离で私は全力でとらえようとしていたぞ」

確かに思い返してみればそうだ・・・

南戸は篤の全力の剣戟を10分近くずっと回避しつづけていた。

「・・・そういえば、そうだな」

「この試合にしてもギリギリで回避し続けて、一番最初から今まで、あいつは一度も被弾していない。恐らくあの『回避能力』こそ南戸の強みだ」

「ふむ、とくに作戦が思いつかな」

誰にいうでもなく一人つぶやく

さっきからずっと回避しながら作戦を練ろうとするものの、どうもビットの攻撃が厄介すぎて作戦が纏まらない

仕方ない・・・一か八か懷に飛び込みますか。

「そうと決まれば善は急げってね」

ビット1のレーザー攻撃を回避し、セシリアとの距離を詰める

「またですよ。いい加減諦めてはいかがかしら？」

上からビット2、下からビット3のレーザーが放たれる。

さっきまでなここで引いていたが行くと決めたんだ。行くっきゃない

驟雨を構えギアをビーム系統攻撃を弾く『屈』に変更する。

そしてその2つのレーザーを驟雨で弾き、どんどんセシリアに近づく

「なっ!？」

ここで引くと思っていたらしく、激しく動揺を見せるセシリア

スカート状のアーマーの突起が外れビット4、5がミサイルを放つが、一夏戦を見てそこに隠してあることは知っていたので対応し、回避する

「もらったアアアア！」

ギアを『旋』に変え、セシリアを貫く

ドリルのように超速回転しているのでセシリアのシールドエネルギーは一気に削られ――

『試合終了。勝者――鶴来南戸』

――試合は幕を閉じた

決闘当日（後書き）

感想お待ちしています

決闘後日（前書き）

文章の長さの基準がわからない

決闘後日

- 一夏side -

翌日、朝のSHR。あり得ないことが起きていた

「では、一年一組の代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

「先生、質問です」

拳手。質問は手を挙げてしよう。基本だ

「はい、織斑くん」

「昨日の試合の最終的に勝ったのは南戸です。なのになんで俺がクラス代表になってるんでしょうか？」

「えーつとですね、鶴来君は副代表がいいそうなので代わって貰いました。今ここに居ませんが、鶴来君がこのクラスの副代表です！」

先生の言うとおり今ここに南戸はいない。

ついさっき千冬姉に呼ばれてどこかに連れていかれてしまったのだ

「いやあ、ラッキーだったね。クラス代表、副クラス代表を務めるのが両方男子なんて、IS学園最初にして最後じゃない？」

「私たちは貴重な体験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一度で二度おいしいね」

「昨日の試合でますます人気になったもんね。織斑くんと鶴来くん。ますます情報が高く売れるよ」

商売にするなっつーの。ていうかクラスメイトを売るな。

南戸・・・早く戻ってきてくれ。この状況は俺一人じゃ厳しい・・・

- 南戸 side -

織斑先生に呼び出され、現在応接室

「ここに呼び出したのはお前に聞きたいことがあるからだ」

真面目な面持ちで織斑先生は話を切り出す

「俺のわかる範囲なら答えますよ」

「お前、篠乃之束を知っているな？」

ここで束さんの名前が出るとは・・・

「ええ、 magari なりにも IS を学びにここに来ていますからね。その人の名前は何度も聞きます」

「そうではない。質問の意味、わかっているのだろう？」

「・・・計り兼ねます」

まずいな

ここで束さんとの繋がりが公になれば、大変な事になる。世界規模で

「つまりは、知り合いであるか？と問いたいのだ」

「知り合いなわけじゃないですか。その人は失踪中なんですよ？」

『嘘をついている』 そう確信している織斑先生の瞳
言い逃れは出来そうにない・・・か

「まあ言い張るのならそれで構わん。もしそうだったとしても、お前をどうこうするつもりは無いからな」

「・・・なら、もしそうだったら、どうしたんですか？」

「束にとってどうかは知らないが、私にとって束は大切な友人だ。その友人が元気してるか聞きたかっただけさ」

「そいえば束さんが『何かあったらちーちゃんに頼れば大丈夫！』って言ってたな

織斑千冬・・・千冬だからちーちゃんか

どうやらこの人の言ってることは本当みたいだ

「多分ですが、元気にしてますよ」

「ふふっ、そうか」

あの束さんが頼れと言った以上、この人は相当信頼のおける人なの
だろう

何かあったらこの人に頼るか・・・

「さて、授業に戻るか」

「そうですね」

決闘後日（後書き）

感想お待ちしております！

ある日の学園（前書き）

タイトルが思いつかなかった

ある日の学園

四月下旬の春真っ盛り

窓からぽかぽかと日がさしており、なんとなく清々しい気分で目が覚める

「・・・ふむ、朝か」

「一夏は・・・いないな」

体を起して隣のベッドを見やるが、ルームメイトの姿はない
大方、幼馴染の剣道少女がクラスメイトの高飛車少女に連れ去られたのだろう

いやあ、もてるってつらいね

「まあこんなこと日常茶飯事だしな」

3日に一回ぐらいの頻度で、俺が起きたら一夏がいないことがある
そして、そういう日は決まって――

「・・・あーあ。10時だ」

――決まって俺は遅刻をする。

「・・・これで何回目だ？」

織斑先生の前に正座をさせられている俺

授業はISの実技訓練だったため、場所はグラウンド。
砂利や小石が足にチクチクと痛い

「え、えつと。3回目ですかね」

パンツ

出席簿で叩かれ頭も痛い

「馬鹿者め。その倍だ」

難無く見破られる鯖読み

「鶴来くんまた遅刻なんだあ」

「他の事はほとんどなんでも出来るのにねー」

「攻められてる鶴来くんも・・・イイ！」

クラスメイトの好奇の目線も痛い
早く解放してくれ！

「遅刻した理由を聞こうか」

いつでも行けるぞと、出席簿がスタンバっている

「謎の組織の男たちに——」「で、本当は?」「」

「起きたら10時でした」

パンツ

痛いなんてもんじゃない

「もういい、お前の寝坊癖への対策は考えておく。お前は早く着替えてこい」

急いで着替え、グラウンドに戻ると、一夏とセシリアがISを起動していた

「来たか。鶴来、お前もISを起動して織斑とオルコットに続け」

灰蓮の待機状態であるガントレットに手を当て——

（行くぞ、灰蓮）

——灰蓮を起動する

「よう、また遅刻か?」

「ああ、誰かが俺を置いて先に行ってしまったからな」

急いで高度を上げ
飛んでいる2人に合流する

「朝起きることすらできないなんて情けないですわね」

そう言うのはセシリア。

決闘前よりは仲良くなったものの、恐らく彼女からの俺に対する好感度はマイナスだ

まあマイナスだからどうってわけではないが。

「そうだな。だから、一夏が好きだからといって朝連れ出すのはやめてほしい。俺が困る」

「え？俺がなんだっ「なんでもありませんわ！」「」

最近、セシリアはわかりやすく面白奴だということがわかった

「おまえらっ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

通信回線から響く怒鳴り声。通信回線なんだからそんな大声出さんでも聞こえてるよ・・・

「十中八九、妬いてるな」

箒もセシリアと同様に、わかりやすく面白い

だが、それを口に出そうものなら八つ裂きにされかねない
というか一度されかけた。一夏が止めてくれなければ俺は挽肉にな
っていたことだろう。

「妬いてる？誰が？誰に？」

この鈍さ！

安心の一夏クオリティ

「こつちの話だ」

「織斑、鶴来、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

地表からの距離はISの機能で見ることが出来るようだ。
この機能を使ってちょうど十センチになるように止まればいいわけか。簡単だな

「了解です。では一夏さん、・・・南戸、お先に」

俺は呼び捨てのうえ、なんか仕方なく呼んでやったって感じだな。
まあ、呼んでももらえただけマシ・・・なのか？

難無くクリアしたセシリア

「うまいもんだなあ」

「じゃ、俺もいつてくるぜ」

セシリアと同様に一気にスピードを出して地表を目指す
地上との距離を測るカウンターは見る見るうちに数値が0に近づいていく

要領はストップウォッチを7.77で止めるのと同じ・・・問題な

い。

「・・・見事だ鶴来、十センチジャストだ」

上手くいったみたいで良かった。あとは一夏か・・・

一夏の方を見るとちょうどこっちに向かってきているようだ。

「あれ、やばいんじゃないか？」

どう見てもスピードを出し過ぎて制御を失っている。

ああ、あれは、終わったな

ズドオオンと大きな音をたてて墜落した一夏。

シールドエネルギーで守られている以上、間違いなく無事だろうが一応見にいくでしょう

「ISを装備していて怪我などするわけがないだろう・・・」

一夏の作ったクレーターの中から聞こえてきたのは簞の声。

「あら、篠乃之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

反論するセシリア。クレーターの中は修羅場状態みたいだ

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりはマシですわ」

恋する乙女って怖いな・・・

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている」

恋する乙女たちを除けてもっと怖いのが来た

「・・・なにか言いたげだな鶴来？」

「いや、特には」

意図も容易く心を読むなよ。プライバシーもあつたもんじゃない

「そうか。織斑、鶴来、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになったらう」

「は、はあ」

次は武装の展開か

「織斑、返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「鶴来、返事は」

「はい。了解です」

「よし。でははじめろ」

イメージは簡単。傘だ。傘を想像すれば・・・

(来い・・・！)

手のひらから光が放たれ、しばらくしてそれが消える頃には驟雨が呼び出されていた

よかった。上手くいかなかったらどうしようかと

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

0.5秒で出す意義ってあんのかな

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

——速い。その一言に尽きる。

手が光ったかと思ったたら既に銃が握られていた。

「はええな。正直、武器一個な俺らに展開速度はそこまで関係ないが、あれぐらい速くなりてえな」

「ああ、どこら辺で役に立つかわからないけど、速くなりたいな」

武器一個っていろいろ損してるよな

「セシリア、次は近接用の武装を展開しろ」

「は、はいっ」

銃器を『収納』^{クローズ}して近接用武装を『展開』^{オープン}させようとしているセシ

リア

だがなかなか上手いかならしく、手から放たれてる光が蛍が飛び交ってるみたいになっている

「まだか？」

煽る織斑先生

「す、すぐです。——ああ、もうっ！《インターセプター》！」

上手くいったみたいだ。セシリアの顔は浮かばれないが

「・・・何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入られません！ですから、問題ありませんわ！」

「私が見た試合では全戦において懐に入られていたようだが？」

言うまでもなく俺と一夏の事だな

「あ、あれは、その・・・」

論破されるセシリア。自分の非は認めようぜ

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、鶴来、グラウンドを片付けておけよ」

「ええっ！？穴開けたの一夏じゃないですか！」

「お前、遅刻したよな？その罰だ。まあ『別の罰』が良いというなら私も考えるが・・・」

「いや、これやります」

『別の罰』間違いなくこれは危険な罰だ

「・・・はあ」

「ため息ついてもしょうがない。やろつぜ」

「だな」

途方もない穴埋めが始まるのであった

ある日の学園（後書き）

感想お待ちします！

新風は嵐が如く（前書き）

間に合わず

新風は嵐が如く

「ねえ、2人とも、転校生の噂聞いた？」

朝。席で眠気と戦っていると、隣の女子から話しかけられた。

「転校生？今の時期に？」

「わざわざハードな試験をクリアして転入してきたのか」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

そいえばうちのクラスにもいたな。

素人相手に試合で負けて大分お株の奪われた代表候補生が。

「あら、わたくしの存在に今更ながら危ぶんでの転入かしら」

それなら間違いなく取り越し苦労だな。

「このクラスに転入してくるわけではないだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

何故か一夏の周りに集まるセシリアと篤

2人ともほんと一夏が好きなんだな

「どんなやつなんだろうな」

「ああ、確かに気になるな。後で見にいつてみるか」

他の代表候補生もみんなセシリアみたいな性格なのかとかな

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗選があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのセシリア・オルコットに務めさせていただきますわ」

2人とも必死だな。

ごめん。なんか邪魔したくなっちゃうわ

「1年で専用機持ち自体少ないんだ。別にそんなに熱を入れて練習をする必要もないだろ」

「うん、今のところ専用機持ちのクラス代表はこと4組だけだから、余裕だと思うよ」

正直、一夏が勝とうが負けようが知ったこっちゃないけどな

「——その情報、古いよ」

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できなから」

ドアにもたれて話す強者な風格の少女

もうちよつと身長があれば様になるんだろうが、どこか物足りない

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国の代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ああ、こいつが噂の・・・。

なんか代表候補生って変わったやつしかいないのかな

「何格好つけてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなつ・・・！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

セシリアと箒が誰そいつ的な視線を一夏に送っているが、本人は視線に気付く筈はない。だって一夏だもの

「おい」

「なによ！？」

バシンッ

織斑先生の出席簿が唸る。

転入初日でずっこけすぎだろこの子

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

命令ラッシュ。逆らおうものなら出席簿の餌食になるだろう

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

ダッシュして帰っていく代表候補生2。
なんとも間抜けな姿である

嵐みたいな子だったな

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で——」

その他クラスメイトの興味質問の数々。

そこで騒いだ生徒が織斑先生の出席簿によって制裁されたの言うまでもないだろう……

現在昼放課

食堂へ移動すると、さっきの転入生がいて、一緒に昼食をとることになった。

一夏はその少女と思い出話に花咲かせており、俺はセシリアと筈と

話をしている

「……で、どう思われますの？」

「絶対的な自信はないが、クロだな」

今はこの転人生が『一夏に惚れているか』を談義している

「……私もそう思うな」

「はぁ……また倍率が増えましたわね」

因みに俺はこの2人を適度にサポートし、邪魔する。そんな微妙な立ち位置だ。
楽しいからいいけどね

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

しびれを切らした筈が一夏に問いかける

「そうですわ！ 一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの！？」

続くセシリアの直球

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染みだよ」

……安心の一夏クオリティ

俺はこの先ここは修羅場化するだろうと予想し、その場を後にした

新風は嵐が如く（後書き）

感想お待ちしております

・鳳鈴音・

その日の夜。

「――で、その中国の代表候補生様が俺の部屋に何の用だ」

部屋でくつろいでいると昼間の中国の代表候補生、鈴が部屋を訪ねてきた。

そこで改めて自己紹介をして今に至る訳だ。

「部屋に来たのは事実だけど、別にアンタに用はないわ。・・・夏いる？」

出来ればもつとオブラートに包んで言って欲しいもんだ

「ああ、いるな」

「ちょっと呼んでくれない？」

「いいけど、どうせだったら中で話してったらどうだ？個室のが話しやすいし」

ドアを開け、鈴を招き入れる

「じゃあお言葉に甘えさせてもらっわね」

「一夏、俺ちよつと出掛けてくるわ。それと、お前にお客さん来てるぜ」

「・・・意外と空気読めるのね」

意外とは失礼な

「お前の思い人が異常なぐらいに鈍いだけだろ」

部屋を後にする。

さて、どこで時間を潰したもんかね・・・

ベンチで寝そべって天体観測なう

・・・あれからどれくらい経っただろうか。

すっかり時間を計っていないので正確にはわからないが、だいぶ時間が経ったのは事実だ

「・・・何してんの？」

なんとも元氣のない声がかかる

「何って、星を数えてんだよ」

起き上がり、声の方へ向き直ると、そこには声同様に元氣のない、鈴がいた

「ふっん」

そこで途切れる会話。

・・・何があつたか聞いてみるか

「で、なんかあつたのか？」

「・・・アンタには関係ないでしょ」

今にも泣きそうな声色の鈴。

何があつたのかは知らないが、さっきの事が思い出されたのだろう

「関係ないって・・・ちょっと傷付くぞ。でも、関係ない相手だからこそ話せる事もあるんじゃないのか？」

昨日今日の仲の俺が言うべきことではない気がするが

「あいつは・・・一夏は、私との約束忘れちゃったのよ！」

話す気になってくれたのは嬉しいが、話が飛躍しすぎていてわからない

「まあ、落ちついて一から話してくれよ。時間は沢山あるんだから」

——そうして俺は鈴の昔話を聞かせてもらうことになった。

中学校の頃、いじめられて一夏に助けられたこと。

いろいろあるうち一夏に惚れていったこと。

親の離婚と転校のこと。

・・・約束のこと。

「・・・ありがとね。こんな夜遅くまで付き合ってくれて。やっぱり一夏は許せないけど、少し気持ち落ち着いた」

「話を聞いたただけだ。例には及ばんよ」

「最初はいつまんで必要最低限だけ話すつもりだったんだけど、気がついたら全部話してた。聞き上手なんじゃない？アンタ」

お前の一夏への愛は凄く伝わった

「そう言われると照れるぜ」

「真顔で言われても説得力無いわ。・・・じゃあ私は部屋に帰るわね。アンタも直ぐ帰んなさいよ」

そう言って別れ、各々自分の部屋に帰って行った

「おかえり。なにやってたんだ？」

手の形に顔が腫れている一夏に出迎えられる

「天体観測かな」

「俺はこれから寝るけど、お前はどつするんだ？」

どうやら帰ってくるまで待っていてくれたらしい。
まあ元々お前のせいで帰りが遅くなっただけなんだが

「俺はもうちょっと起きてるよ」

「わかった。夜更かしは程々にな」

「ああ、わかつてる」

まあ少しクラス対抗戦の相手を変えちゃうだけだし、そんな時間はいらないだろう・・・

——翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙。
表題は『クラス対抗戦日程表』

一夏の相手は・・・鈴だ。

「変な偶然もあるもんだな」

実は必然だったりするわけだが

「ああ」

・鳳鈴音・（後書き）

感想おまちしてます！

V S 代表候補生（前書き）

てんぽわりい

V S 代表候補生

それから数週間後。

俺はアリーナで鈴と模擬戦をしていた

「ていうか、アンタこんなことしていいの？」

双天牙月を連結させ、投げつけながら話しかけてくる鈴

「っ——こんなことって？」

それを回避し、武器を失った鈴の懷へ潜り込み驟雨を振るう

「敵と模擬戦なんてしてていいのかって聞いてんのよっ……！」

鈴は後ろへ下がり俺の攻撃を回避。

そして目に見えない衝撃砲、龍砲を放つ

「別に問題ないだろうよ。俺はフリーパスとやらには興味はないからな」

緊急で後ろに下がり、見えない砲弾をなんとか回避し、後ろから回り込んできた双天牙月を驟雨で叩き落とす。

「そう。まあ練習相手として申し分ないからいいけどね」

驟雨を振った隙について何発かの龍砲を撃ってくる
回避は間に合わない……か

——驟雨を開いて全ての龍砲を凌ぐ

「代表候補生にそう言って貰えると嬉しいねえっ」

驟雨を開いたまま鈴の方へ突進する。

ギアは『爆』に

「くっ・・・！」

驟雨自体はギリギリのところで回避されるが——

「捉えたあっ」

——残念ながらそこは爆発の範囲内
トリガーを引き驟雨を爆発させる。

ドオンツという爆裂音を立てて爆発する驟雨
爆風に巻き込まれ吹き飛ばされる鈴

「くうっ・・・いったいわねえ」

「やっと、当たったな」

40分近く戦い続け、お互い通算して今のが初ヒットだ。
今ので決まればどれだけ楽だったか。

「アンタが避けるから当たないんでしょうが！」

「理不尽すぎて涙が出そうだ」

お互いの攻撃が当たらない主な原因は、俺は灰蓮をほとんど使いこなせていなく、スペック上は上回っている筈の甲龍に後れをとっている。故に鈴に攻撃が当たらない。

鈴は甲龍を使いこなせているし、技術もかなりの腕前なのだが、直情的すぎて攻撃する前から、どこを狙ってくるかわかってしまう。故に俺に攻撃が当たらない。

はあ・・・長い戦いになりそうだ

アリーナのピットにて

あの後、数時間戦ったのだが、2人ともそれ以降攻撃は一切通らず、結局決着はつかなかった。

「なあ、今のって俺の勝ちでいいのか？」

「はあっ！？あんなまぐれ当たりで勝った気になってんじゃないわよ！」

数時間ずっと避けられ続けて相当頭に血が上ってるみたいだな

「運も実力の内っていうじゃないか」

「くっ・・・次は必ず勝つわ！覚えてなさい」

こんな長時間戦闘は初めてだったが、凄く疲れた。

今度鈴にもう一度やろって言われたら、間違いなく断るだろうな・

・

「まあ、楽しみにしとくよ」

・・・断れる自信はないが。

「・・・じゃあ、クラス代表選頑張れよ。俺はお前の応援してっから、気持ち程」

「アンタに応援されてもされなくても勝つことに変わりはないわ」

戦ってみていろいろ鈴と甲龍に問題点が見受けられたが・・・指摘すんの面倒くさいしいかな。

「一夏にお灸をすえてやってくれ」

「任せておきなさい。ぼっこぼこにしてやるわ」

昨日一夏の特訓を見に行ったが酷いったらなかったからな。

あんな特訓じゃ鈴には到底敵いそうにない。

精神的にも、肉体的にも痛めつけられるわけか。

ご愁傷様です一夏さん

「ああ、対抗戦だし、多少痛めつけるぐらいなら問題ないだろうさ」

「アタって・・・結構腹黒いわね」

「気のせいだ」

明日からクラス対抗戦か――

V S 代表候補生（後書き）

感想待ってます！

闖入者 前編（前書き）

無駄に長くなったので分割

闖入者 前編

数日後、試合当日。

第二アリーナピットにて

現在幕、セシリア、山田先生、織斑先生とモニターを見ている

モニターに映し出されているのは、一夏と鈴。

空中で向かい合い、にらみ合っている

「鶴来、お前はこの試合をどう見る？」

不意に織斑先生が話しかけてくる

「どうって言われても、あのISを見るのは初めてですし、なんとも言えませんね」

「この間アリーナで激戦を繰り広げていたのによく言う」

お忍びで行ったんだが、ばれていたらしい

「・・・見てたんですか？」

「お前たちは気付かなかったようだが、あの模擬戦の観戦者は沢山いたぞ」

「そうなんですか。手一杯で気付きませんでした」

なんか気恥ずかしい

「で、お前はこの試合どちらが勝つと思う?。」

「一夏、と言ってやりたいですが、残念ながら、鈴が勝つと思います。」

「ほう、どうしてそう思う?。」

俺の感想なんて聞いてもしようがないと思うけどな
俺よりこの人の方が熟練者なんだし

「単純に熟練度の差でしょうか。俺はあいつと模擬戦してみてそれを凄く感じました。」

「まあ、確かに。凰は代表候補生だからな。『熟練度では』天と地ほどの差があるだろう。」

まるで一夏が勝つと言いたげな物言いだ

「・・・織斑先生はどっちが勝つと思うんですか?。」

「織斑だ。」

なんの迷いもなく言い放つ。

「よっぽど信頼してるんですね。根拠はあるんですか?。」

「決まっている。私の弟だからな。」

何が決まっているのかさっぱりわからないけど、織斑先生の弟愛は伝わった

『一夏、今誤るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてもいいわよ』

突然聞こえる鈴の声。

オープン・チャンネル
どうやら解放回線で一夏と会話しているらしい

『雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い』

『一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、ダメージを貫通させられる。つまり殺さない程度にいたぶる事は出来るのよ?』

確かに事実だがそんな事言ったら、このアリーナに溢れんばかり居る観客に外道だと思われるぞ。

『それでは両者、試合を開始してください』

流れるアナウンス、鳴り響く試合開始のブザー。

一夏と鈴の試合が始まった・・・

「すげえな一夏」

試合開始後数分。

正直、瞬殺されるのではないかと思っていたが、思いの外一夏は頑張っていた。

ていうか初見殺しの初発龍砲以外の攻撃を受けていない

バリア無効化攻撃の零落白夜さえ当てれば勝てる一夏

もしかしたら織斑先生の言ってたように一夏が勝つかもな。

問題は『どう当てるか』だが

「決まっていますわ！なにせこのセシリア・オルコットがコーチして差し上げたんですもの！」

「何を言っている。一夏の指導をしたのは私だ」

口喧嘩を始める自称コーチ達。

まったく元気のいいことで。

『鈴』

オープン・チャンネルを介した一夏の声

『なによ？』

『本気で行くからな』

『な、なによ・・・そんなこと、当たり前じゃない・・・。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！』

次で試合が決するみたいな雰囲気漂っている。
さて、どっちが勝つか・・・

『うおおおおっ!』

一夏は目にもとまらぬ急加速をし、鈴との距離を詰め、一閃する

ズドオオオオンとアリーナに響く衝撃音。

ステージ中央からあがる土煙

「・・・なんだありゃ」

『何か』がシールドを破って突入してきたらしい

「正体不明のISがシールドを突き破って入ってきたみたいです!」

早口に説明するのは山田先生。

闖入者の登場と、一夏達が交戦しようとしていることに相当焦っている

「援軍に行った方が良さそうですね」

遮断シールドを破るような威力を持っているんだ。

戦闘疲労もある二人が戦って勝てるとは思えない。

「先生! わたくしにIS使用許可を! すぐに出撃できますわ!」

「そつしたいところだが、————これを見る」

表示されたのはアリーナのステータスチェック。

遮断シールドはレベル4。ついでに扉が全てロックされているらしい

「・・・ちよつとどいて貰えますか」

ブック型端末の前に立つ織斑先生にどいてもらう

「何をする気だ？」

「システムに介入して遮断シールドと扉のロックを解除します」

「今年3年の精鋭がやっている。お前が加わったところで付け焼き刃なだけだ」

実績のない俺は信じてもらえない・・・か。
信じてもらうには『アレ』を言うしかない

「俺を信じてください。俺は——」

実績がないなら——

「篠乃之束の助手です」

——人から借りるまでだ

闖入者 前編（後書き）

感想待っております

闖入者 後篇（前書き）

改行増やしてみた

闖入者 後篇

「・・・わかった。そこまで言うのならお前を信じよう」

束さんの名前が出たことに啞然としている、山田先生とセシリア。織斑先生と箒は、俺が何らかの関わりを持っていることを知っていたので、そこまで驚いていないみたいだ

「ありがとうございます。セシリア、いつでも出撃できるよう準備しておいて」

「わ、わかりましたわ!」

椅子に座り、システムクラックを始める

「す、すごいです! さっきまでの10倍以上のスピードで解析が進んでいってます!」

「あと30秒もあれば遮断シールド解除出来ます。扉のロックはそこからさらに30秒後に終わると思います」

黙々と手を動かす。

――遮断シールドの解除が終わる。

「セシリア、もう出られる筈だ。それと、出たら戦闘圏外で高度を保ち待機しててくれ。指示は追って出す」

「了解ですわ」

扉のロックも解除出来た。

さて――

『一夏、鈴、聞こえるか』

オープンチャンネルを飛ばす

『聞こえてるわ』

『南戸か、なんだ？出来れば手短に済ませてほしいんだが』

口調からある程度の余裕はあったことがわかる。

『今から突撃して零落白夜を決めてくれ。隙は俺が作る』

『はぁっ！？どうやって？』

そう言うのは一夏。まあ当然の反応か
だが、いちいち説明できるほど時間はない

『説明するほど時間はない。・・・俺を信じてくれ』

『わかった。信じる』

えらくあっさりしてんな
それだけ信頼されてるってことか

『ありがとよ』

「何をする気だ鶴来？」

後ろからの声
織斑先生だ。

「あのISのシステムを乗っ取って、ほんの数秒だけ機能を停止させます」

「そ、そんなこと出来るんですか!？」

食い入るように聞いてきたのは山田先生

「向こうからこちらに介入出来たんですから、無理なんてことはないですよ」

「束の助手か。ハッターだと思ったんだがな」

「あれはハッターです。まあ束さんのところで働いていたのは事実ですけど」

嘘半分、本当半分って感じだな

『2人とも、上空に居るセシリアの銃撃を合図に突っ込んでくれ』

『『了解』』

ステージの2人に指示する

『今だ撃て！セシリア』

敵ISが鈴の龍砲を回避して体制を崩したところで、セシリアに指示を飛ばす

『了解ですわ！』

セシリアの長銃から放たれるレーザー砲。

当たりはしなかったが、それを合図に突撃する鈴と一夏。

そいつが鈴の大振りを避けたところで、システムを乗っ取る

『行けえっ！一夏っ』

重なる俺と鈴の声。

想いに応えるが為、振るわれる一夏の剣。

その剣に貫かれた機体は、完全に機能を停止した。

「ふーっ。なんとかまりましたね」

座っている椅子の背もたれに、思い切りもたれかかる。

あー眠い・・・今日は沢山頑張ったし、このまま寝ても怒られるなんて事は無いだろう。

だから、このまま、寝てしまおう・・・

「ほんとに寝てしまった・・・」

周りを見た感じ保健室みたいだ。

「おう、南戸。無事か？」

そう隣から声がかかり、横を向くと一夏がいた。

「そう言うお前は死にかけてるな」

一夏は全身包帯ぐるぐる巻きでミイラみたいになっていた

「ああ、止めを刺しそになってこの様さ」

俺が寝てしまった後にまた再起動したってことか。
恐ろしい粘り強さだ

「・・・で俺はどうして保健室に？」

ほんのちよつと昼寝をしただけなんだが・・・

「それは――」

「それはお前が倒れたからだ」

俺の問いに答える織斑先生。
立ち位置的にさっきからいたらしい。

「倒れた？寝たんじゃなくて？」

「ああ、突然倒れたんだお前は。診断によると急激な脳疲労によるものらしい」

そんな疲労させてたのかアレ。
本人は全然平気だったけどな

「へえ・・・そんなに脳が疲れてたんですか」

「スーパーコンピューター並みの処理速度だったんだ。疲れない方がおかしい」

「まあ、お前ら2人は、ゆっくり療養している」

そう言って出ていく織斑先生

「さて、俺はもう少し寝る事にするよ。脳が疲れてるらしいし」

そこで俺の意識は途切れた――

「おい」

・・・声がする

「おいって」

「・・・何だ？」

上半身を起こしながら声に応える
起き上がって見えた世界は、どこまでも灰色だった。

「おお、起きたか、わが相棒よ」

声の発信源は目の前の瓦礫の山の頂上。
そこに居たのは、身近で見なれた顔。
つまるところ俺だった。

「誰だお前」

「誰だと思う？」

わからないから聞いているんだろ

「ドッペルゲンガー」

「ちつつち、残念ながら不正解だ。この姿は、あくまでお前の姿を間借りしてるだけに過ぎんのだよ」

指を振っている俺。
すぐく見えて腹立つ

「じゃあ、正解は？」

「お前の相棒とだけ言っておこう」

・・・わからん

「で、その相棒のお前は俺に何の用だ？」

「警告さ。今回お前は力を使いすぎた。使うときはもっと加減して使った方が良い」

さっぱり理解できない

「力？加減？何の話だ」

「・・・そのうちわかる」

「その時に説明してくれないと忘れるぞ。俺は」

「憶えているさ。俺はお前の事を一番良く理解しているからな」

そりゃあ見てくれは俺だからな

「お前の力に限界は無い、だが人間の体には限界がある。加減を間違えれば死ぬ。それだけは忘れるな」

「善処する」

「・・・さて時間だ。なあに、寂しがらずともまたすぐ会えるさ」

灰色の世界に光が射す

もう1人の俺はその光に吞まれ消えていった

「不思議なくらい寂しくないな」

視界がどんどん狭まり・・・
意識が途切れる――

――朝

窓からは陽が差し込み、清々しい気分で起床する

「なんか、酷い夢を見ていた気がする」

夢の内容は憶えていない。

さほど気にもならないし、午後にもなれば夢を見ていたという事さえ忘れるだろう。

何か重要な事を忘れたような気がするが・・・

闖入者 後篇（後書き）

感想待ってます！

人の恋路（前書き）

感想待っております

人の恋路

数日後のあくる日。

俺はセシリアと夕食を食べていた

「——で、南戸さん、聞いてらっしゃいますの？」

あの正体不明のIS襲撃の一件以来、俺の呼称は呼び捨てから『南戸さん』にランクアップした。

わりと友好的にも接するようになり、こうやって食事を一緒にすることも少くない。

「ああ、聞いてるよ。気持ちほど」

大体一緒に食事をするときはセシリアが一方的に話をする感じた。話の内容は惚気、愚痴、ISと様々だが、基本的に一貫して一夏が話に出てくる。

「あら、そうでしたか。どこか上の空でしたのでつきり聞いてないものかと」

「安心しろ。ばっちり聞いてるから」

「・・・南戸さんはどうすればいいと思われませんか？」

因みに現在の談議内容は『競争率の高い一夏と如何にして二人きりになるか』だ

「学園内で二人きりになるのは不可能だろうな。そうだな・・・シヨッピングとかに誘ってみたらどうだ？」

「なるほど、シヨッピングですわね」

メモを取っているセシリア。
健気だな

「俗に言うデートだな」

「デ、デート・・・。そ、そんな大胆な行動をとって気取られたりしないのでしょうか？」

「気付かんだらうな。一夏だし」

あいつは『私は異性としてあなたが好きです』とでも言わない限り

周りの人間の好意には気付かんだろう

「ああ、一夏さんですものね」

「え？俺が何だって？」

いつの間にか居た一夏
その後ろには鈴もいる

因みにセシリアは驚きで椅子から転げ落ちている

「いやあ、一夏って鈍いなーって話をしてたんだよ」

「失礼な。俺はなかなかに鋭いぞ」

「「どこが（ですの）！？」「」」

鈴、セシリアの鋭い指摘
ほんとこいつら苦労してんな

「あ、箒発見」

箒を見つける

「・・・・・・・・」

見つかってしまったみたいな顔をしている箒。
言わなかった方が良かったか

「よ、よお、箒」

「な、なんだ一夏か」

ギクシャクしたやり取り
なんかあったのだろうか

「何、あんたたち何かあったわけ？」

「いや！別になにも！」

それは何かありましたって言ってるようなものだろ

「箒選手は一步リードしてるみたいだな」

「・・・何の話だよ」

「お前にはわからんだろうよ」

「その『明らかに何かありました』って反応はわざとやってますの
!?!」

話を戻すセシリア

「そんなわけないだろ・・・」

箒の方はそんなわけないと言っ反応が気にいらなかったらしく、拗
ねてどこかへ歩いていってしまっ

「・・・そいじゃ俺も帰るとするよ。皆さんぐっすり」

箒を見送った後、俺も帰路につく

「あ、南戸さん、アドバイスありがとうございました。参考にさせ

「ていただきますわ」

ぺこりと一礼するセシリア

「おう、俺でよければいつでも相談乗るからな」

「アドバイス？なんの？」

「そ、それは・・・その・・・」

首を突っ込む一夏、どもるセシリア

「ああ、ISのだよ」

「・・・なるほど」

「ま、精進したまえ」

そう言い残し

1人寝室へ戻っていった

人の恋路（後書き）

次回でヒロイン全員そろいますね

・シャルル・デュノア・

その次の日

俺は朝からまたグラウンドで正座をさせられていた
俺の前に立つは鬼軍曹

「何回目だ・・・？」

ゴゴゴゴという効果音が織斑先生のバックから聞こえる気がする

「え、えっと、7回目ですかね」

鯖を読もうものなら八つ裂きにされる気がしたので本当のことを言う

「お前のその寝坊癖はなんとかならんのか」

「いや、でもホラ見てください。前までは数時間単位で遅刻してたのに、今回は30分じゃないですか！」

バシッと頭を叩かれる

血が出てもおかしくない威力だと思うんだよねコレ

「遅刻は遅刻だ」

「・・・はい」

非情にも社会で求められているのは過程でも努力でもなく、結果なのである

「もついい。とつとと着替えてこい」

「了解です」

正座でびりびりとする足に無理をさせながら、更衣室へ走る

着替え終わり、みんなが整列しているところへ加わる

「また遅刻ですね」

そう言うのは隣のセシリア。
どこか言葉が刺々しい。
俺のいないうちに何かあったみたいだな

「頼むから朝に一夏を連れ出すのはやめてくれ・・・」

「今回はわたくしではありませんわ。わたくし、南戸さんのことも
考えて、一夏さんを朝連れ出すのは遠慮してますもの」

箒はあのギクシャク状態だし・・・鈴か。
あいつ俺が朝に弱いって知らないもんな。
まあ仕方ないか

「君が鶴来くん？」

後ろから呼ばれ、振り返ると

「・・・どちらさま？」

知らない子がいた。

一組の全員の顔と名前は一致している。

二組は名前まではわからないものの、一応全員の顔を覚えている。
だがこの子は知らない

「今日転校してきた、シャルル・デュノアって言います。これからよろしくね」

・・・デュノア？

どこかで聞いたことある名前だな
まあいいか

「ああ、よろしく。俺は鶴来南戸。南戸で構わんよ」

「うん。わかった南戸。僕のことシャルルでいいよ」

「・・・僕？」

僕っ子かこいつ。
初めて見たよ

「たぶん勘違いをされてらっしゃるでしょうから、補足させていただきますと、その方は男子生徒でしてよ？」

「ええっ！？マジか」

「う、うん。本当のことだよ」

本人の肯定

「ごめんごめん。完全に女の子かと思ってたよ」

「そ、そ、そんなわけないじゃん！僕は正真正銘男の子だよ」

これでもかというぐらいの完全否定
ちよっとしゅんとする

「遅刻してきたうえにおしゃべりとはいい御身分だな」

背後から鬼神の気配
バシンッ

「・・・では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「今日は戦闘を実演してもらおう。——凰！鶴来！それとオルコット！デユノア！」

・・・予想はしてたさ

「な、なぜわたくしまで!?!」

「なんでアタシが・・・」

とぼっちりご愁傷様です

「専用機持ちはすぐはじめられるからだ。いいから前へ出る」

「なんか悪いな」

とりあえず転校早々厄介事に巻き込んでしまったことをシャルルに謝る

「ううん、いいよ。一緒に話してた僕も悪いんだし」

本当に男なのか疑問になるくらい、非常にいい子である

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

いつの間にかボルテージがあがっている二人
何か吹き込んだなあ先生

「では、これからお前らにチーム戦を行って貰う。チームは・・・
うまいこと別れているし、オルコットと凰、デュノアと鶴来でいい
だろう」

すごく適当だな

そんな決め方でいいのか？

「あたしはそれでいいわ。この前うやむやになったままの試合の続きが出来るからね」

「わたくしも異存ありませんわ。南戸さんにリベンジできますし、

転校生達にわたくしの力を見せてつけておくいい機会ですから」

「俺もこれでいいです。シャルルと親睦を深める事も出来ますし」

正直あの協調性のない2人と組むのだけは勘弁願いたい

「あ、僕も問題ないです」

「そうか。では、はじめ！」

その号令を合図に一齐にそれぞれのISで空に飛び立つ四人

ある程度の高さで停止し、相手の出方を見る

『シャルル聞こえる?』

プライベート・チャンネルをシャルルに飛ばす

『うん。聞こえてるよ』

『作戦だが、一対一じゃ正直勝てる気がしないから、二人で一人ず

つ潰していこう』

『でも二対一なんて状況作り出せるのかな？』

当然の疑問だ

普通は二対一なんて状況にならないようパートナーがカバーしてくれるものだしな

『それなら問題ない。間違いなく二対一の状況にもっていける』

このチーム分けになった時点で二対二ではない。
二対一対一だ

『じゃあどっちから狙うの？』

『まずは鈴——黒い機体の方からだ。もう1人の方は遠距離型機体だから、黒い奴を盾にするように立ち回れば攻撃はほとんど出来ないと思う。それと俺、近接装備しかないから後方支援を頼むぜ』

『うん、わかった。支援は任せて』

物分かりが良くて助かる

『・・・んじゃ、手筈通りに』

結論としては俺達は圧勝した

あまりの2人のチームワークの無さによって。

「くっ、うっ・・・まさかこのわたくしが・・・」

「あ、アンタねえ・・・何面白いように回避先読まれてんの・・・」

「

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

墜落時に出来たクレーターで口げんかをしている2人
なんとまあみっともないったらない。

「さて、専用機持ちは織斑、オルコット、鶴来、デュノア、ボーデ
ヴィツヒ、凰だな。では7人グループになって実習を行う。各グル
ープリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

・・・ボーデヴィツヒさんって誰だろう

「織斑くん、一緒にがんばろう！」

「鶴来君さっきカッコよかったよ」

「デュノア君も！」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいれて！」

わらわらと詰め寄ってくる女子たち。

好意は嬉しいけどこんなに来られると酷く困る

「この馬鹿者どもが・・・。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド100周させるからな！」

織斑先生の一言により、蜘蛛の子を散らすが如く移動していく女子達。

それぞれ専用機持ちグループは二分とかからず出来あがった

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

お勤めご苦労様です。鬼軍曹

「・・・よし、ちゃっちゃんと始めますか」

「では、午前の実習はここまでだ。午後は使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別で集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

午前の授業は滞りなく進んだ。

一部の人を抱つこでISに乗せなければならなくなったりしたが、まあ別に重労働ってわけでもないので許容範囲だ。

「ああ、鶴来。それ、片付けておいてくれ」

織斑先生が指さす先には、さっきセシリアと鈴が墜落したとき出来たクレーター！。

・・・またなんですか

- シャルル・デュノア - (後書き)

感想待っております！

・ラウラ・ボーデヴィッヒ・（前書き）

感想お待ちしております

・ラウラ・ボーデヴィツヒ・

昼放課。

またクレーターを埋め立てる羽目になったが、シャルルの手伝いもあり、わりと早く終える事が出来た。

今は食堂でシャルルと昼食を食べている。

一夏も手伝いに名乗りを上げたが、箒が昼食に誘っていたことを知っていたので断っておいた。

「社長の息子ねえ……。確かに言われてみればそんな感じだな」

話の内容は自己紹介だ。

シャルルはデュノア社社長の御曹司で、男なのにISに乗れるらしい。

それで同じ男性IS乗りである一夏のいるこの学園に転校してきたそうだ

「え？どんな感じ？」

「なんか苦勞してるって顔してるぜ。お前」

「そ、そっか。・・・苦勞かあ」

なんとも複雑な顔をしている。
地雷か。地雷なのか

「ま、学園に居る間いろんなこと忘れて、ぱーっと青春を謳歌しようぜー!」

「うん。・・・そうだね」

どこか遠い目をしているシャルル
回避しようとしたらまた地雷を踏んでしまったみたいだ

「——おい、お前」

「・・・ん?」

呼ばれて振り返ってみたら銀髪的眼帯少女がいた

「えーっと・・・?」

「・・・」

声を掛けてきた本人はだんまりしている。
すごく困る訳だが

「……………気のせいかな」

そう言って立ち去ろうとする銀髪さん
いやいやいや、気になっちゃうだろ

「ちょっと待って」

咄嗟にその銀髪少女の手を掴む

「「——っ!?!」」

『——加減を間違えば死ぬ。それだけは忘れるな』

バチッと手に静電気が走ったような感覚にその場を飛び退く。
どうやらその銀髪少女の身にも起きたらしく、ポカンとしている

それに、頭の中で聞こえた声……何が起きたんだ

「ど、どうしたの2人とも!?!」

突然俺達が哑然としたことに、心配になったシャルルが問う。

「・・・・・・・・・・」

立ち去っていく銀髪少女

「あっ、おいっ！」

言葉で引きとめようとするも、引き止める事は出来なかった。

「い、行っちゃったね、ボーデヴィッヒさん」

「・・・・・・・・知り合いなのか？」

ボーデヴィッヒ。

名前だけは、さっきの授業の時に聞いたな

「うん。ラウラ・ボーデヴィッヒさん。僕と一緒に今日転校して来た子だよ」

ラウラ・ボーデビッヒ か憶えておこう――

夕刻自室

「――ということで俺はこの部屋からさらばすることになったぜ！」

ズビシイと人差し指を一夏に向ける

補足説明をすると、俺はシャルルと相部屋になった。

織斑先生曰く遅刻が無くなるようにと思っただけらしい

なんとも情けない話だな

「もう二度と貴様に竹刀で滅多打ちにされながら起きるような、陰鬱とした朝は来ないだろうさ」

「……そもそもこの部屋に竹刀ねえよ」

「まあ、なんだかんだで世話になったな。一応礼を言っておこう」

「達者でな――」

そんな一生の別れみたいなやり取りをした後、荷物を持って部屋を後にする――

「あら、南戸さん。どこかへお出かけですか？」

道中にセシリアに出会った

「人事移動だ。俺はシャルルの部屋に移動するから毎日でも朝に――夏を連れ出してもいいぞ」

「ほ、本当ですよ！？」

「俺は構わんよ」

・・・一夏はどうか知らないが、きっと大丈夫だろう

「一夏の部屋は1人部屋。そして今その事を知っているのはお前だけ。2人きりになるチャンスだと思うぜ？」

「感謝しますわ！南戸さん。それではわたくしはここで」

そう言って足早に歩いていくセシリア
まあ、ファイトだな

「おう、じゃあな」

恋する乙女を見送り、俺はニューホームへ向かう

ニューホームで談話中なう

「なあ、シャルル」

お茶を飲んでいるシャルルに問いかける

「うん？なにかな？」

「もう寝るんだけど、俺朝弱いから起こしてくれると凄く助かる」

シャルルに起こしてもらおうよう頼んでおう

「ああ、うん、織斑先生から聞いてるよ。起こせばいいんだよね」

流石織斑先生。手回しが早い

「そういえば南戸、いつも放課後にISの特訓しているって聞いたけど、そうなの？」

「ああ、特訓と呼べるかは微妙だけど、やってるな。結構な人数で」

「それ、僕も加わっていいかな？専用機あるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

専用機云々はともかく、協調性のある人が増えるのは助かるな

「ああ、是非とも頼む」

「うん。任せて」

なんとも頼もしい友人が増えた

「じゃあ俺は寝る。おやすみ」

「おやすみ南戸」

気になる事はいろいろあるが、それを意識しないようにしぐっすりと眠りについた――

大浴場解禁（前書き）

中途半端に切ると題名思いつかない

大浴場解禁

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

シャルルが転校してきて早5日。

今日は土曜日で、午後の自由時間を利用してアリーナで特訓をしている。

午前の授業が終わった後、街へ出掛ける予定だったが、俺と戦いたいと鈴に、いろいろとフォローしてほしいとセシリア、そして同伴してほしいとシャルルに頼まれ断り切れず俺は今ここに居る。

「そ、そうなのか？ 一応わかつているつもりだったんだが……」

「

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦った時もほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握してないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃出来ちゃうからね」

聞いていて、素直にああ成程って思えるわかりやすい説明。

相手のどこが悪いかを見つけるのは難しくないが、それを上手く相手に伝えられなければ意味がない。
その点でもシャルルは良教官と言えよう

「あんたもシャルルにレクチャーしてもらったら？」

隣から話しかけてきたのは鈴。

シャルルに一夏をとられ、拗ねている。
奪われた相手が女でないため、怒りのぶつけどころに困っているって感じた

「ああ、俺もこないだ見てもらったが、基本的に悪いところが見当つかないんだと」

これは俺がめちゃくちゃ優秀という訳ではなく、どこが悪いところはあるのだが、どこかわからないらしい。

「あたしは単純な経験不足だと思う」

「だよな」

ISの基本的な技術では、俺は専用機持ち組で一番しょぼい。
2番目は一夏だが、その一夏ともかなりの差が付いているほどだ。

「というかISは下手なのに回避限定ならたぶん一番上手いわよね、
アンタ」

ちなみに戦闘面では今のところ負けなしだ。
自慢になるが俺は、相手の攻撃で一度もシールドエネルギーを削られた事がない。

「それを活かせないのがなんとも勿体ないよな」

さつきも言ったが俺にはISの技術がないため、相手に攻撃を当てる事が出来ない。

鈴と戦うときは、数時間の戦闘中に一度当てられるか否かなほど下手である

「実戦あるのみよ。そもそもあんたの攻撃が当たるようになったら、
ここの中で一番強くなるんじゃない？」

「買いかぶりすぎだと思う。折角だし、一戦やろうか。制限時間は
30分ぐらいで」

『いつまでたつても決着がつかない』なんてざらにあるので、最近
は戦闘に制限時間を設けるようにしている

「そうね。・・・今度こそ、落としてやるわ」

30分のタイマーをセットして灰蓮を起動し、飛び上がる。
適当なところで空中停止して鈴を待つ

「ねえ、ちよつとアレ・・・」

「ウソっドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

ざわつき始めるアリーナ。

騒ぎの中心に居たのは――

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

――ラウラボーデヴィツヒ。

この間のことが気になり、今日までの5日間。話しかける事23回返ってきた返事は一度、『・・・・・・・・うせる』と。なんとまあ悲しいことである。

その場に居たセシリアに慰めてもらったが、その時の心の傷は計り知れなかった。

そんな彼女が一夏を睨みつけている

「おい」

「・・・なんだよ」

オープン・チャンネルで交わされる会話

一触即発な緊迫とした雰囲気。

万が一の時、止めに入るために《驟雨》を呼びだしておく

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくとも私にはある」

一夏って本当に女の子にモテモテだよな。
それが好意かは別として

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認

めない」

なんかわからないが私怨で動いているのはわかった。

「また今度な」

「ふん、ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

ラウラの機体が戦闘状態へとシフトされ、それと同時に左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴く。

間に入る必要は……なさそうだな

「！」

ガキンッ

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな？」

横合いからシャルルが割り込んでシールドで実弾を弾いたみたいだ。さて、止めに入るか

「俺の扱いとは違って偉く積極的だな。そこそこに悲しいぜ」

ラウラの少し上に停止する

「・・・邪魔だ。どけ」

「まあ、止めとけて。ここで無理にでもやりあおうってんなら、俺含む専用機持ち全員が相手になるぜ？」

言われ、鈴とセシリアもISを展開し身構える

「・・・ふん。今日は引こう」

勝てないと悟ったのか。それとも単純に興が削がれたのか、ラウラはあっさり戦闘態勢を解除させ、その場を去っていった。

「いやー怖かった。シャルルも一夏も大丈夫か？」

「うん、ありがとう。南戸、カッコよかったよ」

「ああ、大丈夫。助かった」

無事で何より

「じゃ、今日は帰ろうか。もうそろそろアリーナの閉館時間だしな」

「そうですね。あまりギリギリまで居ると、教官たちから何とも
言えない目で見られますでしょうし」

早く終われよ的な目でな

「だな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」

「それなら良かった」

「えっと・・・じゃあ、2人とも、先に着替えて戻ってて」

そう言うのはシャルル。

こいつは何かと俺達と着替えるのを嫌がる。
というか肌の露出を嫌がっている。

まあ何らかのコンプレックスがあるんだろうと自己完結して深く追及はしてないが。

「たまには一緒に着替えようぜ」

一夏、それ、フレンドシップやない、地雷や

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

一夏の事だから、そこに深い思慮はないだろうな。
親睦を深めようとかその程度の考えだろう。

「というかどうしてシャルルは俺達と着替えたがらないんだ？」

一夏、足元を見る。それは地雷だ

「……まあまあ、一夏。嫌がってんだからいいだろ。それに、

傍から見たらセクハラにしか見えないから」

一夏の首根っこを掴んでシャルルに迫っていた一夏をひきはがす

「・・・わかった、諦めるから。首つかむのはやめてくれ」

言われたので首を離す

「そいじゃあ、シャルル。先行ってっから」

「あ、うん」

それだけ言って、俺達はゲートに向かう。

「はー、風呂入りてえ・・・」

更衣室にてそう言うのは一夏。

このセリフはISの特訓をやった後はいつも言っている。
言わばテンプレってやつだ

「直に使えるようになるって山田先生が言ってただろ。それまで我慢しなさい」

毎日同じセリフを聞かされる俺としては堪ったもんじゃない。そのうち俺も洗脳されて同じことを言い始めるんじゃないかと心配だ。

「・・・よし、着替え終わり。んじゃ先行ってるな」

「了解だ」

一夏は着替え終わったらしく、更衣室を出て行ってしまう。

2人いても広いと感じる更衣室。

1人にもなれば、そのあまりの広さで寂しさがこみ上げてくる

・・・ちやつちやつと着替えてしまおう。

「あのー、織斑君と鶴来君とデユノア君はいますかー」

ちょうど着替え終わったところで、ドア越しから声をかけられる

「鶴来だけならいますよー」

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

「大丈夫ですよー」

遠くに呼び掛けるときは語尾が伸びる法則。

「そうですかーそれじゃあ失礼しますねー」

言った後ドアが開いて、入ってくる山田先生。

「織斑君とデュノア君は一緒ではないんですか？今日は一緒に実習しているって聞いてましたけど」

「2人ともさつきまでは一緒でしたが、今はバラバラですね。緊急の用事ですか？なら集めてきますけど」

正直面倒くさいが。

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、鶴来君から2

人へ伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別になると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設ける事にしました」

「本当ですか！」

ついに待ちに待ったこの日が来たか

「助かります。もう駄目かと思ってました。ありがとうございます、山田先生！」

風呂へ入れることも良かったが

俺はあの呪詛から逃れられる事の方が大きかった。

「い、いえ、仕事ですから・・・」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。そろそろ洗脳されると思ってました。本当にありがとうございます」

「そ、そうですか？そう言われると照れちゃいますね。あはは・・・」

あまりにも嬉しかったので山田先生の手を握って喜んでいる。
俺は狂喜のあまり今、いろいろまずい状況であることに気付けなかった。

「……南戸、何してるの？」

そこへ入ってきたのは俺達と時間をずらして入ってきたシャルルだった。

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるの？」

「いや、歓喜のあまりつい」

「南戸、先に戻っててって言ったよね」

なんかすごく怒っている気がするのには気のせいだろうか。

「……なんか、申し訳ない」

空気を和ませようとさっきの事を教えておこう

「そついや、シャルル。今月下旬から大浴場が使えるようになるらしいぜ」

「そつ」

絶対コレ怒ってるよな。

普段なら二、三言加えてくれるもの

「ああ、そついえば鶴来君にはもう一件用事があるんです」

「・・・用事ですか」

「ええ、詳しい事はわかりませんが、織斑先生から呼んでくるようにと言われてまして」

呼びだしか。

わりと良くあることだが、今回は思い当たる節がないな

「わかりました。じゃ、シャルル、どれぐらいになるかわかんないから、先にシャワーを使っててくれよ」

「うん、わかった」

「じゃあ、山田先生、行きましょつか」

大浴場解禁（後書き）

感想お待ちしております

ウソなんてよくつきます(前書き)

感想待っております！

ウソなんてよくつきます

織斑先生に呼び出しされた理由は、ちょっと前の学園のメインコンピュータに侵入したのはお前かと聞かれただけだった。

まあ、そうなんだが、認めると色々厄介な事になりそうだったので、違うと言っておいた。

もうちょっと食って掛かってくると思っていたが、案外あっさり信じて貰え、今は自室に帰宅中である

「ただいま戻ったぜ！」

ボタンツとドアを押し開ける。

返事はなく、室内には水音だけ響く。

・・・どうやらシャルルはシャワー中らしい

「——ん？」

やる事もないのでベッドの上に座ってボーっとしていると、シャルルのベッドの上に何か置いてある事に気づく。

何かというかただの寝巻なんだが。

うんうん、たまにあるよね。着替え自室に置きっぱにしちゃうこと。まあ着替えがないのは困るだろうから、シャワールーム前にも置

いてこよう

「シャルル―着替え持つてき忘れ．．．．て．．．．」

シャルルはちょうどシャワールームから出てきてたらしく、対面する。

「み、み、みな．．．．と．．．．?」

出てきてたのはシャルルじゃなかった。

いや、シャルルなのかもしれないが、俺の知っているシャルルではなかった。

HeではなくSheでBoyではなくGirlだった。

何が言いたいのかというと、出てきたのは．．．女子だった。

「．．．．え?」

「いや．．．．え?」

頭の中でグルグルと?が舞っている

「きゃあっ!？」

我に返ったらしい金髪女子はシャワールームに撤退する。

「……き、着替え、ここ置いとくから」

「う、うん……」

その場に着替えを置いておき、俺も脱衣場から撤退する。

「……………」

これまで色々なアクシデントや修羅場を乗り越えてきたが、こんなにも焦って頭が回らなくなったのは初めてだ。
今なら一桁の足し算でも間違えられる自信がある。

まずいますい。みるみる頭が悪くなってる気がする
落ちつけ、落ちつけ俺。

ガチャ　と脱衣所のドアが開く。

「あ、上がったよ……………」

声はシャルル。

出てきたのは女子

「
おっ」

内心はとんでもなく焦っているが、冷静を装う

—— やっぱこれは聞いておかなきゃならないことだ

「・・・シャルル・・・だよな？」

俺の中ではシャルルで固まっているのだが一応違ったら困るので聞いておく。

「
う、うん」

「なんで男のフリなんてしてたんだ？」

その勢いで一番疑問な事を聞いてみる

「それは、・・・実家の方からそうしろって言われて・・・」

実家って言うとデュノア社か。

今は経営難だったな

なるほど、大体話が見えてきたぞ

「ああ、つまるところ広告塔の役割と、白式、一夏のデータの入手か」

いや、まさか俺と同じ理由で学園に来てるやつがいるとはな。

「うん。そこまで予測できるなんて南戸は凄いね。もう南戸にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるんだろうね。デュノア社は、まあ・・・潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こいつはこいつで苦労してんだな。

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソついててゴメン」

深々と頭を下げるシャルルを、まあまあと頭を上げさせる

「ま、別に被害被った訳じゃないし構わんよ。それで？お前はこれからどうすんの」

「どうって・・・僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「おいおい、なんで俺が話す事前提で話が進むんだ？この事は誰にも言うつもりはないよ。俺は口が堅い事を身上として生きているからな」

「というか言ってもメリットないしな」

「——え？」

「シャルルがどうしても暴露してほしいって言うなら話は別だけど、そこんとこ、どうなんだ？」

「でも——」「特記事項第二、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同

意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

シャルルが反論しようとしたところで奥の手を使用する。

因みにこれは、自分が何か起こした時の為に唯一覚えておいた校則だ。

「つまり、この学園にいれば三年間は誰も手出し出来ないという訳だ。三年間もあれば、いくらでも作戦なんて浮かぶさ。浮かばないなら俺が考えてやるし」

「・・・よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

これだけ覚えてるんだけどな

「俺は天才だからな」

「ふふっ。そうだね」

やっと笑顔を見せるシャルル。

それだけで、重々しかった空気がかなり和らぐ

「まあ、ゆつくり考えてくれ。ここに残るなら、俺は歓迎するし、帰るってんなら、寂しいが大手を振って送ろう」

「うん。そうするよ」

問題は無事解決（？）

ドタバタした一日だったため疲れもあり、その日はぐっすりと眠りについた

ウソなんてよくつきます（後書き）

はい、あーんはやりたかったけど出来なかった！

緊急作戦会議（前書き）

感想お待ちしております

緊急作戦会議

ラウラ・ボーデヴィツヒ

それが自分の名前。

だがその名前には『ある一時』を除いては何の意味も持たない。

『ある一時』

教官——織斑千冬に呼ばれる時だけは別だ。

（あの人の存在が・・・強さが、私の目標であり、存在理由・・・）

一目見て。ああ、こうなりたい——と素直に思った。

私の目標は『あの完璧な織斑千冬』である。

ならばそれが完全な状態でない事を許せはしない

（織斑一夏——。教官に汚点を残させた張本人・・・）

あの男の存在を認めはしない。

（排除する。どのような手段を使っても・・・）

闘志に火を付け、ラウラは静かにまぶたを閉じる。

「みーなーとー。朝だよー」

自分を呼ぶ声と頬のピリピリとした痛みで目が覚める。

「おう、おはよう。・・・痛いです」

顔を覗き込んできているシャルル。

その両手は俺の両頬を抓っている

「ああ、やっと起きたんだね。死んでるんじゃないかってぐらい無反応だったから心配したよ」

その両手から頬は解放されたが、まだピリピリと痛みが残っている。
結構な時間抓られてたみたいだ

「おう、毎度起こしてもらって申し訳ないな」

体を起こして日頃の礼を言う。

今までは相手が男だと思っていたので、別に起こされることに何の抵抗もなかったが、女に起こされると思うと、なんか情けない気持ちになった。

「ううん、気にしないで。・・・でも何で南戸って朝起きられないの？」

そこを聞いてくるとはわかっているな。

「単純な話だ。俺が朝起きられたら、欠点が無くなって完璧超人になっちゃうからさ」

ただ単に時間に縛られた生活に慣れてないだけだ。

「あははっ、そうだね」

そう思ってるようには見えんけどな。
ま、俺も思っていないからいいけどね

「ところで、今日って何か用事あったりするのかな？」

質問に答える為に、少し考える

「うーん。昼に少しだけあるぐらいかな」

「……お昼？」

「ああ、セシリアと鈴に呼ばれてる」

なんでも緊急事態で緊急会議だそうだ。

一夏の事だとなんとなくわかったので、最初は断る気でしたが、鈴には来なかったら酢豚にされると言われ、セシリアには来るようにと頭を下げられ続けた

『No』と言えない日本人な俺には、セシリアの拝み倒しは効果観面。

つまるところ断れなかったわけだ

「ふーん、オルコットさんと凰さんとね。人気なんだね、南戸って」

聞いてきたわりにえらく素っ気ないな

「人気なのは一夏だと思うけどな」

あいつの人気は異常だと思う

「・・・どーだか」

急に不機嫌になってしまった。
ヤバい。俺なんか地雷踏んだか

「どうしたシャルル？なんか機嫌悪いぞ」

「わかんないならいいよ」

もつとぶすーつとするシャルル。
だめだ。さっぱりわからん
前はもつとこう、わかりやすい性格してたと思うんだけどな

——結局俺はシャルルの不満の種を見つける事は出来なかった

「『学年別トーナメントで優勝したら一夏かシャルルがアンタと交際できる』っていう噂が学園中で広まってるわ」

現在お昼時、鈴、セシリアと緊急会議とやらを行っている

「ほお、そいつは凄えな」

主に本人の同意もなしって所が

「それだけですの!？」

「それだけだな。俺にはあんまり関係なさそうだし」

大方被害を被るのは一夏かシャルルだろうし。
知ったこっちゃないぜ

「これを見てもそう言える?」

そう言って、一枚の表のようなものを見せつけてくる鈴。

「・・・なんだこれ？」

「学年別トーナメントの『景品』を誰にしたいかのアンケートですわ。新聞部が集計してましたから間違いはないかと思っています」

1位俺、2位一夏、3位シャルル となっていた。

俺に5割票が入っているとのことだ。

こんな状況だと、こんな人気でもなんか嬉しくない

「・・・話を聞こうか」

とりあえず多いに関係ある事はわかった。

「そこなくっちゃね」

「南戸さんにしてもらいたい事はたった一つですわ」

緊迫とした空気。

2人の言を待つ

「——南戸（さん）が優勝するのよ（ですわ）」

「・・・お前たちじゃないのか」

「あたしたちが勝ちにこだわって争えば、それなりのリスクが伴うでしょ？だから、あたしたちは最初から優勝を狙わず、あんたに優勝させる。すると、利益はないけど、リスクもなくて済むのよ」

リスクつてのは負けた時のか

つまりは勝ったら天国、負けたら地獄な賭博をやめて、勝っても負けてもノーカンになるのを選んだわけか。

「でも、もし他のやつが優勝したらどうすんだ？」

「大概あんたが選ばれるから問題ないわ」

なるほど、本気で頑張れというわけか——

緊急作戦会議（後書き）

ち

銀髪少女と黒い機体（前書き）

いつのまにか4時だた

銀髪少女と黒い機体

時は経ち放課後

「なあ、南戸ってどうやって鈴の龍砲見切ってた？」

俺は一夏と第三アリーナに向かっている

珍しいことに誰も一夏を特訓に誘っていなかったらしく、仕方なく俺が一夏の特訓に付き合うことになった。

俺は学年別トーナメントに向けて何か策を練っておかないといけないのに・・・

「なんだ、藪から棒に」

「いや、もうすぐ学年別トーナメントだろ？どうせだったら優勝狙いたいからな。今のうちに、あの見えない砲弾の対策法を聞いておこうと思って」

そつえば、こいつが優勝しても『景品』はノーカンになるよな。こいつも男だし

「ああ、なるほどな。わかった、どうやって見切ってるか教えよう」

一夏には貢献してもらおうでしょう。
ギブ&テイクってやつだな

「音だ」

「音？」

「そ、龍砲は砲弾も砲身も見えないが、砲弾の発射音は一応あるんだ。耳を澄ませば聞こえる」

本当に気持ち程度だけだね

「でも、発射音だけじゃ撃ってくるタイミングはわかってても、どこに飛んでくるかまではわからないだろ？」

「あいつは直情的だから、陽動とか回りくどい手は使わず、機体そのものを狙ってくるんだよ。だから、自分が止まってるなら、その場所から移動すれば避けられるし、動いているなら、方向転換をすれば避けられる」

「……なるほどな。そんな法則があったのか」

教えたんだから優勝してくれよ一夏。
俺はお前に賭けるからな

そんなこんなで第三アリーナに辿り着く
そこで見知った顔を見つける。

「あ、一夏……と南戸」

その見知った顔はシャルル。

俺の名前が出るまでのなんとも言えない間から考えるに、今朝の事を引きずっているみたいだ。

ただ単に俺の顔を見て思い出しただけかもしれないが

・・・なんで怒ってたのかわからないけど。

「おう、シャルル。お前もトーナメント前の特訓か？」

そんな事は意に介さず気さくに話しかける。
過去は過去。今は今だぜ

「そうだけど・・・お前もって事は、南戸たちも？」

「ああ、トーナメントに向けて、これから南戸に戦闘のレクチャーをしてもらうんだ」

一夏と模擬戦を何回かした事はあるが、全て俺は勝っている。

だが実際、こいつは当たらない『零落白夜』をバンバン使ってワールドエネルギーをギリギリまで消費するから、俺は止めを刺してるだけだったりする。

レクチャーと言っても『使い所をもう少し考えろ』としか言いようがないんだが

「実際、実力はドングリの背比べだけだな」

俺が一夏に勝っているのは戦闘面だけで、ISの使い方は一夏の方が断然うまかったりするしな

「そ、それ僕も一緒にしていいかな？」

シャルルが仲間になりたそうな目でこちらを見ている――

「俺はいいよ。南戸はどうだ？」

――仲間になりますか？

「かまわんよ。人数多かった方が1人あたりの労働量が減るからな」

「労働って程でもないだろ」

「あはは、ありがと。2人とも」

俺達はアリーナの中で行われていた一方的すぎる模擬戦に啞然としていた。

追いつめられているのは、鈴とセシリア。

追いつめているのは、黒い機体のラウラ・ボーデヴィツヒ

二対一の本来有利な状況にもかかわらず、セシリアと鈴は追いつめられていた。

決着はついたも同然。

2人に既に戦意はない。

——だがラウラのは戦闘を終了する気はないらしく、追撃を加えようとワイヤーブレードを飛ばす。

「一夏、バリアーを破れ！助けに入るぞ」

「わかってるっ！」

一夏は白式を展開。

即『零落白夜』を発動させ、アリーナのバリアーに叩きつける

バリアーを破り、その勢いで中に突入する一夏。

俺とシャルルもそれぞれISを展開させそれに続く

・・・一夏はラウラと対峙しているようだ

「シャルル、一夏のサポートをしてやってくれ。俺はセシリアと鈴を運び出す」

「うん、わかった」

ラウラの事は2人に任せ、怪我人の救出を急ぐ。

「2人とも無事か？」

「う……。南戸……………」

「無様な姿を……。お見せしましたわね……………」

一応喋る事は出来るみたいだが、結構危ない状況だ。
2人を担いで急いでその場から離脱した。

2人を安全な場所に移動させた後、2人を助太刀するため、再度アリーナ内へ入ろうとする——が中の光景を見て、それが必要なものだ和理解した。

「模擬戦をやるのは構わん。——が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になれば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

ラウラと一夏、シャルルの間に入っているのは織斑先生。
頼りになるぜ

ラウラはISの装着状態を解除したみたいだ。
どうやら一件落着きたいだな

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

練習不可になっちゃったけど、一夏はちゃんと優勝できるんだろうか……。

それだけが、俺の心残りだった――

その後。

セシリアと鈴のお見舞いへ、一夏、シャルルと行こうと思ったが、俺が行つてもしょうがない気がしたので、軽く様子見だけして、今、シャルルと帰路をたどっている。

因みに一夏は2人に捕まってます

「2人とも元気そうでよかったね」

「だな」

ラウラとは、なんとなく仲良くなれる気がしたんだけどな。

――自分と近い何かを感じたし。

思い悩んでいると何処からか地響きが聞こえてくる

ドドドドドドドッ　　と

向こうに見える人の群れ。それは真っ直ぐとこっちへ向かってきている

「鶴来君！」

「デュノア君！」

「ど、どうしたの、みんな・・・ちょっと落ち着いて」

「「「「これ！」「」「」

そう言つて女子一同が出して来たのは学校の緊急告知文の書かれた申込書だった。

それをとつて目を通す――

「どれどれ・・・」

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、ふたり組みでの参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』とな

「南戸、黙読しないでよ」

「ああ、とりあえず2人組になってやるんだってよ。トーナメント」

シャルルに要約して伝える

「そういうことから、私と組もう、鶴来君！」

「私と組んで、デュノア君！」

大人気なう

「え、えつと……」

かなり戸惑っているシャルル

下手に組むと秘密がばれるかもしれないもんな。

なんとなく助けてほしいみたいなオーラが出てる気がするし、助けるとしよう

「申し訳ないけど、俺はシャルルと組むことにするよ」

しーん と沈黙するその場。
あれ、まずかったか？

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのもなかなか絵になるし……ごほんごほん」

女子達は納得してくれたようで、各々が仕方ないとか口にしながら、
散り散りになっていく。

ああ、一夏の居場所でも教えてやればよかったかな——なんて
思った。

銀髪少女と黒い機体（後書き）

感想待っております！

学年別トーナメント（前書き）

感想待っております！

学年別トーナメント

夕食後自室――

さて困った。正直トーナメントは『一夏に優勝して貰うから自分は初戦敗退でもいいや』なんて思ってたが、予想外な事にトーナメントは二人組だった。

この大会では女子に優勝させてはいけないので、優勝させる組合せは、男子二人でないといけない。

学園内に外聞上の男子は三人。俺、一夏、シャルル。

つまり男子二人の組み合わせは一つしか作れない。

そしてその内のシャルルは俺以外と組む事が出来ない。（正体がばれる可能性があるのだ）

すると必然的に俺とシャルルのペアが出来るわけだ。

まあ何が言いたいかというと――

――俺達は優勝しなくてはならなくなった

「あ、あのね、南戸っ」

「どうした？」

1人トーナメントの事を考えていると、シャルルが口を開いた。
心なしかその語調には勢いがある。

「あの、遅くなっちゃったけど・・・助けてくれてありがとう」

トーナメントのペアがどうこの時の事だな

「ああ、俺にも事情があってああしたんだ。別に気にするな」

「事情？」

「そ、事情。なんでも『トーナメントの優勝者は一夏、俺、シャルルのうちの誰かと交際出来る』という噂が女子の間で広まっているらしい」

昼間聞いた事を話す。

隠しておいてもいい事ないし、話した方がいいだろうと思ったからだ。

「・・・なにその噂」

「さあ、なんでそんな噂が流れてんのかは知らないが、とりあえず、女子が優勝すればその噂が俺達に牙を剥く訳だ。だから、俺達男子二人で優勝して、その噂をなかったことにするのさ」

今日の事件のせいで、セシリア、鈴は出場不可。

よって一年で専用機持ちは数人。

専用機持ち二人でチームを組んでいる以上、優勝を狙えないなんてことはないだろう

「そ、そうだね。そんな事になったら困るもんね」

男装発覚が嫌なのか、俄然やる気になっているシャルル。

「ま、そういうことだから、頑張ろうぜ」

「うん。南戸強いからきつと優勝できるよ」

言いながら屈託のない笑顔を見せる。

この期待に応えるためにも、優勝しなくちゃな――

六月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色に変わる。

その慌ただしさは予想よりも遙に凄く、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやっとな解放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走る。

因みに男子生徒は例によってこのだっ広い更衣室を三人で使っている。

シャルルは予め着替えていたので、一夏に見られる事はなかった。

「・・・しかし凄い人数だな。緊張で気持ち悪くなりそうだ」

そう言うのは一夏

「情けないな。俺は既に気持ち悪いぞ」

「お前の方が情けねえじゃねえか」

更衣室のモニターに映る観客席。

そこに溢れる人々。

人類ってこんな沢山居たのか　なんて思えるぐらいだ。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

なるほどな。道理でどっかで見たことあるような面々が多いわけだ。

「ふーん、ご苦労なこった」

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になってるみたいだね」

「まあ、な」

昨日の一件が相当頭にきているらしい。

そう思う俺も、大分頭にきていたりするけどな

「優勝候補株を潰してくれば、俺は助かるから、もし当たったら、『その時』は頼むよ」

「ああ、任せとけ」

まあ『その時』は——きっと来ないだろうけどね

「あ、対戦相手が決まったみたいだよ」

モニターがトーナメント表に切り変わる。

「——え？」

驚愕する一夏とシャルル。

それもその筈、モニターに表示された俺、シャルルのペアの対戦相手は——

——ラウラ、そして箒のペアだった

「いやー偶然って怖いな」

初戦から強敵相手にシャルルには申し訳ないが、どうしてもあいつと戦いたかったのだ

「一戦目で当たるとはな。丁度いい。お前とは一度闘ってみたかったのだ」

俺の前に立つ《シュヴァルツェア・レーゲン》を展開したラウラは言う。

予習はしたし、さつき軽くだがシャルルに作戦を伝えておいた。シャルルなら作戦通り上手く立ち回ってくれるだろう

負ける要素はなにもない。

「そうか。あんたとは直観的に仲良くなれる気がしたんだがな。今はそんな気すつ飛んだよ。・・・残念だ」

『残念だ』心の底からそう思う。

最初はなんか他人な気がなくて、仲良くなれると思ったんだけどなあ・・・

そんな思いは彼女には届かず、試合開始のブザーは鳴る――

雨と傘（前書き）

感想お待ちしております

雨と傘

『それじゃ、手筈通り頼むぜ』

試合開始のブザーが鳴り終わって直ぐ、シャルルにプライベート・チャンネルを飛ばす。

『うん。わかってる』

作戦は簡単。

まず二手に分かれ、シャルルは訓練機と専用機の差を付き、箒を倒す。

俺はその間ラウラと当たり、シャルルと合流するまでの時間稼ぎをする。

合流した後は、二対一の状況が出来あがるので、そこからゴリ押しだ
シャルルは相性で、俺は実力で、ラウラとは一対一では勝てないと思
った故の作戦。

さて、問題はどつやって箒とラウラを分離させるかだ。
ラウラの方は試合開始前のやり取り、性格から考えるに、狙いを俺
一本に絞って突っ込んでくる筈だ。

だが、筈は違う。

一対一の状況に持ち込まれて、一番困るのは唯一訓練機であるあいっだし、そう簡単にはラウラから離れるとは思えないしな。

「・・・！おつとととと」

試合開始後から一切動かず考えを巡らせていると、数本のワイヤーブレードが続けざまに飛んできた。

危ないな・・・当たったらどうするんだ

「試合中に考え事とは余裕だな」

そのワイヤーブレードを操作しながらラウラは言う

「っ！ 余裕がないから考えてんだよ・・・！」

襲い来るワイヤーブレード回避に専念してるため、会話するほどの余裕もないんだが、返答してしまうのは俺の性だ。

「ほう、私が見込んだだけはあるようだな」

これ以上やつても無意味だと悟ったのかワイヤーブレードを引き上げるラウラ。

「……流石に当たるかと思ったよ」

折角の好機を見逃すわけにもいかないの、引き上げるワイヤーブレードに伴って突撃する――

「私を忘れてもらっては困る」

――が、ラウラとの距離を半分ほど詰めたところで箒の邪魔が入った。

横から斬りかかってくる箒。

咄嗟にその刀を驟雨で受け止め、鏢迫り合いとなる。

「……シャルル。頼む」

「うん！」

その言と同時に俺の後ろから現れたシャルル。手に握られるは六二口径連装ショットガン。

罅迫り合いで身動きがとれない筈は絶好の的だ――

「!？」

目の前にいた筈が突然消えた事によって、当たるものと確信していたショットガンは空を切る。

「邪魔だ」

入れ替わりで急接近してくるラウラ。ワイヤーブレードの一つが筈の脚へ伸びていて、アリーナ脇まで投げ飛ばす。どうやら筈が急に消えたのは、ワイヤーブレードに引っ張られた為らしい。

「なっ、何をする!」

なんとも暴力的なコンビネーションだ。
なにはともあれ、上手く分断出来たみたいだな

『シャルル、それじゃ筈は頼む』

『うん。南戸も、ボーデヴィツヒさんの足止めお願いね』

『おう、任せとけ』

プライベートチャンネルでやり取りした後、自分の相手に向き直る。

「一体一か。随分な賭けにでたな」

プラズマ手刀を両手に展開して懷に飛び込んでくるラウラ。
左右から連続で斬りかかってくる。

「ちっ・・・！」

片方を回避し、回避したところへ斬りかかってくるもう片方を驟雨で弾く

すると、また片方が斬りかかってくる。それを回避し、回避したところへ斬りかかってくるのを驟雨で弾く。を繰り返していた

「どうした？守ってばかりでは勝てはしないぞ」

「ッ！そんな事は俺が一番わかってるよ」

ジリ貧。まだ当たりこそしてないが、これ以上この状況が続けば、負けるのは必須だったら――

「うらぁっ!」

プラズマ手刀を回避したところで、驟雨をラウラへ振るう。ギアは『爆』に

「ふん、そんな直線的な攻撃が当たると思っか?」

横に逸れて驟雨を回避するラウラ。だが残念。そこは爆発の射程圏

「不思議な事に当たるんだな。コレが」

トリガーを引く。

すると、驟雨は爆裂し、爆風でラウラを吹き飛ばす。

「くっ……小賢しいっ!」

『小賢しい』本当にそんな言葉が似合う攻撃だ。

威力が低いうえに、この攻撃は最初の一回しか通用しない場合が多い。

だから、本当は奥の手としてとっておきたかったんだが……。
仕方ない。こうなった以上、ここで畳みかける他ないな

「これが俺のとおっておきだ」

ギアを『旋』に

すると、高速回転をし始める驟雨。

それに伴って初期数値だったシールドエネルギーも減っていつている。

「……実体兵器が私のシュヴァルツエア・レーゲンに通用するとしても？」

いくら高速回転といえど、ラウラのAICの慣性停止の突破は出来ない。

——だが、考えはある

「まあ、成せばなるさ」

シュヴァルツエアめゆちぎん
黒い雨に傘で強襲する。

幾本のワイヤーブレードで迎撃してくるが、疎らに飛んでくるものに当たる程、落ちぶれてはいない。

「獲ったあつ！」

広く開いた距離を詰め、既にラウラは驟雨の射程圏。
驟雨を突撃槍のように突く――

「ッ 無駄だ！」

――が、その突きはAICに捕らえられ、届く事はなかった。

「は・・・ははっ！ 私の勝ちだ！」

高らかに勝利宣言するラウラ。

肩に乗せられているレールカノンは完全に俺を捉えていた

「おいおい、なんで俺を押さえただけで勝った気でいるんだ。これは、チーム戦だろ？」

「！？」

慌てて視線を動かすが、もう遅い。
その真横には、六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》を構えるシャルル。

「ごめんね。遅くなつて」

「いや、タイミングはバッチリだ」

AICで俺の動きを止めている以上、シャルルの動きを止めることは出来ない。

・・・チェックメイトつてやつだな

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

と続けざまに三発を撃ち込まれ、ラウラの体は大きく傾く。
その機体にも紫電が走り、IS強制解除の兆候を見せ始める。

——だが次の瞬間、異変が起きた。

雨と傘（後書き）

閲覧ありがとうございました

異常は突然に（前書き）

感想お待ちしております

異常は突然に

「ああああああっ！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。

「なっ！？」

「——！？」

俺もシャルルも目を疑う。

その視線の先では、ラウラが……そのISがドロドロに溶け、ラウラの全身を包み込んでいた。

「なんて物積んでやがる……」

……俺はこれを知っている

……ヴァルキュリー・トレース・システム

過去のモンド・グロツソの部門受賞者、『ヴァルキュリー』の戦闘方法をデータ化し、そのまま再現及び実行するシステムだ。

今はIS条約により、あらゆる企業、国家で開発禁止されている……
・筈だが。何故かそれが俺達の前に姿を現してる。

「え？」

「いや、独り言だ。シャルル。箒を頼む」

こいつに戦闘意思があるかはわからないが、警戒に越した事はないだろう。

「南戸はどうするの？」

「教員たちが入って来るまで時間を稼ぐさ」

見たところ相手の武装は刀一本。近接特化と見て間違いない。だったら、同じ近接特化である俺が戦闘を引きつけるべきだしな

「……。わかった。無茶はしないでね」

「ああ、たとえ頼まれても、無茶なんてしないさ」

言った後シャルルは箒の方へ飛んでいく。
さて、俺は目の前の敵に専念しようかね……

真っ黒な敵を見やる

「なるほど、確かに不細工だ」

そんな感想を述べた後、驟雨を構える。

黒いISも構え、俺の懷に飛び込んでくる。

「なっ——！？」

繰り出される異常な速度の縦切り。

それをなんとか横へステップで回避する。

だが直ぐに二撃目の横切りが放たれる

「・・・くそっ」

回避できないと察知し驟雨で受け止める。

・・・こんな事は初めてだ。

——全く反応が追いつかない

「らあっ！」

ギアを『爆』にし、驟雨を振るう。

黒いISはそれを受け止めようとガードの体制を取るが、関係ない。
・・・爆発するから。

ドオンツと響く爆裂音。

うまい事ヒットしたみたいだが・・・

「うわぁ・・・ウソだろ」

当たったは良いが、効いていない。

さっきとの変化は、その黒いISが一步引いたぐらいだ。

いや、そこは吹っ飛べよ

仕返しとばかりに、刀で腹部に一閃をお見舞いされ、壁まで吹き飛ばされる

「ぐうつ・・・」

——ダメージ82。シールド残量、153。実体ダメージ、レベル中。

・・・今のをあと二撃食らえば強制解除だ

だが、引くわけにはいかない。

この場内には箒とシャルルが居るんだ。

何としてでも、教員の到着まで時間を稼がなくては――

時間は経てど、戦況は変わらない。

いや、もつと酷くなっていると言った方がいいか。

俺のシールドエネルギーは尽き、ISは強制解除されている

「・・・くそっ」

俺をもつ敵と認識していないのか、見切りをつけてシャルルの方へ向く。

そうは・・・させない

「――ここで退いたら男が廃るってね」

驟雨だけを呼びだし、両手で必死に持ちあげ、構える。

その重さで振る事は出来ないが、武器を持った事により、こいつは

俺を敵として再認識してくれたようだ

「死ぬ気が貴様!？」

「や、やめてよ!南戸!死んじやったらどうするの!？」

二人の声が聞こえる。

死ぬ気はない。全身全霊で回避するつもりだ。
まあ回避出来る気はしないけど。

黒いISの横切り

「・・・あれ？」

それを難無くしゃがんで回避する

しゃがんだ所に間髪いれずに縦一閃が入る

「なんだろうな。すこぶる調子がいい」

それも横に逸れて回避する。

さっきまで全く反応が追いつけなかった斬撃を遅いとまで感じるし、

両手でなんとか持っていたいられた驟雨を片手で持っている。

——何が起きたんだ？

「まあ、いいか」

今深く悩んだって仕方ない。

きつと突然調子が良くなったんだ。そうに違いない

「それじゃ、第三ラウンドだ！いくぞっ！」

さっきまでとは大きく異なり、うまく立ち回れている。

向こうの攻撃は完全に見切れるし、こっちからの攻撃は当たっている。

だが残念な事に生身で闘っているため、決定的に火力が足りない。

それに、どうも無理やり体を動かして驟雨を持っているらしく、腕が痛々しく赤くなっている。

・・・内出血とかしてんのかなコレ。

「あー痛々しい」

そんな事を呟きながら黒ISの上段切りを回避しようと横に逸れようとする。

「——っ!？」

体が動かない。

それに体中に走る痛み。
思わずその場に膝をつく

意識を保つので精一杯だ

「いやあああああっ!」

場内に響くシャルルの金切声
それに伴って振るわれる刀。

「・・・案外あっけないな」

そう負けを悟り、振るわれる刀を見やる

そこで、俺の前に誰かが立っている事に気付く。

立っていたのは白式を纏った――

「南戸、もう休め。後は・・・俺に任せろ」

――夏がだった。

「ああ、悪い。後は、任せたよ・・・」

そこで俺は意識を失った・・・

異常は突然に（後書き）

ー夏さんマジかこいっす

越界実験 / 保健室にて？（前書き）

感想お待ちしております！

越界実験 / 保健室にて？

「あー。だるい」

頭痛で目が覚める

場所は・・・保健室か

「よいしょっ——あれ？」

とりあえず手をついて起き上がろうとした所で、自分の体の異変に
気付く。

「これは、笑えんな」

手に全く力が入らない。

動かす事は出来るのだが、どうやっても力が入らない。

「今は安静にしている。下手に動かすと余計酷くなるぞ」

声をかけてきたのは織斑先生。

そう言われて初めて自分の置かれている状況を把握する。

「え？・・・な、なんじゃこりゃ」

全身包帯ぐるぐる巻き。

このままピラミッドに埋葬されてもおかしくない位だ。

「体の筋肉がほとんど破壊されてる。その中でも特に腕が壊滅的だ。あんな無茶な闘いをしたせいだな」

言われ、黒いIS戦の事を思い出す。

あれはちゃんと解決したんだろうか。

それに俺の体に起こった異常は何だったのか。

どんどん頭の中で疑問が増えている

「そうなんですか。・・・それで、あの黒いISはどうなったんですか？」

「お前が倒れた後、一夏が無事解決した。お前たち二人の活躍のおかげで、大きな怪我を負ったのはお前一人だけだ。ボーデヴィツヒにも怪我はない」

みんな無事なのか。頑張った甲斐、あったな

「みんな無事でしたか。それと、質問攻めで悪いですが、あの時俺に何が起こったのかわかりますか？」

気になる事はドンドン聞こう

「それについてだが、断定は出来ないものの、大凡は予想はついている」

張本人が理解不能だったので期待はしていなかったが、良い意味で期待を裏切られた

「聞かせてください」

「お前は『越界実験』^{えっかいじっけん}というものを知っているか？」

『エッカイ実験』聞いた事がない

「いいえ、存じ上げないですね」

「ならそこからだな。——『越界実験』は『ドイツのとある実験』の基礎となっている実験だ。十年近く前のな。簡単に説明すると、脳の情報伝達速度の爆発的向上。及びその脳に追い付ける程の身体能力を得る為に、人の肉眼、そして全身の筋肉にナノマシンを移植するという実験だ」

随分ぶっ飛んでるな

「その実験は理論上は危険性はない。失敗などあり得ないと謳っていたが、残念ながら実験は失敗。瞳の方のナノマシンは適合したが、全身の筋肉に移植したナノマシンは暴走。被験者の体は力のブレーキの効かない物となった——」

「・・・その被験者が俺という訳ですか」

「その通りだ。そして、その『越界実験』の提唱者、及び検証者の名は鶴来西治（つるき さいじ）——お前の父親だ」

それはなんとなく予想がついていたな。

『実験』という単語が出てきた時点で、俺の中では『そいつ』か束さんしか思い当たらないし。

「でも、俺の体はさっきの戦闘があるまでは正常でしたよ？力加減が出来ないなんて事はなかった筈です」

まあ『そいつ』はどうでもいい。
とりあえずは目の前にある問題だ

「恐らくお前の身内の『万能な天才』が何らかの処置をしたんだろう。そして先程の戦闘が切っ掛けでその処置が意味を成さなくなり、ナノマシンが暴走した」

なるほど、そう考えれば辻褄があう気がする

「確かにそうかもしれませんね」

「まあ、今は療養の事だけ考えて安静にしている事だ。それと——
」

「——よくやった。お前の活躍で多くの人が助かった」

言って去っていく織斑先生。

あの鬼教官から褒められる日が来ようとはな……

「おう、生きてはいるようだな」

織斑先生がここを去ってしばらく間をおいて一夏、箒、セシリア、鈴の4人が入ってきた。
俗にいうハーレムってやつだな。

「なんだ。見せつけに来たのか？」

「何をだよ」

「決まってるだろ？そのハー——」

と、言いかけたところでやめる。

なんというか、その殺気を帯びた目を三人一斉に送るのをやめてくれ。

「いや、なんでもないです」

今俺の命のもし火は吹いたら消えるようなものなんだ。
殺気で消えるとかあり得えない話じゃないから！

「はぁ・・・そんな大怪我になっても馬鹿なのは変わらないのね」

「ですわね。開口一番がそれとは」

「さっき少しでも心配した自分が恥ずかしい」

「あ、あんまりだ・・・」

口々に言う女子陣。

恋する乙女にとって相手が重傷者だろうが関係ないみたいだ。

「まあ、とんでもなく重傷だって聞いたが、それでもなさそうだな。安心したよ」

「それもそうね。元気すぎてうざいけど、元気に越した事はないわ」

うざいってお前・・・

「ああ、人並みに元気ではあるさ。なにせ、俺だからな」

「いや、自信たっぷりと言ってるけど、理由になってないだろ」

「そっかぁ・・・南戸だもんね」

「だって、南戸さんですものね」

「だな」

俺万能説。

「いや、理由になってないから！」

「それじゃ、南戸。また来る」

俺は入院的な扱いになっており、帰れないが、一夏達は自分の自室へ帰っていく。

「おう、またいつでも来てくれ。十中八九、暇だから」

「また来るまで死ぬんじゃないわよ？」

そう言うのは鈴。

「・・・死ぬわけがないだろう」

縁起でもないな

「それじゃ、南戸さん。お大事に」

「おう、ありがとよ」

それに続くセシリア

「南戸、今日は本当に世話になった」

こちらを向いて深々と頭を下げる筈。

「気にするな。お互い助け合い精神で生きて行こうぜ」

全員を見送り。

しばしの休息を得た

「南戸。今、大丈夫？」

間髪いれずに来たのはシャルル。
扉を挟んだ向こうに居るようで、声だけが聞こえる。

「ああ、大丈夫だ」

「そ、そっか。それじゃあ、お邪魔します」

扉が開き、制服姿のシャルルが入ってくる

「——え？」

「ど、どうかな。変じゃない？」

ただ、その制服は数人の男子生徒用に作られた物ではなく、IS学園内の幾多の女子生徒の着るそれだった。

「いや、似合ってるよ・・・うん。かわいいと思う」

「か、可愛い・・・？ ほ、本当に？ 嘘ついてない？」

「ああ、そんな事で嘘はつかんよ」

仮に嘘をついていたとしても、嘘ついてるなんて言わんよ。

「そっかぁ・・・可愛いかなぁ・・・えへへへ」

よっぽど嬉しかったのか頭がお花畑になっている。

「——で、シャルルは自分が女の子だって打ち明ける事にしたのか？」

シャルルを現実に戻すため話を振る

「・・・うん。それと、僕ね、ここに居ようと思うんだ。僕はまだここだって思える居場所を見つけられてないし、それに・・・」

「それに？」

「ふふつ、内緒だよ」

なにそれ淒く気になる

「・・・まあ、いいか。残ってくれるなら俺は大歓迎さ」

「うん。ありがとう。いろいろ迷惑かけてばかりだね。僕」

「そんなこと気にするな。世の中は助け助けられ廻っているんだ」

いつもは助けられてばっかだからな。
朝とか、朝とか、あと朝だな

「それじゃあ、僕を助けると思って、一ついいかな？」

「まあ、常識の範囲内なら」

「僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれないかな？」

ああそうか。

シャルルは一応男子として入学してきたから『シャルル』ってのは偽名なのか

「ふむ、わかったよ。シャルロット」

「ふふっ、ありがとう。南戸」

「礼には及ばんよ」

越界実験 / 保健室にて？（後書き）

閲覧ありがとうございました！

越界の瞳（前書き）

感想お待ちしております！

越界の瞳

二度とあんな無茶はしないようにとシャルロットから説教を受けたよ。

疲れるのは嫌だし、痛いのはもっと嫌だから、そんなこと言われなくとしないさ。

「——それじゃあ、南戸。また来るね」

「おう。何時でも来てくれ」

そう言い残しシャルロットは自室へと戻っていった。

「……騒がしい連中だ」

ふと、隣のベッドから声がかかる

「悪いな。起こしたか？」

隣のベッドで横になっているのはラウラ・ボーデヴィツヒ。

俺以外この部屋に寝ているやつがいるとは思わなかったな。

「問題ない。貴様が教官と話し出す前から起きている」

全部盗み聞かれてたのか。

まあ聞かれて困るような事はそもそも喋ってないし、いいか

「ところで、ラウラは怪我ないの？」

千冬さんは怪我人は俺だけと言っていたが、こいつがここで寝ている以上、何かしらあったんだろう

「お前ほどではない。これは、検査入院だそうだ。なんの問題も見つからなければ明日で退院できる」

「へえ、よかったな」

「ああ、お前達のおかげだ」

俺は何もしてないんだけどな

「礼なら一夏に言ってやれ。そもそも俺はお前を救おうなんて思っ
てないから」

「・・・ふん。礼ぐらい素直に受け取ったらどうだ？」

「まあ、気にするな。俺はいつもこんな感じだから」

なんて言っただっけこういうの・・・

ああ、そっだ。ツンデレだ

「それと——すまなかった。私のせいで、お前を、それにお前の
友を傷つけてしまっただけ・・・。本当にすまない。頭を下げてどうこ
うで済む問題でないのはわかっている。だから——」とりあえず、
落ちつくうぜ」

なんか謝罪のスパイラルを作っているラウラの言葉を遮る。
切腹しかねん勢いだっただけ

「はあ、・・・『アレ』が積まれてたのはお前の故意じゃないだろ
う。別にお前が謝る必要なんてない」

それに、礼なら貰って嬉しいが、謝罪なんて貰っても嬉しくないし

な。

「アレ？お前まさか知っているのか？」

「・・・知らないよ。でもアレとしか言いようがないだろう」

ちよつと墓穴を掘りかけたな

「そうか——」

心底残念そうなラウラ。

「まあ、そういう難しい事は今後ゆっくり考えようぜ。・・・俺は眠い」

「ああ、そうだな。私も眠い。寝るとしよう」

「それじゃあ、おやすみ」

どこまでも灰色の世界――
そこに俺は居る

「
」
「よう」

瓦礫の山の上に立つ、俺の姿をした誰か。
いや、何かか

「
――誰だお前」

いや、どう見ても、俺なんだけど。
どうしても聞きたくなってしまう

「はあ、本当に忘れるとはな。・・・二度説明する気はない。適当に思ってくれ」

とりあえずはドッペルゲンガーってことでいいか。
以下ドッペル

「で、俺になんか用か？」

「いや、いい事を教えてやろうと思ってな」

そう言うのはドッペル

自分が言っているのを見ると、なんとも信用できないな。
我ながら胡散臭い

まあ 一応聞くだけ聞くか

「ほう、聞こうか」

「『越界実験』の事だ。あれの後日談を教えておいてやろうと思っ
てな」

『越界実験』——おれのオヤジ 鶴来西治が俺に施したアホみたいな人体実験。

「後日談？あれの提唱兼検証者はその実験後すぐ捕まっただろっ」

そも、日本では人体実験なんて許されていない。

そんな日本で人体実験をした、鶴来西治という男は警察に捕まり、
現在監獄で反省中である。

判決は無期懲役。二度と顔を見る事はないだろう。まあ元々見たこ

となんてないんだが。

「ああ、だがデータは残っていてな。それをドイツで『ヴォーダン・オージェ』と変名し、再研究し始めたんだ。お前は100パーセント成功するのに、運悪く失敗したとされていたから、少し組みかえて、もう一度行えば今度こそ成功すると思ったのだろう」

「偶然失敗したんじゃないと？」

「あれは必然の結果さ。失敗などありえないというのは嘘。あの実験は99パーセントの確率で失敗するような実験だ。瞳へ移植したナノマシンが適合したのさえ奇跡に近かった。両方適合するなんて天文学的確率さ」

どこまでアホなんだあいつは

「・・・いつまで経っても望んだ研究結果が出なかったから、賭けに出た訳か」

自分の息子で賭博するとかとんでもないよな

「その通りだ。・・・大きく逸れたが話を戻そう。ドイツで研究したが、どうしても筋肉にナノマシンを埋め込む実験は成功しなかつ

た」

そりゃあ成功しない筈の実験なんだからな。

「ちょうど、ドイツの手が詰まったところで、世界に『ある兵器』が出回ることとなる」

「——ISか」

時期的には一致する

「冴えてるな。そう、ISだ。そのISの登場により、大きく実験は路線変更することとなる。本来この実験は『脳の情報処理速度の向上』と『その脳に追いつく事の出来る肉体の入手』が根本的目的とされていた。今までは『その脳に追いつく事の出来る肉体の入手』がどうしても上手くいかず、手詰まっていた」

「だが、ISが世界に出回ったおかげで、『その脳に追いつく事の出来る肉体の入手』が必要のないものとなった。そんな肉体などなくとも、パワード・スーツであるISに乗りさえすれば、幾らでも補えるからな。実験は筋肉へのナノマシンの適合を足早に諦め、ISとの適合性の向上へと路線変更した」

どんどんと続けるドッペル

「そして、瞳に移植するナノマシンを少し改変し、ISとの適合性を上げるといふ追加機能を設けた。成功例があったため、実験者たちは成功すると信じてやまない。そも、その実験は失敗する筈の実験だったとは知らずに」

俺の実験が偶然成功したのが話を大きくしてるのか

「無論。その瞳への移植実験は失敗した。まあ、被験者が移植したのは、片目だけだったという所は、運が良かったのかもな」

「・・・さんと、話してくれているが、正直俺には関係ないな」

そんな感想だった。

確かに、俺がこの発端となっているが、だからといって何かできる訳でもないし。

「そう言うとは思ったよ。それと、補足だが、その『ヴォーダン・オージエ』の被験者は、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・なんとなく予想は出来てたよ」

『ドイツ』『片目』とか、なんとなくあいつから感じる親近感。
そしてこのタイミングで話す必要性。

少し考えればわかる

「そうか。ま、俺の用事はこれだけさ。また会おう」

—— 出来ればもう会いたくないな……

「あー。だるい」

体中の痛みで目が覚める。
なんとも気分の悪い朝だ……

変な夢を見ていた気もするし——

とりあえず起きよう

手には力が入らないので、腹筋で起き上がる。

「よつと……!!」

ちよつと攀りかけたが大丈夫だ

越界の瞳（後書き）

わかりづらすぎわらた

保健室にて？（前書き）

わりと長めの文を書けるようになりました

保健室にて？

朝食

「はぁ・・・」

目の前に置かれている朝御飯に溜息する。

入院初日目の朝食は卵かゆ。

これを作ってる人は俺を病人と勘違いしてるんじゃないか。

まあ、そんな事は良いんだ。

別に俺は卵かゆが嫌いだから、溜息を吐いてるんじゃない。

『作って貰ったものは喜んで食べる』それが俺のポリシーだしな

で、何で溜息を吐いているかだが・・・

盆の上の卵かゆの隣に置かれているレンゲを全力で持ち上げるが――

「っ・・・!!」

――持ちあげて間もなく、レンゲは重力に従って落ちていき、ランカランと盆の上で音を立てる

まあ、何が言いたいかというと、レンゲが持てないのだ。

「なんだ？食べないのか」

隣でカツカツと音を立てながら卵かゆを食べていたラウラが、食事を中断し話しかけてくる

卵かゆってドイツでも通用するのか。

ドイツの食レベルは知らないが、なんか感動した

「ああ、腹減ってなくてな。俺は朝は食わない派なんだよ」

グウウウウ

言い終わったところで鳴る腹の虫。

狙ったようなタイミングだ

「・・・ほう」

腹の虫を聞いたラウラは何を思ったか、ベッドから出て俺の方へ歩いてくる。

「な、なんですか」

ラウラはちょうど俺の隣で立ち止まる。

「どれ——「ちよっ何してる！？痛えよ！離せ。千切れる！」」

右手を握られる。

力はそこまで籠っていないのだが、怪我を負っているため、触れられただけでかなり痛い。

「・・・なるほどな、それで食器を掴めないという訳か」

「——情けない限りだぜ」

「ならば、・・・ほら、口を開ける」

俺のレンゲを拾い上げて、卵かゆを掬い、俺の口元へ持ってくる
まさか、これは伝説の『はい、あーん』というやつでは——

「な、何を——げほ、げほっ。な、なにしやがる！？」

——なかった。

ちょうど『を』の口をした所でレンゲを口に突っ込まれた。

少なからず俺の幻想では『伝説のアレ』はこんな乱暴な物ではない筈だ。

「食わせてやろうというのだ。感謝するがいい」

「いや、確かにありがたいけどよ——ゲホッ」

また口の中に突っ込まれるレンゲ。
凄まじい早業である

「た、頼むから、喋ってる時に突っ込むのはやめてくれ」

「ふむ、そうか。気を付けよう」

終盤はほぼ作業となっていたラウラによる餌付けが終わる。

「悪いな。助かったよ」

とてつもなく気恥ずかしかったが、助かったのも事実だ

「気にするな。——と、ところで相談があるのだが・・・」

「ん？なんだ、言ってみろ。さっきのお返しとまではいかないだろうが、相談、乗ってやるよ」

「わ、笑わないで聞いて欲しい・・・」

ラウラの顔にやや赤みがさす。

これは、色恋沙汰の臭いがするぜ

「おう、言ってみろ」

「人に惚れてしまったのだが、こういうのは初めてで、改めてそう思うと、その相手とどう接すればいいのかわからなくなるのだ・・・。どう接すればいいと思う？」

なるほど一夏か

「ふむ、とりあえずアタックだな。話はそれからだ」

「そ、そついうものなのか？」

一夏の朴念仁っぷりは半端じゃないからな。

アタックしなければ好意に気付いてさえくれないだろう

「ああ、間違いない」

「そ、そうか！わかった。やってみる」

準備を整えたラウラは、嬉々として自分の教室へ駆けて行った――

「早く復帰したいな。俺も」

現在、昼放課。

午前中は、変わり映えのない窓に映る風景を延々と眺めていたよ。

たまに窓際の本に鳥がとまって、可哀想なものを見るような目で、こつちを見ていた気がするが気のせいだろう。

目の前に置かれている昼食を見やる。

午前中、パンの方が楽に食べられると思って、朝食の運ばれて来た時に、運んで来てくれたお姉さんに昼食は洋食でお願いしますと言ったんだが……。

「うん、確かに洋食だけだよ……」

昼食はリゾット。またしても流動食……。

作ってくれてる人は、俺を病人と勘違いしていると見て間違いなさそうだ。

盆の上に乗るスプーンを拾い上げる

「あー、くそ。やっぱりか」

やはり、持てない。

午前中、風景を見ながら手をグーパーしてちょっとでも力をつけようと努力していたが、無駄だったようだ。

……どうしたもんかね

「ふん、困っているだろうと思って、来てやったぞ」

バシーンと、扉を吹き飛ばす勢いで開けラウラが入ってくる。
心なしか機嫌が良い様に思える

「おう、来てくれたのか。なんか申し訳ないな」

なんとも情けない話である

「そ、そういえばだな・・・」

食事が半分終わった辺りのところで、ラウラが話を振ってくる。

「うん？」

「アタック、してきたぞ」

早速実行するとは・・・。

こいつ実は結構物分かりのいい子なのかな

「へえ、どんな？」

「その・・・き、キスをした」

恐ろしく大胆だな。

その後の修羅場が容易に想像できるぜ。

いや・・・待てよ・・・

俺の言が発端と気付かれたら、俺、殺られるんじゃない？

「そ、そうか。そいつは良かったな」

何時か発覚した時の事を想像し、身震いする。
いや、俺悪くないよな。うん、そつだよな

「南戸、お見舞いに来たよ。——ボーデヴィッヒさんと、何やってるのかな？」

そう言っ入ってきたのはシャルロット。

構図としては俺のベッドの隣の椅子に腰掛けるラウラ。
そしてその手には俺の昼食であるリゾット。

きつといらぬ誤解を招いたに違いない。
いや、あながち誤解ではないかもな

「デュノアか。・・・見ての通り、こいつの餌付けだが？」

この状況は『餌付け』としか言いようがないから困るな

「へえ・・・南戸ってそういう事を人前で平気で出来るんだ」

『人が居るのにやったんじゃないで、やってたら人が来たんだ』と
言ってやりたいが、逆効果な気しかないのでやめておいた。

「お、落ちつけ、シャルロット。これには深い訳があるんだ。だからソレ降ろして！頼むから！」

何故かマシンガンを構えているシャルロットを制する。
それは、命が風前の灯な俺じゃなくても命が危ういだろ。

「説明、してくれるよね？」

笑顔で言う。

ここまで人の笑顔に恐怖したのは初めてだ――

説明なう

「ふーん」

聞いてきたのに興味無さげだな。
俺の説明が悪かったのだろうか。

「・・・ふむ、丁度いい。こいつの餌付けも飽きていたところだ。
私は嫁の様子を見ってくる」

何を悟ったのか突然ラウラはこの部屋を去って行こうとする。
ていうか、嫁？女の子なのか？

「え・・・いや、困るんだが」

「あとはデュノアに任せる。ではなっ」

リゾットを俺のベッドの備え付けの机に置いてから、タッタタッ
と駆けていくラウラ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気まずい沈黙。

「・・・とりあえず食べる?」

リゾットの受け皿とスプーンを手取るシャルロット。
良いのかお前それで

「あ、ああ、ありがとう」

「はい、あーん」

向けられるスプーン。

いや、まさか『はい、あーん』が体験できるとはな・・・。
既に顔の熱で焼死しそうだ

「あ、あーん」

パクリと食べる。

全く味覚が働かない・・・。

「おいしい？」

聞く意味はあるんだろうか。

「ああ、美味いぜ」

ラウラに食わせて貰ってた時の記憶を頼りに答える。

「そっか。じゃあ、ちょっとだけ貰っていい？」

まあ自分だけ食ってる訳にもいかないしな。

「ああ、どうぞ。……だけどスプーンは――」

『変えた方が良いんじゃないか？』と言おうと思ったが遅かった。
もう既に俺の使っていたスプーンで、口にリゾットを運んでいたか
ら――

「……え、何？」

「いや、なんでもない」

まあ本人が良いのなら良いか。

「これ、美味しいね」

おお、良かった。

俺の記憶違いだったらどうしようかと・・・

「——あれ？」

リゾットをスプーンで掬いあげたところで、シャルロットの動きが止まる。

「ん。どうした？」

「こ、これ、か、間接キスじゃあ・・・？」

「まあ、そうなるな」

聞いて真っ赤になるシャルロット。
どうやら大丈夫でもなかったみたいだ

「そうなるなって・・・南戸は平気なの？」

「いや、俺男だし、そんな事で動揺しないよ」

「はあ、南戸って・・・」

何か言いたげなジト目でこっちを見る。
言ってくれんとわからんよ

「な、なんすか」

「——なんでもない」

結局俺は残りのリゾットを食う事は出来なかった・・・。

余談だが晩飯に中華を所望したところ、出てきたのはキムチ雑炊だ

った。

どうやら俺は入院している限り、流動食から逃げる事は出来ないらしい。

保健室にて？（後書き）

感想お待ちしております！

ダブルデート的なあれ（前書き）

休日だから油断してたら4時になっちゃった

ダブルデート的なあれ

とある朝

数日の時間を経て、体はほぼ問題なく動くようになった。

そして、退院の許可が出たため、俺は今荷造りをしている。

やっと、俺はこの流動食生活から解放されるのだ。

なんと、白いご飯を掻き込みたいと思ったか。

なんと、パンを頬ばりたいと願ったか。

なんと、せめて固形物が食べたいと頂垂れたか。

思えば思つほど、過酷だった日々が記憶に蘇る。

「今日は食堂で好きなものを食えるぞ！」

ついに終わるのだ。この日々が。

踊る心を胸に、荷造りを早々に終わらせ、食堂へ足早に向かつて行った――

「うーん。迷う・・・」

現在、食券販売機の前

退院後初めての食事。

なにか特別な意味がある訳でもないが、どうしても迷ってしまう。

「遅い。後ろ詰まってるのよ?」

ピツと

鈴が言いながら俺の前の販売機のボタンを押す。

「お、お前、何してくれてんだ!？」

「後ろ詰まってるって言うてんでしょ? はい、これアンタの」

鈴は販売機から食券を取りだし渡してくる。

「まあ、いいや」

むしろ、一思いに誰かに決めて貰えて良かったのかもな。
食券を受け取り、見る

「……嫌がらせだよな。これ」

食券には機械的な文字で『卵かゆ』と書かれていた――

朝のSHR。

普段なら面倒くさいこれも、久々に参加すると新鮮で良い。

「皆、気付いているだろうが、今日から鶴来は復帰だ。それと、来週からはじまる校外学習だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

今回の校外学習をリンカイ学校というらしい。

一夏が言っていた。

海にいつて遊んだり、実習したりとするらしい。

正直俺は行きたくないんだが

「では、SHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

確かに、言われてみればいないな。
寝坊とかだろうか？全く情けない。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。
なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

普段の二倍の仕事をこなすのか。

さすが織斑先生。俺はもうあんたを同じ人間として見る事が難しいぜ

「ええっ、山ちゃん一足先に海にいつてるんですか！？ いいな
！」

「ずるい！ 私にも一言声かけてくれればいいのに！」

「あー泳いでるのかなー。泳いでるんだろうなー」

羨ましげな声が次々と上がる。

女子の感性はわからんな。

「あー、いちいち騒ぐな、鬱陶しい。山田先生は仕事で行っている
んだ。遊びではない」

はーい、と揃った返事をする女子一同。

相も変わらぬこのやり取りに、少し感動した

夕刻、自分&一夏の部屋
シャルロットは女という事をみんなに明かしたので、俺は漏れなく
一夏の部屋に戻ってきた。

「なあ、南戸」

温かいお茶を飲んでほっこりしていると一夏に話しかけられる。

「うん？なんだ」

「今週の日曜、暇か？」

今週の日曜・・・確か特に予定はなかったな。

「ああ、暇だけど・・・なんだ？」

「だったら、街に臨海学校での足りないものでも買いに行かないか？水着とかさ」

確かに泊まりだし、色々必要だな

「おう、いいぜ。足りてないものが殆どだしな」

「それと、シャルロットとセシリアも来るらしいから、そこんとこよろしく」

また珍しい組み合わせだな。

セシリアが俺をフォロー役として呼んだんだろうか。

「了解だ」

足りてないもののリストでも作っておかないとな――

「おー、よく晴れたなあ」

週末の日曜日。天気は快晴。
まだ夏本番という訳ではないが、結構な気温だ。

「なんでお前はそう嬉しそうなんだ」

「なんでって、晴れたら気持ちいいじゃねえか」

「……そうですか」

人並みに暑いのが嫌な俺としては、曇って欲しかったもんだ。
この熱気で喜ぶ一夏の感性は全くもってわからない。

「一夏さん、南戸さん、お待たせしました」

「一夏、南戸、おはよう。あ、南戸ちゃんと起きたんだね」

向こうから歩いてくる金髪の二人。
セシリアとシャルロットだ

さり気無く小馬鹿にされた気もする

「もう、朝起きるのなんて造作ない」

「今日起こしたのは俺な気がするけどな」

「……気のせいだ」

こればかりはどうしても慣れんのだ。しょうがない

「さ、じゃあ行こうぜ。駅前だっけ？」

「うん。駅前だよ」

俺は道わかんないし後ろから付いていこう。
逸れんように気をつけなきゃな……

「み、南戸さん」

「おう、なんだ」

ボソッと話しかけてくるのはセシリア。
状況的に一夏関連だろう

「そ、その、わたくしこういった事は初めてでして……。まずはどのような事をするのが良いのでしょうか？」

こういった事とはこのデートの事だろう。

このデートにおける、俺のポジションはセシリアのサポート
適当なところでシャルロットを連れて抜ければ、ミッションコンプ
リートといった所か。

俺は協力するのにやぶさかではないが、シャルロットはそれで良い
んだろうか……

「そうだな……。とりあえず手を繋いでこい」

正直コレしか思いつかなかったよ

「……でも、どういった風に言えば手を繋いでくださるでしょう
か？」

「そこら辺は自分で考えなさい」

先生は自分で考えない子はダメだと思います。

「で、でしたら、見本を見せていただけませんか？」

「見本？男同士とか気持ち悪いだろ」

「ど、どうして一夏さんですの！？シャルロットさんに決まってるじゃないですか！」

ああ、確かに言われてみれば何で一夏なんだろうな。

「あー確かに。オーケー見ておくがいい」

振られたら俺は一生シャルロットと顔を合わせられないかもしれないかもしれない。

「なあ、シャルロット」

「うん？何かな」

セシリアよ見ている。
これが俺の男気だ

「手、繋つごうぜ。折角だから形だけでも、デート気分を味わいたい」

「え．．．？」

固まるシャルロット。
やべえ泣きそう

「あ、ああ、嫌なら良いけどよ」

「ぜ、全然嫌なんかじゃないよ！うん、手、繋つ」

手を差し出すシャルロット。

その手を握り、もう片方の手でセシリアにガッツポーズを見せる。

固まられた時はどうしようかと思ったぜ

「い、一夏さん！私たちも繋ぎましょう」

「ん。逸れちゃ大変だし、その方がいいな」

手を繋ぐ二人

どうやら向こうも上手くいったみたいだ。

「んじゃ、改めて向かいますか」

「だな」

そうして2組のカップル（仮）はショッピングモールに向け、出発した――

「えーっと、水着売り場はここだな」

場所はショッピングモールの二階、水着売り場前だ。

「じゃあ、男と女は売り場が違うし、一旦ここで別れよう」

そう言って手を離す一夏。

セシリアがなんとも心残りの顔をしている。
心配するな。まだまだチャンスはあるさ

「だな、じゃあ三十分後にまたここで落ち合おう」

俺も手を離す。

シャルロットもなんとも心残りな顔をしている様な気がするが、気のせいだろうな

「う、うん。わかった」

「それでは、三十分後にまた」

二人と別れ、俺達は自分達の水着を見に行く。

使うつもりはないが、まあ買っておいたほうが良さそうだし、買っておくか

散々迷った挙句、グレーの水着を選択し、購入した。

結構時間を使ったと思ったが、まだ待ち合わせまで二十分前後ある。とりあえず、必要なものを買ってくるか。

——色々買った後、待ち合わせの時間の五分前に別れた場所に着く。

一番乗りかと思ったが、どうやら全員俺を待っていたらしい。

「待たせてすまん。みんなこんな早く来るとは」

「あ、ううん。ちょっとね、二人に選んで欲しいなあって思って、早めに戻ってたの」

水着をか。悪いが俺にセンスはないぞ

「そうなのか。じゃあ実物を見に行こうか」

自信たつぷりな一夏を筆頭に、女性用水着売り場に入る。
とんでもない数の水着もそうだが、とんでもない数の人の目がこっちに向いているので、尻込みしてしまう。

「そこのあなた達」

見ず知らずの人に声をかけられる。

「お前を呼んでるぞ一夏」

「複数形だからお前もだろ」

「男のあなた達に言っているのよ。その水着、片付けておいて」

知らん人にいきなり命令されるなんて、女尊男卑のこの世界じゃ良
くある事だ。

素直に従った方が面倒事は少なくて済むな・・・

「わか——」なんてだよ。自分でやれよ。人にあれこれやらせる
クセがつくと人間バカになるぞ」

ああ、素直に従おうと思ったのに一夏が・・・
こうなった以上徹底的にやるしかない

「案ずるな。もう既にコイツはバカだ。人への物の頼み方すら碌に
わかっていないのだからな」

「ふうん、そういうこと言うの。自分達の立場がわかってないみた
いね」

警備員を呼ぼうとする——だが甘い

「あ、言い忘れてたけどこっちの二人、IS学園在学中の代表候補

生だぜ？ここで問題を起こそうものなら……わかってるよな？」

他力は有効的に扱うべし

「だ、代表候補生！？」

「ああ。で、どうするんだ？国際的に潰されたいか？」

「くっ……。憶えてなさいっ！」

セリフを残し去っていくその人。

バカでも国際的問題は避けたいらしい

「絵に描いたような負け犬の図だな」

「南戸さんって時々恐ろしい事おっしゃいますよね」

「頼りになるけど、矛先が僕に向いた時の事を考えるとゾッとするよ」

凄く失礼な事を言われている気がする

「いやいや、冗談だから。そんな事より、水着はいいのか？」

「そ、そうだった。すぐ着替えるから待っててっ。行こセシリア」

「は、はい」

タツタと駆けていく二人。

店内ではあんまりバタバタしないようにな。

「南戸、俺、あいつ等が出てきた時、『似合う』以外の言葉言える気がしないんだけど、どうしよう」

「奇遇だな。俺もだ」

結局俺達は『似合う』しか言えなかった。

まあ、それでも二人ともその返答で満足していたようだし・・・いいか――

ダブルデート的なあれ（後書き）

感想お待ちしております！

海は広く大きく（前書き）

感想お待ちしております！

海は広く大きく

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる。

「おー。やっぱり海を見るとテンションあがるなあ」

沸いているバス内。

そんな中、唯一人沸けない俺。

「みんな元気だな」

「そっいう南戸は元気ないな」

「来たる時に向けて元気を温存してるのさ」

——海は嫌いだ。

泳げないとか、日差しが強いからとか、熱砂が嫌とかそんな単純な理由じゃない。

何年か前に『ある映画』を見たことによって、俺は海に入る事が出来なくなった。
映画の内容は、海に行った幾人の人が鯨に襲われるという、よくあるスリラー物。

作り物だとわかってはいるのだが、どうしても海を見ると、その映画がフラッシュバックしてしまう。
だから俺は、海が嫌いだ

「来たる時？」

よって俺はずっと陸にいる事にした。
ただ、何もしないわけではない。
俺は俺なりに、楽しむさ。

「まあ、楽しみにしているがいい」

「そろそろ目的地に着く。ちゃんと席に座れ」

織斑先生の言に全員従う。逆らおうものならどうなるかわかってるしな。

「・・・・・・・・・・」

一人更衣室のある別館に向かう途中、道ばたに見覚えのある白色のウサミミが生えているのを見つける。
ついでに丁寧にも『引っ張ってください』という張り紙までしてある。

「まあ、いいか」

嫌な予感しかないので引きぬかないでおこう。
多分、一夏辺りが引っ張るだろう

「あ、南戸」

無視して立ち去ろうとした所へ鈴が現れる。

「おう、鈴か。お前も着替えか？」

「そうだけど・・・・何これ？」

どうやら地面に生えたウサミミに気がついたらしい。
まあ、気が付かない方がおかしいか

「ウサミミ草だ。ここら辺の地域特産の植物。てんぷらにすると美味い」

「へえ、そうなんだ。物知りねアンタ。・・・で、これ引っ張って良いの？」

信じていいのか。
明らかに人工物だろコレ

「やめておけ」

「ええっ、なんでよ？」

「恐らくだが人參が降ってくる」

勘だが絶対的な自信がある。
この間、人參型ロケットを作っていると言っていたし、『下から来ると思わせ上から来る』なんて束さんの常套手段だ

「はあっ!？」

「兎も角それを抜くのはやめた方が良く。いろいろ厄介事が起こるから」

「そ、そこまで言うなら、やめておくわ。気になるけど・・・」

これを引つ張るのは、他の人に任せるとしよう。

その後、誰かがウサミミ草を引つ張ったらしく、なにかの衝突音が館内に響き渡った――

一夏サイド

「・・・何やってんだお前」

海でしばらく泳いだ後、陸に戻り、何故か人だかりが出来ていたの
で、そこに行ってみると南戸がいた。

「何って・・・見ての通りだ」

何故か屋台を構えていて、やきそば等を売っているようだ。

見かけないと思ったらこんな所にいたのか

「というか、お前、シャルロットが探してたぞ」

「おう、そうか。ならここに居ると伝えておいてくれ」

「——おい、その可愛いお嬢さん。なんか食べてかないか？
うまいぜー」

シャルロットをココに連れて来ていいんだろうか。

南戸の定型文のセリフからして、修羅場になる気しかない。

こんな鈍感な奴を想うシャルロットが悔まれる。

昨日も色々シャルロットのサポートをしたが、なんだかんだで大きな進展はなかったし・・・。

「ああ、じゃあ呼んでくるからな」

「おう、悪いな」

そこを離れ、しばらくして、シャルロットを見つける。

「あ、一夏。・・・南戸いた？」

「居たぞ。向こうの人だからで屋台開いてる」

「どうなっても、俺は知らないからな」

「そ、そつか。ありがと、一夏」

「ああ、気にするな。とりあえず行ってきたらどうだ？」

「うん。そうする」

人だかりの方向へ駆けていくシャルロット。
二度目だが、どうなっても、俺は知らないからな。

「あいつの鈍さには困ったもんだぜ・・・」

「——おめえに言われたくねえよ!」

「ど、どうしたの鶴来くん？」

焼きそばの焼きあがりを待っているお手伝いの女子が、心配そうにこちらの顔を見ている。

「あ、いや、直観的に言わなきゃならない気がしたんだ」

「そ、そっか」

いかんいかん。焼きそば焼きに集中せねば・・・

焼きそばの味が良いのか、俺の客引きがいいのかはわからないが、俺の屋台はとてつもなく繁盛していた。

数人の女子が手伝いに名乗り出てくれなかったら、回らなくなっていたところだ

「四番テーブルお好み二個入りましたー」

テーブルなんて物まで出来て、一種の店と化している。

「あいよー」

やきそばと並行し、お好み焼きを焼き始める。

「いやー、それにしても悪いな。手伝って貰っちゃって」

お手伝いの女の子に話しかける。

「あ、大丈夫だよ、気にしなくて。私たちは好きでやってるから」

なんとこのお手伝いさん達は全員タダ働きなのだ。

そのボランティアさんに、こんな重労働をさせてしまっって、本当に申し訳ない気分だ。

「そうか？なら、今度なんかあったら俺に言ってくれ。その時は全力で協力するから」

「ふふつ、その時は頼りにしてるね」

そんな会話をしていると、何者かの殺気を感じ取り、振り返る。
そこには――

「・・・シャ、シャルか。脅かさないでくれ」

——笑顔のシャルロットことシャルがいた

「ねえ、南戸、何してるの？」

「見ての通り、やきそばを焼いているんだ」

「ふうん。僕にはイチャイチャしてるようにしか見えなかったけどな」

さっきだけな気がするけどな

「束の間ぐらい良いじゃないか。イチャイチャしたって」

論点がずれているし、イチャイチャと言うほどの事はしてない様な気もするが、反論する。

「・・・・・・・・・・」

無言で抗議の目を俺に向けるシャル。
刺さるような視線が痛い

「・・・で、なんか用か？俺を探してたんだってな」

とりあえずこの話題は不味いと思い、話題を変える。
因みにこのやり取りの最中にも、やきそばとお好み焼きを焼いている。

「あ、そうだった。・・・これってどれぐらいで終わる？」

「んー、あと一時間ぐらいだな。たぶん」

客の入りによるが、材料が無くなるのは大体その位だろう。
余るぐらい買って来た筈の材料が尽きるとは思わなかったな

「それじゃあこれが終わったら一緒に泳ぎに行かない？」

「え・・・いや、海はちょっとなあ・・・」

これが片付いたら旅館に戻ろうと思ってたしな。

「そ、そっか・・・」

ズーンという効果音が聞こえるくらい沈んでいるシャル。

罪悪感が半端じゃない

「ほんつと悪い。今度、他の事で良ければ埋め合わせるよ」

「・・・本当？」

「男に二言はないさ。あ、でも海関連は勘弁な」

「うんっ、わかった。なら・・・いいかな」

どうやら元気を取り戻したみたいだ。よかったよかった

時間はあっという間に過ぎ、現在七時半。

大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を取っていた。

「なあ、ラウラ。こんな話を知ってるか？」

右隣の席に座っているラウラに話しかける。

「なんだ？話してみろ」

「なんでも、好きな人を想いながら、この緑のやつを一気に食べて、
涙しなければその恋は必ず成就するらしい」

言いながらわさびを箸で指す。

「そ、その話は本当か！？」

そう言ってラウラはワサビを口へ運ぶ

「ああ、——嘘だ」

完全に口に入ったところで、ラウラの問いに答える。

結構の音量で喋っていたため、聞いていた人は多く、試した人も多いみたいだ。

数人鼻を押さえているのが見える

「つ~~~~~~~~!!」

声にならない叫びをあげているラウラ。
目には涙が滲み、鼻を押さえている。

思わずクスクスと笑ってしまう

「・・・南戸」

不意に左隣から呼ばれる
なんとも怒気を含んだ声だ

「はい」

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

左隣はシャルで、涙目な辺り、試したんだろう。

「・・・すいませんでした」

その後、数名の女子に酷い目に遭わされたのは、言うまでもないだろう

「さあ、一夏よ。究極の選択だ」

「う、うう・・・どっちだ・・・」

食後、俺と一夏はランプでババ抜きをやっていた。
残るカードは3枚。9のペアとジョーカーだ。
俺の手元にはダイヤの9とジョーカーがあり、今は一夏が引いている。

因みに、『殆どの人が手札全てを捨て切って、残るは二人』と言う訳ではなく、最初から参加人数が二人なのだ。

二人ババ抜きとか悲しいな

「さあ、どうする一夏!？」

まあそれなりに盛り上がってるからいいか。

「こつちだあああつ！」

そうして高らかに引きぬいたのはジョーカー。
これで持ち越しとなった。

「さあ、攻守交代だ」

一夏は後ろ手で手持ちの2枚をシャッフルし、構える。

「・・・こつちだな」

「なっ!？」

ピツと引きぬく。

引きぬいたのはクローバーの9。

「俺の勝ちだな」

これで3連勝だ
弱いなコイツ

「く、くそっ・・・もう一回だ」

「構わんよ」

負けた一夏がトランプを片付けていると、もう1人のこの部屋の住人である、織斑先生が帰ってくる。

「ん？　なんだお前ら、女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつだ」

「え、連れ込んでいいんですか？」

冗談でそんな事を言ってみる

「お前にそんな度胸があるとは思えんな」

「ならば、見ててください！必ず誰かしら連れ込んで見せますから！」

そう言い残し足早に部屋を出る

あー、今は明らかに不自然だったろうか・・・

「まあ、風呂にでも入って時間でも潰すか」

いくら同室だからといって、兄弟水入らずのところを邪魔しちゃ悪いしな

そんな事を思いながら、本日二度目の風呂へ向かって行った――

海は広く大きく（後書き）

閲覧ありがとうございました！
更新ペース落ちるかもです

嵐は前触れもなく（前書き）

感想待ってます

嵐は前触れもなく

合宿二日目。

今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。

特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

「ようやく全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

なんと、遅刻してきたのは珍しい事にラウラだった。

遅れたのはたった五分だが遅刻は遅刻だ

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報互換のための——」

と、長々と教科書の原文説明をしているラウラをしり目に空を眺める。

天候は快晴。日はさんさんと照り、俺達を焼いている。

「せめて、日陰に並ばせてほしいもんだ」

誰に言うでもなく、一人呟く

そもそもこの場所は四方に切り立った崖があり、ドーム状になっているため、陰のない場所の方が少ないのだ。

そんな中、日の当たる所に並ばせられるのは悪意しか感じない

「何か言ったか鶴来」

「・・・なんでもないです」

結構距離あるんだけどな・・・すごい地獄耳だ

「——現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことですよ」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

ふうと息を吐くラウラ。

・・・なんか納得いかな。

もつと凄い罰させればいいのに。

たとえばクレーターの後始末とか。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちへ来い」

「はい」

打鉄を運んでいた篤は、織斑先生に呼ばれ、そちらへ向かう。

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~ん!!」

聞き慣れた声と共に、地平線の彼方から凄まじい速度でこっちに走ってくる人影。

ああ、あれは――

「・・・束」

そう、束さんだ。

来ていたのは知っていたが・・・

指名手配的な扱いを受けている人があんな大手を振って登場していいんだろうか。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ――ぶへっ」

飛びかかってきた束さんの顔を掴む織斑先生。
思い切り指が食い込んでいて痛々しい。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ・・・相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

アイアンクローの拘束から抜け出す束さん

相変わらずという事はいつも喰らっているのだろうか。
・・・想像しただけで頭が痛くなりそうだ

「みつくんにも会いたかったよおおおっ！」

ガバツと飛びかかってくる束さんを半歩下がって回避する。

「——お元気そうで何よりです」

「下がった半歩にそこはかとなない距離を感じるよ・・・」

「いや、反射的に」

こんな公衆の面前で抱きつかれるのは勘弁願いたい。

「ひ、酷いっ！前は私を『お姉ちゃん』って呼んで慕ってくれてたじゃないか！世間だな！？世間の冷たさがみつくんをそうさせたんだねっ！？」

「ここ来る前からこんなですよ。・・・というか、『お姉ちゃん』って、どれだけ昔の話をしてるんですか」

「うつっ・・・そうだった」

ガツクリと頂垂れる束さん。

再開を懐かしむのは大変良い事だがこれでは話が進まない。

「え、えつと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈な事を言うね。ISの関係者というなら、この私をおいて他にいないよ」

「えっ、あつ、はいっ。そ、そうですね……」

摩訶不思議な理論により、押し切られてしまう山田先生。
束さんに常識は通用しないから仕方ない。

「やあ！」

その会話で頂垂れモードから切り替わった束さんは、箒に話しかけている。

姉妹数年ぶりの感動の再会だ——

「・・・・・・・・どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言つたあ・・・・・・・・。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ ひどい！ 篝ちゃんひどい！」

否、感動の再会ではなかったようだ。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

短く抽象的な自己紹介。

だがその自己紹介でこの人が誰だか気付いたらしく、女子の間が騒がしくなる

「はぁ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

「それで、頼んでおいたものは……。？」

そんな中、淡々と話を進めようとする筈。

「うつふつふつ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしつと真上を指ささす束さん。

それに従い多くの人の目が空を見上げる。

ズズーンッ

「のわっ！？」

突然、謎の金属の塊が砂浜に落下してきた。

あ、あぶねえ……。一歩間違えば怪我人でたんじゃないかコレ。

降ってきたそれは、次の瞬間正面らしき壁がぱたりと倒れてその中身を俺達に見せる。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペツクが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

中から現れたのは赤い装甲のIS。『紅椿』

白式、灰蓮に続く第4世代兵器を実装したと聞いている。

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん」

データを打ち込むべく手を動かし始める束さん。

「なあ、南戸。お前って束さんと知り合いなのか？」

そんな事を一夏が聞いてくる。

まあ下手に隠したところで束さんが話してしまいそうだし、言っておくか

「うーん、言わば束さんは俺の育ての親だな」

親が違法研究により捕まり、身寄りのない俺達を引き取ってくれたのは束さんだった。

育ての親が一番しつくりくる間柄だ。

「なるほどな。道理で」

「うん？なんだ」

「いや、この親にしてこの子ありかって思ってたな」

褒めるな照れる

「ほう、俺が天才と言いたいのか」

「・・・そういう所とかな」

「そりゃあ真似してるからね」

形から入るタイプなんで

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

わたわたと慌てて登場する山田先生。

俺はこの先生が落ちついていている所を見た事がない。

「どうした？」

「こっ、こっ、これをつ！」

渡された小型端末を見て、織斑先生の表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

その表情の曇りが、嵐を予兆していた――

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間に俺たち専用機持ち全員と教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、ぼつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスヘル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過する事がわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

話を淡々と進める織斑先生。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

随分と大変な事になったな

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手をするように

」

福音にコンタクトするチャンスは一度きり。

よって一撃必殺の攻撃力を持つ機体で当たる必要がある。

その一撃必殺の攻撃力を持っている機体は一夏の白式のみ。

すると攻撃の為にエネルギーを温存する必要があるため、白式を運搬する機体も必要となる。

そしてそれは、スペックデータを見るに紅椿が適任とされ、一夏の運搬は筈が受け持つことになり、あえなく俺たちはお留守番となった。

「ふむ、暇だ。トランプでもやるか」

「随分と脳天気だな」

「心配してもしようがないだろ。一夏は無事帰ってくる。そう信じて待っていようぜ」

そも、俺たちには何も出来ないんだ

嵐は前触れもなく（後書き）

閲覧ありでした

その鐘、危険につき（前書き）

銀の福音大好きです

その鐘、危険につき

旅館の一室。

ベッドで横たわる一夏が、『この戦い』の勝敗を表していた。

・・・一夏はもう三時間も目を覚ましていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、その傍らに座り頂垂れ、彼の目覚めを待つ筈。

まるでその二人だけ三時間前から時間が止まっているかのように、ピクリとも動かない。

「なあ、筈」

「・・・・お前、何やってるんだ？」

——問いかけに返事はない

自責しているんだろうか。しているんだろうな。

「反省会開くのは個人の勝手だけどよ、今は他にやるべき事があるだろ。アレともう一度戦うとか」

アレ——福音は今もなお活動が続けている。

「わ、私……はISは……使わない……」

「情けないなお前。相手が強すぎて怖気づいたか——」

「——お前に何がわかる！？私のせいで一夏は……一夏はっ……」

ガツと食って掛かる筈。

いつもなら気負けして引きさがるが、そうもいかない

「お前の心境なんて知ったこっちゃないな。だが、これだけはわかる。少なからず一夏は、お前が落ち込んで無駄な時間を過ごす事を望んではいない」

「なら、どうしろと言っんだ！　もう敵の居場所もわからない！　戦えるなら、私だって戦う！」

筈の決意表明。

その言葉を待っていました

「ふむ、そうと決まれば善は急ぐつ。おーい、野郎ども！準備は良
いかー！？」

ドアを少し開け、仲間を呼ぶ

「・・・野郎はアンタだけよ」

ふつと溜息を吐きながら入ってくるのは鈴。

「で、どうよ。場所はわかりそうか？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが――」

鈴が言った後、軍服を着たラウラがブック端末片手に部屋に入っ
てくる。

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ス
テルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないよう
だ。衛星による目視で発見したぞ」

「さすがドイツ軍特殊部隊だな。その技術がうらやましいぜ」

「お前に言われると嫌味にしか聞こえんな」

言葉を素直に受け取れんのかこいつは

「・・・シャル、セシリア。そっちはどうだ？」

ドアを大きく開き、問う――

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ」

全員準備完了みたいだな

専用機持ち全員の視線が箒に集まる

「目的地は決まった。準備も整った。・・・それで、お前はどつするんだ？」

「私・・・私は――」

ぎゅうつと拳を握りしめる筈。それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった。

「戦う・・・戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりだな」

「そうと決まれば作戦会議だ。今度は確実に堕とそう」

「ああ！」

旅館を飛び立つ6機のI.S。

それを見送ったところで、束は電話を耳に当てる。

「もっしもーし。——ちゃん？」

「みつくんが福音と当たりに行ったよん。もし予定刻よりも早く福

音を墮としちやいそうだったら、邪魔に入ってくれないかな？——
「うん。ありがとう」

連絡は済んだ。

あとは、この観戦席でこの後起こる大乱戦を見ているだけだ。

きっとそれは、楽しい楽しい時間になる事だろう

「楽しみだなあ、早く始まらないかなあ・・・」

ただ無邪気に、その時を待つ——

「・・・・・・・・・・」

海上二〇〇メートル。そこで停止していた『銀の福音』は、まるで
胎児のような格好でうずくまっている。

膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。

——？

不意に、福音が頭を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が直撃、大爆発を起こした

「初弾命中。続けて砲撃を行う」

福音から五キロ離れた場所に浮かぶラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

（敵機接近まで・・・四〇〇〇・・・三〇〇〇——くっ！
予想よりも速い！）

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る。

その間もずっと砲撃による迎撃を試みるものの、福音の翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を打ち落としながらラウラへ接近していた。

「ちいっ！」

機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手をのばす

——避けられない。しかしラウラはにやりと口元を歪めた

「——セシリア！」

伸ばした腕は、上空より垂直に降りてきたセシリアによって弾かれる。

セシリアは最高速よりいきなり反転。福音を捉え、撃った。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルだった。

シャルのショットガン二丁による近接射撃を浴び、福音は体制を崩す。

『——優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

体制を整えると同時に全方位にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて、一時退避を計る。

案の定、ステルスモードで待ち伏せている、俺の方へ

「いやー、悪いね。俺、人工知能おまえらの行動、大体わかつちやうんだよ」

俺に気付かず、懐へ飛んできた福音に驟雨を振るう。
ギアは『爆』に

ドオンツと爆裂音を立て爆発する驟雨。

その爆発をもろに受けた福音は海面へ吹き飛ぶ。

福音は海面ギリギリのところで体制を立てなおし、俺に向けエネルギー弾を放つ。

「さて、そんなお前にワンポイントアドバイスだ——」

驟雨を開き、ギアを『屈』にして降りかかるエネルギー弾を弾く。

「——お前はもう少し周りに気を配った方がいいぜ？」

福音のちょうど背後の水面が膨れ上がり、爆ぜる。

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手のひらで握りしめる。

「なっ!？」

刀に引っ張られ、箒は両手を広げた無防備な状態を晒す。
そしてそこに、もう一つの翼が砲口を解放して待っていた

「——翼が片方だけじゃ不恰好だろ？増やす事は出来ないからもう片方も貰ってやるよ!」

箒と福音の方へ飛び込み、動きを止めている福音の翼に驟雨を突き立て、破壊する。

——ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へ落ちていった

「間一髪だったな。ありがたく思えよ」

「ああ、助かった。それで、福音は——」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

「!？」

球状に蒸発した海を中心に、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くようにうずくまっている。

「!？ まずい！ これは――『セカンドシフト第二形態移行』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。

本能で危険を感じ、ラウラと福音の間に入ろうとするが、その反応は――遅かった。

『キアアアアアアアア……!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる。

「なにっ!？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。そして、切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで蝶がサナギから孵るかのようにエネルギーの翼が生えた。

「くそっ……間に合えっ！」

全速力で福音の元へ飛ぶ――

――が、その思いは届かず、ラウラはその眩いほどの輝きをもったエネルギー翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海へと堕ちた。

定法では勝てない。直観的にそう悟った

「……ぶつつけ本番で結果をだせる自信はないが――」

――これを乗り越える術は『越^{アレ}界の瞳』しかない

その鐘、危険につき（後書き）

閲覧ありがとうございました！

守る力（前書き）

ネタばれ：わりと長い

守る力

時はラウラ戦後の入院期まで遡る

「——ナノマシンのコントロール……ですか？」

聞き返すと、織斑先生は小さくうなずいた。

「ああ、全身に埋め込まれた方は制御が効かないようだが、瞳の方なら適合している以上コントロールは可能な筈だ」

なるほど。

制御できるようになれば強くなれそうだ

「……でも、どうやって？」

でも、突然漠然とした事をやれと言われて出来るほど、俺は出来た人間じゃない。

「一々聞くな、自分で考えろ。そもそも、体へのナノマシンの適合例はお前だけなんだ。制御の仕方はお前にしかわからん」

な、なんて無責任な。

話を持ちかけておいて、それはあんまりだ

「——ん？何か言いたげだな鶴来」

「い、いえ、なんもないです」

不満が表情に出ていたみたいだ

「そうか。・・・まあ、しばらくお前は体が動かせん。暇つぶしに挑戦してみるのも一つの手だろう」

確かに暇つぶしには持ってこいの課題だ

「精進します」

——『越界の瞳』の解放命令を確認。・・・解放出力二〇%。損傷・・・なし

「実戦で使うのは初めてだが・・・なんとかなるだろ」

そのまま福音へ接近、驟雨を下段に構え、振り上げる
ギアは『普』に

急な強襲で判断の遅れた福音は驟雨を回避するも、体制を崩す

「らあっ！」

体制を崩した福音の脇腹に回し蹴りをお見舞いする

・・・解放出力三〇%。損傷・・・なし

「さあ！どんどん行こうか！」

余談だが、この解放出力が九〇%を超えると俺は脳が処理落ちして死ぬ。

まあ、解放出力は任意で上げてるから、九〇%まで上げようと思わなければ良いんだけどね

蹴りによって吹き飛んだ福音へ追撃を入れるべく接近。

福音も迎撃をすべくエネルギー弾を雨が如く撃つが――

「おっそいなあ。止まって見えるよ」

――俺に当てる事は出来ない。

元よりそこまで距離はなかったので、あっという間に福音の懐へ潜り込む事が出来た。

ギアは『旋』に

しっかり回避できないように空いている左手で福音の肩を掴む

・・・解放出力四〇％。損傷・・・なし

「上がってきたとこ早速で悪いけど、もっかい堕ちろっ!!」

キィィィンと音を立て回転する驟雨を福音の腹部へ突き刺した。
終わった――そう確信した

「――なっ!?!」

だが、その確信は覆される。

――俺に大剣を振りかざす水色の機体の乱入によって。

「・・・ちつ。放せ！」

福音への攻撃を切り上げその場を撤退しようとしたが、福音の片手に右足を掴まれる。

『南戸さんっ！』

オープン・チャンネルに響くセシリアの声
次の瞬間、俺を掴む右手をセシリアの放ったレーザーが貫いた。

福音から解放され、水色の機体の大剣を体をねじってギリギリで回避し、その場より退避する

『悪い。助かった』

オープン・チャンネルで話しかける

『南戸さんは一人で無茶しすぎですわ』

『そうそう、一人で突っ込みすぎ。一人で行って負けそうになるとか格好悪すぎるわ』

続けるは鈴。

『・・・反省してます』

『そんなに僕たちって信用ないかな？』

言うはシャル。

『いや、そんな事は断じてない』

『——だったら私たちを信頼して背中を預ける』

発するは箒。

『ああ。・・・そうだな』

どうやら俺も周りが見えていなかったらしい。
折角仲間がいるんだ・・・一人で戦う必要は、これっぽちもなかったな

「だけどもあ・・・もう少し一人で頑張らなきゃいけなさそうだ」

目の前の敵を見やる。

・・・前に立ちはだかる水色の機体。

どうやら目標を俺一人に絞っているらしい。

「そこ、どいて欲しいんだが」

もしかしたら友好的な奴かもしれないので話しかけてみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無駄だったな。

福音同様バイザーで顔を隠しているため、表情はうかがい知れないが、敵意がある事は確かだ。

・・・解放出力五〇％。損傷・・・なし

『こつちを片付けたらすぐ行く。頼むからそれまで持ちこたえてくれ』

数分戦ってわかったが、『水色』は俺との勝負を決する気はないらしい。

目的は恐らく時間稼ぎ。

福音側は箒たちが押されているようだし、福音と合流後に一気に叩く気が。

だが、そうはせんよ

「——寝坊以外の理由で、女の子を待たせる訳にはいかんだろ」

・・・解放出力七〇％。損傷発生。レベル低、左目の変色。

維持困難出力となりました。——維持可能時間・・・のこり七分

「・・・さて、こちらますます時間がなくなっただね。ちゃっちゃと終わらせて貰うよ」

ギアは『旋』に。

『水色』の懷へ突っ込む。

劣化版『イグニッション・ブースト瞬時加速』命名『ラビッド・ブースト瞬発超速』を使って。

懷へ入ったところで驟雨を突く

瞬間、見えない筈の『水色』の顔が笑った気がした

「――!？」

驟雨が届くか届かないかのところで、俺の動きは止まる。

他ならぬ『水色』の使った、実体兵器の動きを例外なく止める『A IC』によって――

「……武器はそれ一本だと思ったんだがな」

『水色』のドレスを模した様な機体の背中からビット型兵器が現れる。

数は八機。俺を囲むように配置され、それぞれが俺に狙いを定めている

「……情けない限りだ」

間もなく俺はそのBT兵器の集中砲火を浴び、堕ちた。

——どこまでも灰色な世界。
そこに俺はぽつんと座っている

『どこだここは・・・？』

確か俺は・・・あれ、どこにいたんだっけ・・・？
はつきりと思い出せない
いや、でも確かにここではない場所にいた筈だ

『情けないな』

そんな風に話しかけてきたのは瓦礫の山に座っている俺だった。
いや、俺の姿をした何かだった

『誰だおま——』『情けないなと言っている。お前も自分が情けない
と思わないか？』

同じ顔とはいえ初対面の相手に、セリフを被せられた上に情けない
とまで言われ、ややへこむ。
でも——

『・・・まあ、確かに。ごく最近淒く情けない思いをした気がする
よ』

ごく最近に、俺は何度か自分が情けないと心の底から思った出来事があった。

具体的には思い出せないが。

『そこでお前にチャンス到来だ。——力が欲しいか？』

何をやぶから棒に

『そりゃあ欲しいさ。くれるのなら』

『ほう、それは何故だ？』

『決まっているさ。みんなを——いや、仲間を守るためだ』

言っておきながら、不思議な事に仲間の顔は思い出せない——

だが、俺は『そいつらを守りたい』そういう確固たる意志があった

『——おめでとう。正解なんてないが大正解だ。そんなお前にもう一度チャンスをやろう』

矛盾してるぜそれ

『……感謝する』

『さあ、行つてこい！』

……解放出力——九八%。損傷発生。レベル低、両目の変色。
……灰蓮、第二形態移行完了——

次々と送られてくる吉報。

九〇%を超えると死ぬと思つてたが、そうでもなかったみたいだ。

「まさに絶好調だな」

《古京》——それが灰蓮の第二形態の名前らしい

「……じゃあ頼むぜ、相棒よ」

『水色』の方へ飛び上がる。

「よう、リベンジに来てやったぞ。なんで元気かって？・・・俺が知るかよ。——まあそんな事はおいとして、最終ラウンドを始めようぜ！」

新武器《霧雪》きりゆきを両手で構える。

「——いえ、もう結構です。定刻を過ぎたので私はこれで」

折角のつてきたと言うのに『水色』の返事はなんと張り合いのない物だった。

その返事通り、『水色』は彼方へ飛び去っていった
いや、そんな事より——

「・・・喋れたのかよ」

まあ、いいか。

どれぐらい気を失っていたかわからないが、筈たちは無事だろうか。

「うおおおおっ！」

響く一夏の声。

その声の発信源の近くには多少の怪我はあるものの、全員の無事な姿。・・・よかった

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしならせていた翼を自身へと巻きつけ始める。

それはすぐに球状になって、エネルギーの繭^{まゆ}にくるまれた状態へと変わった。

続けて翼が回転しながら開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる

それはつまり、ダメージから回復していない全員に攻撃が及ぶということだった。

それを察知し一夏はみんなの盾になろうとしているようだ

「一夏っ！これは俺が防ぐ。お前はとっととあれを片付けてこい！」

一夏へ叫ぶ

「南戸・・・わかった！」

「ちょうどいい。これの力を試してみたかったんだ」

両手を弾雨へ向ける。

灰蓮の単一仕様能力ワンオフ・アビリティー《夢幻泡影むげんほうえい》

効果はなんと、特定範囲内のエネルギー兵器の軌道を『曲げる』事が出来るという優れ物だ。

これが、俺の欲した『守る力』

「……上手くいったみたいだな」

全てのエネルギー弾を曲げ、何も無い方向へと飛ばす事に成功した。失敗したらどうしようかと……

「あ、アンタ今何やったの？」

驚いた口調で話しかけてくるのは鈴。
わりと元気なようだ

「決まってるだろ。——『サイコキネシス
超能力』さ」

「・・・あつそ」

鈴の後ろに控える女子三名も苦笑いしている。
どうやら俺の渾身のボケは空ぶったらしい。

「箒は・・・。ああ、向こうで一夏とイチャイチャしているみたいだな」

そう言うतすごい勢いで一夏に向け飛んでいく女子三名
うん。みんな元気で何よりだ

「み、南戸！眼が金色になってるよ！？」

ここに残ってくれたシャルは言う。偉い慌て様だ。

金色・・・越界の瞳を解除するのを忘れていたみたいだ

「ああ、充血だよ。ちょっと休めれば――」

目に手を当てる

――『越界の瞳』停止命令を確認。後遺症・・・なし

「——ほらな」

「よ、よかった、充血なんだね。ビックリしたあ・・・」

俺は信じてしまうお前にビックリだよ。

そもそも充血で金色だったらもっと危ないだろ——

守る力（後書き）

ワンオフ強くしすぎた感が否めない

閲覧ありがとうございます！

嵐は去る（前書き）

携帯無双回。それと全開中途半端に切ってしまったので短いです

嵐は去る

「作戦完了——と言いたところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用のトレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「・・・・はい」

戦士たちの帰還は、それはそれは冷たい物だった。今は大広間で全員正座させられている。だいたい正座し始めて三〇分ほど経過しただろうか。

俺は普段から正座しているから慣れで問題ないが、セシリアはダメらしく顔が真っ青になり始めている

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで・・・・。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん・・・・」

助け舟を出してくれたのは山田先生。まだ叱り足りないな目をしている織斑先生だが、流石に同僚にここまで言われたら引き下がるをえないだろう。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。——あっ！　だ、男女別ですよ！　わかってますか！？」

・・・わかってますとも

「それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますからね」

手渡されるスポーツドリンク。
それを受け取る

「・・・しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

不意に告げる織斑先生。

そこで『ああ、終わったんだな』と改めて実感した

さて、睨まれている様な気もするし出ていくとしよう

「じゃ、一夏。野郎は退散するとしようぜ」

「おう」

これ以上長居すると叩き出されそうだったので、一夏を連れ廊下へ出る。

「・・・ありがとうな」

廊下へ出たところで、ポツリと一夏がつぶやく

「何を突然」

「いや、みんなに大きな怪我がなかったのはお前のお陰だからな」

「そんな事はないよ。そもそも、あいつ等は俺より強いしな。――
――もし仮に俺のお陰だったとしても、お前に礼を言われる筋合いはない」

「礼ぐらい素直に受け取ってくれよ」

「それは非常に難しい」

「はぁ・・・そうかい」

夕飯後。

一夏は海へ行ってしまう今は自室で暇を持て余している。

暇を潰したいのは山々だが動く気にもなれない・・・。

「こんな時はアレだな。・・・よつと」

枕元に置いてあった携帯を手取る。
メールを送ろう

TO 鈴

本文『今なにやってんの?』

「まあ、淡白だけどこれでいいか」

送信。

数分後、返信が来る

F r o m 鈴

本文『一夏探してんのよ』

・・・人気だなあいつ

T o 鈴

本文『一夏は海だ』

居場所を知っていたので素直に教えてやるか。送信
あ、そういえば箒と一緒にいたな一夏と

数分後、返信がくる

F r o m 鈴

本文『ありがとう』

どうやら一夏の方へ行つたようだな。
違う人に呼び掛けてみるか

To セシリア

本文『今何やってんの？』

なんとなく返信は予想が出来るが一応聞いてみよう

・・・返信がくる

From セシリア

本文『一夏さんを探していますわ』

なるほど、やはりか

To セシリア

本文『一夏は海だ』

修羅場になる気がするが、俺は知ったこっちゃない。
・・・返信がくる

From セシリア

本文『情報感謝します』

となると・・・ラウラもだろうなあ・・・

To ラウラ

本文『一夏は海だ』

端的に伝える。

きつとあいつも探しているだろうしな

From ラウラ

本文『恩に着る』

・・・ほらな。

今頃修羅場になってるんだろうか。向こうは

そんな思いを馳せていると、突然手に持っていた携帯が鳴る。
今度は電話みたいだ

『もしもし、南戸？』

相手はシャルのようだ。

『おう、シャルか。——なんか用か？』

『あ、ううん。別に用事がある訳じゃないんだけど、南戸は今何してるのかなあって思ってた』

こいつはこいつで暇してるみたいだ。

『今は特に何もしていないな。そっちはどうなんだ？』

『そっか。——こっちも同じだよ。何もしてない』

よくよく考えてみれば真夜中だし暇なのは普通か。

『んじゃ、暇人どうし仲良く語り合おうぜ』

『うん。いいね、それ』

そうして、夜は更けていく――

嵐は去る（後書き）

閲覧ありがとうございました！

昔の因果は皿の端を回る今の因果は針の先を回る（前書き）

感想待っております！

昔の因果は皿の端を回る今の因果は針の先を回る

——因果応報は実在する。　そう昨日の・・・いや、正確には今日の深夜そう実感した

昨日俺は数時間ほどシャルと通話した後、寝ようと横になったところで、ボロボロな一夏が帰ってきた。
般若を背後に宿した織斑先生と共に。

聞いてみると一夏は、俺が送りだした女子勢に追いかけまわされたあげく、帰ってきたら織斑先生が憤怒の面持ちで待ち構えていたとのこと。

まあその時はご愁傷様だな程度にしか思っていなかったのだが、次の織斑先生の行動に驚愕することとなる。

なんと先生はこの場で説教をし始めたのだ。

隣で寝ようとしている俺が居るにも関わらず。

この人に口答え出来る筈もなく、説教をバツクに眠れるはずもなく、一夏への説教が終わるまで安眠を得る事は出来なかった。

故に睡眠時間は三時間強。

その上に早朝から重労働をさせられ、俺は朝だというのに意気消沈していた。

「あゝ・・・」

しんどそうに声をあげるのは一夏。

俺がこうなった原因だ。

原因の原因は俺にあつたりするんだが、俺は知らん。

「すまん……誰か、飲み物持ってないか……？」

全員に聞いているみたいだ

「……ツバでも飲んでいろ」

とラウラ。

「知りませんわ」

とセシリア。

「ごめんね。持っていないんだ」

とシャル。

「み、南戸は・・・？」

ことごとく振られたので俺の方へ助けてと視線を向ける一夏。

誰のせいでこっちは寝不足になったと思ってるんだろうか

「——うん？何だ」

笑顔で言う

「い、いや、なんでもない。夜の事は謝るからそんな怒らないでくれ」

どうやら鈍感な一夏にも俺の怒気が伝わったらしい。

「——別に怒ってはないよ。ホラ、飲み物だったな」

バッグからペットボトルを取り出し一夏へ投げ渡す。

「お、おう。サンキュ」

一夏はペットボトルを空け、一口飲む

「・・・」ほっ、ごほっ！。な、なんだこれ！？」

案の定むせ返る一夏。一気に飲みしてくれればよかったのに・・・。

「それは酢だ」

「何で持ってたんだよ！？てかやっぱり怒ってたんじゃないか！」

まあちょっとはスッキリしたな

「無論だとも」

「——ん？」

パーキングエリアで昼食休憩後、バスへの移動中、誰かと話している織斑先生を発見する。

物陰へ隠れて盗み聞く事にしよう

「——だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵に見せかけた元凶を——必ず追って、報いを受けさせる」

と感情的に話しているのは金髪の女性。

会話内容的には福音の操縦者だろうか

「……何よりも飛ぶ事が好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

俺の予想では犯人は……

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？ しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか？ ブリュンヒルデ」

IS世界大会『モンド・グロッソ』、その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ。

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていきましょう。．．．．．しばらくは、ね」

そう言った後、金髪の女性は帰路に就く。

「——出てきたらどうだ？」

その女性が見えなくなった所で、織斑先生が言う。

気配とか消さないとこの人の話を盗み聞く事は難しいみたいだ

「．．．ばれてましたか」

物陰から出る

「バレバレだ」

「今のは福音の操縦者ですか？偉く殺気立ってましたね」

「そうだが・・・もうお前には関係のない話だ」

そう素っ気なく言って織斑先生はバスへ戻っていく

「・・・そうですか」

——もし、さっきの女性が俺と同じ結論に至り、その犯人を裁こうというのなら、俺は全力で彼女の邪魔をしなければならぬ

「はあ、複雑だな。人間関係って」

そんな思いを胸に、俺もバスへと戻る

「あ、おかえり。南戸」

「おう、ただいま。・・・ていうか何で外に？」

「ご丁寧にもバスの外で出迎えてくれたのはシャル。」

「・・・南戸が遅かったから——その、心配になったんだよ」

「それは悪かったな。軽く散歩してたんだ」

「心配してもらった手前、盗み聞きとは言えない。」

「ううん、大丈夫。出てきたのはついさっきだから」

「シャルと共にバスへ入る。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

バスに入ると他の専用機持ち達は何故か険悪な顔色をしている。

「・・・何かあったのか？」

「・・・うん、ちょっとね」

お互い思わず苦笑い。

きつと計りしれない様な事があったんだ。

メンバー的に　一夏関連で。

「まあ、ご愁傷様だな」

昔の因果は皿の端を回る今の因果は針の先を回る（後書き）

閲覧ありがとうございます！

無事3巻終了です

期末テスト（前書き）

恥ずかしながら初のオリ話です。

感想待ってます！

期末テスト

「・・・うん」

本日何度目かわからない唸り声をあげる。

俺の悩みの種は今手に持っているコレだった。

「うん？なんだ、それ？」

何故か珍しく机に向かっている一夏が問い掛ける。

机に向かつてるなんて宿題とかで手詰まりを起こしたんだろうか。

いや、今はそれはいいな

「ウォーターワールドのチケットだ」

「へえ・・・」

そう、ウォーターワールドのチケット。しかもごく丁寧に四枚組。

俺は行く気は起きないので、この四枚を誰かに渡す事にしたのだが・

・・。

そこで幾らか発生する問題。

その問題に俺は頭を悩ませていた。

・・・とりあえず目先の問題は『誰に渡すか』だ。

真っ先に考え至ったのが専用機組。

日頃世話になってるしいい恩返しになるだろう。

——だが、専用機組は五人。・・・一枚足りないのだ。

次に考え至ったのは、一夏&一夏を好いている女子達に一枚つつ渡す事。

——だが、同じくこちらにも五人。・・・一枚足りないのだ。

この際一夏に四枚とも丸投げしようかと考えたが、誘って貰えなかった奴の事を考えると胸が痛いのでやめておいた。

「ていうか、一夏は何をしているんだ？」

よし、決めた。

明日考えよう。

「・・・勉強だ」

机に向ったまま答える一夏。

今までこんなに勤勉だっただろうか

「何で今さら」

もうすぐ夏休みだ。

勉強に追いつけないならその夏休みで穴埋めすればいいのに

「期末テストがあるからだ」

先生たちが言ってたな。確か来週だっけか

IS学園と言えど『学園』テストとは切っても切れない関係にあるらしい

点数と順位は公表されるのであまり無様な結果は残せない

・・・ん？

「それだ!!」

——いい手を思いついた。

・・・テストまで残り七日

「——という訳で今回の期末テスト、学年順位上位二名にこちらのチケット二枚組！贈呈しちゃいます！」

昼食時、食堂に集めた一年女子全員にそう宣言する

「そ、それって本当！？」

一人の女子の質問。

「ああ、勿論だとも。チケットは自由に使ってくれ。友達行って思い出を作るのもよし、恋人と行って甘い体験するのもよしだ」

ざわつく女子達。

食い付きは上々のようだ

「ああ、そうだった、一夏にはこの日は空けておくように俺から言っておこう」

今の一言で結構な人数ヒートアップした様だ。

さて、結果が楽しみだな

「つ、鶴来君はその日空けてくれるの？」

一人の女子の質問。

「ああ、一応空けておくよ。誘ってくれるんなら喜んでついて行く」

ていうか夏休み殆ど暇だしな

「よし。じゃあこれで御開きだ。それじゃあ、みんな頑張つてな」

・・・テストまで残り五日

「みんな凄いやる気だな」

今は一夏と一緒に朝食を採っている。

食堂にいつも通り人はいるのだが、全員机と向かい勉強をしている。

「・・・対するお前は余裕みたいだな」

俺の向かいに座る一夏もまた、食後すぐ勉強へととりかかっていた。

「大して思い入れがある訳でもないからな。最低ライン取れば問題ないだろ」

「向上心がないな。・・・そうだ。順位で勝負でもしないか？」

一夏の提案。

なるほど。それはそれで面白そうだ。

「ああ、いいぜ。負けた方はどうする？」

「勝った方に飯を奢る」

「オーケー。後悔すんなよ」

ならば俺も勉強するでしょう・・・

「お前こそ」

そして俺の本格的な勉強が始まった――

・・・テストまで残り三日

「おお、頑張ってるな」

昼食時、鈴を見つけて向かいに座る。

「・・・チケット欲しいからね」

カリカリとペンを動かしながら答える鈴。
なんというか素っ気ないな

「みんなこんな調子だから提案した身としては悲しいぜ」

「アンタは勉強しないの？一応テストよ」

やはりペンを動かしながら問う鈴。
なかなか器用だな

「昨日したから大丈夫だ」

「そっか。アンタは順位とかなんでもいいもんね」

一夏とは競っているものの、少なからず頂上争いをする必要はない。

「まあ、分からない所があったら俺に聞くと良い。教えてやるっ」

昨日それなりに勉強したし余裕あるからな。

「じゃあ、南戸」

手を止め、こっちを見る
重大な事のようにだ

「おう、何でも来い」

「静かにしてて」

「・・・・・・はい」

要らぬ世話だったようだ

・・・テストまで残り二日

「よう、調子はどうだ？」

夕食時、シャルを見つけて向かいに座る。

「うーん、上々かな」

俺が来たところで勉強を切り上げ、パタリと教科書ノートを閉じるシャル。

・・・どこかの鈴とは大違いだ

「邪魔して悪いな。もしあれだったらどうか行くぜ？」

「ううん、ちょうどキリのいいところだったから大丈夫だよ。それに、南戸と話すといい気分転換になるから居てくれた方が僕は嬉しいかな。その——南戸が良ければだけど」

そう言われると照れるな

「そうか。じゃあ気兼ねなく居座らせて貰うよ」

「ふふっ、ありがとう」

「一々こんな事で礼を言われていてはキリがない気がするが――」

「・・・こちらこそ」

――悪い気はしない

・・・テストまで残り〇日

「南戸、インチキするなよ」

「わかってる。純粋な実力勝負だ」

教科は七教科。

文学、IS、化学、数学、世界史、現代社会、地理だ

今日一日で全て終わらせるのでなかなかのハードスケジュールだ

「まあ、頑張りますか」

・・・結果発表

「・・・すげえな一日で結果出るのか」

貼り出されているやたら長い紙。

そこには順位別に生徒の名前が書き出されていた。

三位・・・シャルロット・デュノア 676点

二位とは僅差だったな。

問題数で言えば一問差だろうな

二位・・・鳳鈴音 678点

惜しくも一位には届かなかったな。

まあ数字が階段で縁起がいいのでよしとしよう

一位・・・鶴来南戸 688点

さて、二位と10点差を付け堂々の――

「待て！お前絶対なんかしただろ！？」

言うは一夏。

・・・失礼な

「強いて言えば勉強をしたな。それ以上は何もしていない」

これは本当のことだ。

今回は汚い手を一切使っていない

「ええっ！？いつの間に？お前ずっとフラフラしてたじゃないか」

「人目を避けて勉強してたんだよ」

人間、秘密特訓とかは見られたくないもんだ

「じゃあ、一夏。今度なんか奢ってくれよ」

そういう勝負だったしな

「く、くそつ。良心的な値段の物で頼む！」

「・・・考えておこつ」

「てことで、ホラ。約束のものだ」

チケットを鈴とシャルへ渡す。
なんというかみんなよく頑張ったな。

曰く昨年の一年と比較して平均点が異常な伸びを見せたそうだ。
そんなに行きたいもんなのかね。プールって

「あ、ありがとう」

と鈴

「僕も貰っていいの?」

とシャル

「まあ主催者な俺は上位二名にカウントしないよ」

自分もまさか一位をとれるとは思ってなかったしな

「そ、そっか。じゃあ貰うね。ありがとう」

そうして、期末テストチケット争奪戦は幕を閉じた――

期末テスト（後書き）

閲覧ありがとうございました！

苦悩（前書き）

どうしてこうなっ
た

苦悩

昼食時、食堂

一体何時からだっただろうか。

ふと、シャルロットは過去を思い返す。

・・・好意自体は、同室で過ごす内に生まれた気がする。

そして、本格的に自分の抱いている好意に気付いたのは『黒いIS事件』の後だっただろうか。

——『黒いIS事件』

彼はその時、私達を守るため一人で脅威に立ち向かった。

そして彼は・・・瀕死の重傷を負った。

その時、初めて『もし彼が居なくなったら』と考える。

——考え、恐怖した。

悪寒がした。

足ががくがくと震え、立てなくなった。

気が狂いそうなほど苦慮した。

そこで、彼に対する好意がかなり大きくなっている事に気が付いた。

『ああ、シャルロヌと私は彼が好きなんだ』と

そう気付いてから、彼への好意がもっと大きく膨らんだ。

と、同時に、腐心した。

彼はどこかに行ったりしないだろうか——と

臨海学校の時もその考えが頭を何度も過った。

最初は天才、篠ノ之束博士と親しげに話していた時だ。

聞けば彼と束博士は親子同然の間柄だと言う。

それを聞いて、今まで近くに感じていた彼が何処か遠くに行ってしまったような気がして・・・恐かった。

臨海学校が終わったら私をおいて彼女の元へ帰るのではないかと・・・
・恐怖した

二度目は――

「おう、随分景気の悪い顔をしているな。相談なら乗るぜ」

思いふけていたところへ来て、言いながら、私の向かいに座る南戸。

この『恐怖感』は彼が居ると癒される。

「うーん、これは個人的な悩みだから、南戸には相談できないかな。でも、ありがと。心配してくれて」

彼の声を聞くだけで、近くにいるだけで、この悩みを忘れられる。

そういう意味では彼は、既に私の相談に乗ってくれている

「・・・気にするな。というか女の子ってのは普段から悩みが多いよな。やれカロリーだ、やれ美容の大敵だとか・・・」

話しながら自身の昼食であるパスタにタバスコをかけている。

彼はパスタを食べるときは必ずタバスコをかける。

そして必ず――

「・・・辛っ」

――タバスコをかける量を間違える

「ふふっ、いつもタバスコかけ過ぎてるよね」

「かけ過ぎてるんじゃない。あえて、辛くしてるんだ」

このやり取りも、いつも通り。

ああ、こんな風に南戸と過ごしていたい。

ずっと・・・ずっと・・・。

昼食時、暗いシャルを見つけ、向かいに座る。

「おう、随分景気の悪い顔をしているな。相談なら乗るぜ？」

残念ながら出来る事に限りがあるけどな。

「うーん、これは個人的な悩みだから、南戸には相談できないかな。・・・でも、ありがと。心配してくれて」

何をするにもまず礼だな。シャルは。

礼儀正しい事はいい事だが、ちょっとはどっしり構えても罰は当たらんと思っただけだな

「・・・気にするな。というか女の子ってのは普段から悩みが多いよな。やれカロリーだ、やれ美容の大敵だとか・・・」

こないだ『あれは美味しいけどカロリーが・・・』とか『あれは美味しいけど美容に・・・』とか話してるセシリア達に『好きなものは好きなだけ食べばいいだろ』と言って 酷い目に遭ってたな。一夏が

思いながら、パスタを口へ運ぶ

「・・・辛っ」

喋りながらかけたせいでタバスコの分量をミスったみたいだ。

これで何回目だよ・・・

「ふふっ、いつもタバスコかけ過ぎてるよね」

クスクスと笑っているシャル。

まあシャル笑ったし結果オーライか。

「かけ過ぎてるんじゃない。あえて、辛くしてるんだ」

・・・どこかシャルの目が遠い。
まさか、呆れられたか？

「・・・シャル？」

「ああっ、ごめんね。ちょっとボーっとしちゃって」

呆れられた訳ではないらしい。
よかったよかった

「構わんよ」

シャルはいつも最近ボーっとしてる事が多い気がするな。
考え事でもしてるんだろうか

「あ、あのさ南戸」

こっちもボーっとしかけた所でシャルの声が上がる。

「ん。なんだ」

「その、南戸が良ければなんだけど・・・」

「おう？」

何だろうか。

シャルの事だから割と良心的な事であるのは確かだが・・・。

「僕と一緒にここ、行ってくれないかな？」

手渡されたのはウォーターワールドのチケット。
おお、まさか手元に戻ってくるとは

「誘ってくれるやつがいるとは思わなかったな……。おう、いいぜ。俺でよければ」

これで長い夏休みの予定が一日埋まったな。

「ほ、ほんと!？」

「こんな事で嘘はつかん」

そんな信用ないんだろうか。俺

ああ、でも普段嘘ついてるしな。

当然と言えば当然かもしれない

「それじゃあ、この日は空けておいてね?約束だよ?」

「おう」

この日というか夏休みそのものが空いてるんだが。

まあいいか

苦悩（後書き）

閲覧ありがとうございました！

生徒会長 / 悩める少女（前書き）

生徒会長が早めの登場です

ps心の描写が苦手です。

生徒会長 / 悩める少女

八月、IS学園は遅めの夏休みに入る。

そのせいで、世界中からやってきた学園生は現在ほぼ半分が帰省中。

全寮制だから実家に帰るのは新鮮でいいな―と思う。

そこで、俺も実家に帰ろうとしたのだが、よくよく考えると、俺には実家がなかったので諦めた。

束さんの所に帰ろうかとも考えたが、またよくよく考えると、束さんの現在地を知らなかった。

—— よって俺は、実家などには帰らずIS学園で夏休みを過ごしていた。

とりあえず、帰省した友達にはお土産を頼んである。・・・きっと買ってきてくれる筈だ。

「あちい・・・」

ベッドに寝転びながら呟く

日本の夏は特別蒸し暑い。

いや、俺は日本以外の夏を経験したことは無いんだが、誰かが言っていた。

それを聞いてから、ますます蒸し暑く感じるようになってしまった。

俗に言うプラシーボ効果だ

まあそんな夏も、人類の英知、エアコンをつければ快適に過ごす事が出来る。

そのエアコンをつけようにも、肝心のエアコンのリモコンは机の上。

まあそこまで取りに行けばいいのだが・・・

「怠惰、ここに極めりつてね」

夏の暑さで体力を殆ど奪われ、取りに行く気力など残ってはいない。

逆に考えれば、自分に足りない忍耐力をつけるには丁度いいかもしれないな

数分後、ガチャ と扉の開いた音がする。

「戻ったよ。・・・出る前と一切変化がないな」

一夏が課題提出から帰ってきたようだ

「おう、おかえり。早速で悪いがエアコンをつけてくれ」

「はいはい」

数秒間を置いて、ピツという機械音。

同時に程よく冷たい空気が流れ込む。

「おお、生き返ったぜ」

体を起こし、全身で冷たい空気を浴びる。

よし、気力は回復した

「鈴。入って来ていいぞ」

どうやら鈴が来ているらしい。

「あ、うん。じゃあ、お邪魔します」

扉がガチャと鳴り、入ってくる鈴。

手に握ってるのは・・・俺のあげたウォーターワールドのチケットだな。

なんだ、まだ渡してなかったのか。

ていうか、明日だろ。そのチケット

「おはよう、南戸」

ちょうど起き上がっているところで入って来たので、俺が寝ていた
と思ったらしく、起床時の挨拶をする鈴。

もう昼なのに

「おう、おはよう」

つつこむのも面倒なので寝ていたという事にしておう。

「それじゃあ、俺は昼飯食ってくるぜ」

鈴が席を外せ적인な目線を送ってきたので、空気を読んで席を外す事にする。

・・・さっき、昼食食べたばっかなんだけどな

さて、何をして時間を潰そうか・・・

ISの訓練でもしようかな。

ああでも、この暑さで体を動かそう物なら地獄を見るか・・・。

「おやー、君は・・・鶴来南戸くんじゃあないか」

何もせず食堂でボーっとしていると、わざとらしげに俺を呼ぶ声が後ろからかかる。

振り返ると、そこには扇子を手に持つ少女。

ああ、この人は・・・

「・・・どちらさま？」

一応、俺はこの人の名前を知っているのだが、形式的に聞く。

「私？私はね、更識さらしき楯無。たてなし——IS学園の生徒会長をやってるわ」

そう、この人はIS学園の生徒会長だ。

何度か学内新聞で見た事がある。

なんでも校内最強のIS操縦者らしい。

「へえ、生徒会長さんですか。・・・それで、その会長さんが俺に何か用ですかね？」

そんな人に声をかけられ、やや身構えてしまう。

「そんな身構えなくてもいいじゃん。ただ私は、噂の男子生徒とお近づきになりたいだけなのだよ」

どう見ても何かを企んでいる顔で更識先輩は言う。

ふむ、生徒会長と仲良くなっておけば何か良い事あるかもな・・・。

「生徒会長にそんな風に思われるなんて光栄です。まあ、俺で良ければお近づきになりますよ。更識先輩」

「もっとフレンドリーに楯無と呼んでくれていいよ？あ、たっちゃんでも可」

先輩相手に初対面でそんなフレンドリーになるものなのだろうか。

少なからず、ほぼ初対面でたっちゃんはないと思う

「そうですか。じゃあ俺の事は『鶴来くん』とフレンドリーに呼んでください」

「あ、なら『みつくん』って呼ぶね」

聞いてたんだろうか、この人は。

ていうか呼称が束さんと被ってるよ。

いや、被っちゃんいけないなんて事は無いけど。

「まあ、別にいいですよ」

——生徒会長か。

「ふふっ、何か企んでる顔してるね。みっくん」

彼女もまた、何か企んでいる顔をしている。

「・・・お互い様でしょうよ。楯無先輩」

直観的に、彼女とは、上手くやっていける気がした。

——次の日。

天気は晴れ、さんさんと日が射している。

絶好の、デート日和だろう

そんな中、私はウォーターワールドのゲート前にて彼を待つ。

「うーん。ちょっと早く来すぎちゃったかな・・・。」

今の時刻は待ち合わせ時間の二〇分前。

彼を待たせまいと早めに来たのは良いが、最初、ここに着いたのは待ち合わせの四〇分前だった。

恥ずかしながら、初めての二人きりのデートに気張り過ぎたみたいだ。

「・・・まあ、いつか」

——でも、この待ち時間を辛いとは思わない。

『どんな話をしよう』とか『こんな時間の過ごし方をしよう』と考えるだけで、この待ち時間はこれでもかという程、至福の時となった。

「おはよう、シャル。早いな」

待ちに待った、彼の声。

思わず、悶えそうになる

・・・時刻は待ち合わせの一五分前。

どうやら、彼も待ち合わせ時間より早めに着くように向かって来ていたらしい。

それがとても嬉しくて、頬が緩む。

「お、おはよう、南戸。・・・えへへ、楽しみで少し早めに着いちやっただ」

普通に話せているだろうか。

自然としているだろうか。

心が茹であがって正常な判断が出来ない今、それだけが心配だった。

「おお、そうか。なら目一杯楽しむとしようぜ」

自分の前に行く彼。

ああ、彼がいてさえくれれば私は――

「うんっ」

――何もいらない

時は移ろいお昼時

午前中、散々泳ぎ、騒いで、今はお昼休憩中だ。

正確には食後のティータイムと言ったところか。

「もし、さ」

ポツリとシャルが呟く

どこか面持ちが重い気がする

「うん？」

「もし、僕がフランスの本社に帰るって言ったらどうする？」

何を突然と思ったが、眼差しは真剣そのもの。

IS学園へのデュノア社の介入は今のところ無い筈だが・・・

こいつには何か思う所があるのだろうか。

「さあな。その時の状況による」

「状況？」

シャルの鸚鵡おつむ返し。

「ああ、お前の本意なら止めはしない」

寂しいけどな。

「じゃあ、その・・・本意じゃなかったら？」

「その時は止めるさ。持ちうる力を全て行使してな」

話し合いで解決すればいいが、しないのなら最悪、IS市場から大企業が一つ姿を消す事になるな。

おお恐い恐い

「そ、そっか」

どこか安心したような表情を見せるシャル。

「まあ、そういう事で困ったら俺に言ってくれ。力になるから」

力は程良く、能率的に。

「………ありがとう。頼りにしてる」

……重苦しい空気。

なんともいたたまれない。

「ま、そういう事を考えるのはやめよう。今は楽しむ時間だ」

「……ふふっ、そうだね」

どこか遠い目のシャル。

どうもシャルは最近様子がおかしい気がする・・・。
気のせいだろうか――

生徒会長 / 悩める少女（後書き）

閲覧ありがとうございました！

狂愛は純愛へ学ぶ（前書き）

狂愛という言葉の意味間違ってるかもしれない

狂愛は純愛へ学ぶ

——朝が辛い。昼が辛い。夜が辛い。

朝、目が覚めた時、今までの出来事が全て夢だったのではないかと不安になる。

昼、出歩き彼を見かけないだけで、何処か遠くへ行ってしまったのではないかと、恐怖する。

夜、夕食時に楽しそうに彼が他の女子と話しているのを見ると、胸が苦しくなる。

——ああ、四六時中彼と一緒に居たい。
でも、彼はきつとそれを望まないだろう。

彼とずっと一緒に居たい。
でも、べったりくっついて、彼に嫌われるのは絶対に嫌だ。

背反した二つの強い思いが私を苦しめていた。

「——ロット。・・・シャルロット！」

この部屋のルームメイト、ラウラ・ボーデヴィツヒの強勢な声に名前を呼ばれる。

・・・どうやらまた、考え過ぎで、ボーっとしていたらしい。

「い、ごめんね。．．．えっと、なんだっけ？」

何かを話していた憶えはあるのだが、内容が右から左に流されていた。

「はあ．．．最近どうしたんだ？こういう事が多い気がするが．．．」

ラウラの言は事実だ。

最近になって異常なほどこういう事が多くなった。
その度誰かにボーっとしていると注意されている。

「き、気のせいだよ！あははっ、はははは．．．」

自分でも不自然だと思ふ様な笑い方をしながら、手元の紅茶に口を付ける。

「ふん、どうせ南戸の事でも考えていたのだろ——」「——っ！
ごぼっ、ごぼっ——」

ラウラのあまりに鋭い考察に、むせ返る。

「な、なんで南戸なの？」

「お前、南戸が好きなんだろう」

必死に皆には悟られまいと隠してきたのに、あっさり言われる。

「なっ、なっ・・・」

なんでわかったの？どうしてそう思ったの？
そんな疑問が頭の中でグルグルと回る。

「・・・・・・・・・・」

自分の顔が耳まで紅潮してるのがわかる。
恥かしさが限界を突破しそうだ。

いや、既に突破しているかもしれない

「何故気付いたのか、と聞きたそうだな」

「……うん」

誤魔化すのは無理そうだ。

とりあえずその理由を聞いておいて、以後の役に立たせよう。

「お前はわかりやすいからだ」

……漠然とし過ぎて全く役に立たなかった。

「そ、そっか……そうなんだね……」

でも、人の好意とかそういうのに疎そうなラウラにわかりやすいと言われるという事は相当なんだろう。

もしかして、南戸気付いてたりするのかな。

気付いてたら……どうしよう……

「安心しろ。あいつは気付いていない」

私の顔色を見て、不安になったのがわかったのかラウラはそう告げる。

「・・・・・・そうなんだ」

それはそれで、少し残念な気もする。

もし、彼が私の好意に気付いたうえで、ああ接してくれているのだとしたら・・・・とか一瞬期待を持ってしまった

「だ、だがな、南戸はお前に少なからず好感を持っていると私は思うぞ」

そう元気づけるように言うラウラ。

言動、思考、仕草は軍人そのものだが、彼女は思いやりのある子なんだ。

そう、改めて認識する。

「ふふっ、ありがとう」

「ル、ルームメイトが暗くあつては困るからな！悩み事があるのなら私に相談するといい」

お礼を言われて照れているのか、どきまぎとするラウラ。

・・・彼女になら『この思い』を少し話してもいいかもしれない。

「・・・・・・・・それじゃあ、少し聞いてくれるかな？」

「どんどん」とい

そう胸を張る彼女には、今までにない頼もしさがあった――

今俺の目の前には摩訶不思議な現象が起きている。

「おお、みつくんじゃないか。奇遇だね」

俺の前に立つ楯無先輩は言う。

『奇遇』とは思いがけず出合う事で、ふと赴いた先で偶然そこに知り合いが居た時に使う言葉である。

・・・はたして、彼女にとってこれは『奇遇』なのだろうか

「・・・・・・・・何で俺の部屋に」

そう、この人は俺の部屋に入ってきているのだ。
正確には俺兼一夏の部屋だが。

「みつくに頼みたい事があってね。――来ちゃった」

可愛らしく言っているが、何の前触れもなく、ふと振り返ったところの人が居たのだ。

・・・・このホラー映画だよ

「訪ねてくれるのは良いんですが、玄関から入ってくださいよ」

「だって、それじゃあ面白くないじゃない」

悠揚と立ち言い放つ楯無先輩。
あまりの堂々としたその様に、むしろこちらが間違っている気がする。
てくる。

――いや、どう考えても俺の方が正論だろ。気を確かに持て俺

「……それで、俺に用事って何ですか？」

この人はきつと常識で計ってはいけないタイプの人だ。

こういうタイプの人には無理に常識を押し付けず、こちらが順応するのが一番いい。

「そうそう、忘れるところだったよ。……本題の前にテストね」

言った後、扇子を取り出し手に持つ楯無先輩。

扇子を使ったテストが思いつかないな

「さて、問題です。これは何と読むでしょう！？」

バシッと広げられた扇子。

そこには達筆な字で『亡国機業』と書かれている。

「何とって……ファントム・タスクじゃあ——」

言って、気付く。

『嵌められた』と

「みつくん凄いつ！大正解だよ！」

そう合っている。

合っているからこそ——不味いんだ

「でも、何でわかったのかな？漢字の読みじゃなくて、この単語の通称が」

『ぼうこくきぎょう』と直接読んだのなら言い逃れは出来ただろう。
だが俺は通称で答えてしまった。

それが意味する事は——

「それって、みつくんはこの単語の意味も理解してるってことだよ
ね」

——そう、知っているという事だ。

普通は知らない『その組織』の存在を。

「ふふっ、思った通りでおねーさんは嬉しいよ。それじゃあ本題に入るね」

ああ、くそっ。

厄介事な気しかない

「――聞いてくれてありがとう。・・・少し楽になったよ」

ラウラに思いの丈を全て話した。

最初は、ほんの少しだけ話す積りだったんだけど、言葉が言葉を紡ぎ気がついたら、全て話してしまっていた。

彼女はこれを聞いて私をどう思うだろうか。

私を独占欲の強い自分中心の人間と思うだろうか。

私を人を信じられない疑念の塊と思うだろうか。

「なるほどな。まあ、お前の気持ちもわからんでもない。私も何度かそう思ったことがある」

以外にも彼女が最初に口にしたのは、私への肯定だった。

「だがな、お前は南戸の肝心な所を理解していない。だから、お前は不安になるんだ」

凜とした態度で、私に語り、教えるラウラ。

どこか弁が織斑先生と似てる所があるのは師弟故だろう。

「肝心な所……？」

彼の肝心な所？

どこだろう。全てが肝心な気もするけど

「ああ、私が言える事は『鶴来南戸』^{あいつ}はそんな薄情な奴ではない。と言う事だな。——まあ後は自分で解決しろ」

言った後、ラウラは部屋を出て行ってしまふ。

「そんな事……わかってるよ……」

残され、独り呟く。

——そんな事はわかってる。

彼は薄情な人ではないとわかってる。

でも、どうしても、疑ってしまう。

なら、どうすればいいの？

どうすれば彼を信じられる？どうすれば疑う心を忘れられる？
どうすれば…… どうすれば……

一人苦慮する中、トントン——とドアが叩かれる。

ドアを叩いている以上、ラウラが帰って来たのではない。

本来ならこの心境で出る気にはならなかった筈だ。

……でも、今回は違った。

自分でも不思議なくらい、真っ直ぐと玄関を目指した。

直観的に、出なければならなかったと思った。

玄関に到着し、ガチャリとドアを開ける。

そこに居たのは――

「よう、来てやったぜ」

――やはり彼^{みなと}だった

狂愛は純愛へ学ぶ（後書き）

閲覧ありがとうございました

彼は登場する（前書き）

下書きが消えて遅れました

彼は登場する

「久しぶりだな、南戸」

「……………なんでさ」

楯無先輩と別れた後、ラウラと遭遇する。

……………またしても、自室で。

「シャルロットがお前に相談があるそうだ。あいつの部屋まで行ってこい」

ビシッと俺に指を指して告げるラウラ。

要件も、訪ねてくるのにも、なんの不満もない。
俺に不満があるとすれば――

「いや、どうやって入って来たんだよ」

こいつらのプライバシーへの気遣いの無さだ

ていうかそもそもこの部屋、というか全部屋の扉はオートロック式だ。

それ故、鍵がかかってないなんて事は無い筈なんだ。

なのに当然が如く入ってこれているこいつ等。

流石にザル警備すぎるだろ……。

「気にするな」

全然気にするけれど、若干聞くのが恐くなってきたので聞くのはやめておこう。

合鍵を持っているなんて言われた日には、この部屋に監視カメラを設置しなければならなくなる。

「……シャルだったな」

ベッドから立ち上がり、服装を正して玄関へ向かう。

「——ていうかさ」

「なんだ？」

当然が如く一夏のベットに座っているラウラに話しかける。

「出ていかないの？」

仮にも部屋の主が出ていこうと言うのに、客人であるラウラは平然と居座ろうとしている。

こういう場合って客人は気を使って、出ていくものではないだろうか。

「私は一夏^{ひと}を待つ」

「……そうですか。ごゆっくり」

「ああ」

言って、部屋を後にする。

それと、俺の中の『常識』はこの学園にはほとんど通用しない事がわかった。

「さて、向かうはシャルの部屋だな」

意気揚々と向かおうとしたのはいいんだが……

「……ラウラに場所聞いてなかったな」

場所を聞くため、今来た道を引き返して行った――

それにしても、相談とは一体何だろうな。

呼び出しという事はそれほど重要な事なのかね。

「さて」

わからない事を思索してもしょうがない。

とりあえず目の前の扉をノックするのでしょうか。

――コンコン。

ノックの力加減は完璧だ。

たまに力加減を間違え強く叩いて、申し訳ない気持ちになる事があるからな。

……いや、何の話だよ。

そんな不毛な事を考えていると、ガチャリと目の前の扉が開く。

「よう、来てやったぜ」

「……み……みなと……なんで……」

出てきたのはシャル。

まあラウラは居ないしな。

シャルは何があつたのか、普段のほくほくとした笑顔とは対照的にどこか虚ろな顔をしている。

ここまで落ち込んでいる事は今まであつただろうか。

男装がばれた時も落ち込んではいたが、ここまでではなかった筈だ。

「何でって——。お前が呼んでるってラウラが」

「……………入っていいよ」

シャルは意外な来客が来た的な雰囲気醸し出している。

あれ？呼ばれてなかったんだろうか。

「邪魔します」

シャルの部屋へ入る。

実質IS学園で女の子の部屋に入るのは初めてだな。

あ、でも一時期シャルと同室だったからそうでもないか。

どうでもいい事だが部屋の中、甘い匂いするな。

———なんか緊張してきたぜ

「じゃあ、適当なところに座ってて———」

言って、お茶の準備に向かうシャル。

「悪いな。気を使わせて」

とりあえず、近くの対面式のソファに座る。
ベッドに座る気にはなれんしな。

「いいよ。呼んだのは僕なんだし」

コトリ と俺の前に置かれるお茶。

そして、シャルは俺の向かいに座る。

「ああ、そうだった。用事って何だ？」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

「ああ、そうだった。用事って何だ？」

—— 彼が来た。

なんで？ いや、なんで来たかはわかっている。

原因はラウラだ。

そう彼が言っていた。

私がいらないのは、なんでラウラは今彼を呼んだからだ。

今ここで解決しろという事だろうか。

普通こういうデリケートな問題って時間をかけて徐々に解決させる物ではないのだろうか。

流石にこの場で言うのはちょっと……

—— なら、適当にはぐらかして南戸に帰ってもらおう？

……それは……ダメだ。今、言わなかったら、きっと後悔する。

「あの……ね」

「おう」

とは言ったものの何から話したのか・・・

考え込んでいると、私の言葉を待っている彼と目が合う。

「・・・・・・・・い、今、言うからね」

や、やばい。

・・・・・・・・緊張してきた。

「わかってるって」

心の中で深呼吸。

すーはー すーはー と

——よし

「ぼ、僕——私は、南戸あなたが好きです！友達としてではなく、
人の異性として」

何をとち狂ったのか、一番隠さなければならぬ事を初めに言ってしまった・・・・・・・・。

「・・・・・・・・え？」

案の定ポカンとしている彼。

まさか告白されるとは思っていなかっただろう。

なにせ本人である私も今告白するとは夢にも思わなかったから。

「・・・・・・・・南戸と一緒にいられない時間が寂しい。・・・・・・・・他の女子に南戸の笑顔が向いているのが嫌だ。・・・・・・・・南戸が——」

・・・・・・・・数分後。

「——わかった。わかったから。やめてくれ！」

彼の懇願の声。

・・・・・・・・熱くなって、一方的に語り過ぎたようだ。

彼の顔がやや赤い。

やはり一方的に押し付けられて怒っているんだろうか。

「その……ごめん。やっぱり、迷惑だよね」

「い、いや、お前の好意はその……嬉しいよ。で、でもだな、その好意を口で表現しないでほしい。は、恥かしくて心が砕けそうだ」

彼はわたたと取り乱している。

こんな彼を見たのは初めてかもしれない――

彼は登場する（後書き）

閲覧ありがとうございます！

少年は苦悩する（前書き）

これまでの話ちよつと修正するかも

少年は苦悩する

自室

——この気持ちを伝えられただけでも充分だから。

そう言っただけでシャルは俺の答えを聞いてこなかった。

……もし、聞かれていたら、俺はどう答えただろうか……？

……あまり、考えたくないな。

「……………はあーっ」

一人深い溜息を吐く。

溜息を吐いた事で、自分にとってプラスになる訳でもない事はわかっていても、そうせずにはられない。

頭を抱えて、悩む。

きつと、彼女俺より苦悩したんだろう。

それに気付いてやれなかった無神経な自分が、仮に気付けたとしても、何の手も打てないであろう自分が、なんとも情けない。

(これからどう接しようか……)

彼女の好意にどう応えればいい？

悩む。悩む。悩む。

．．．．．しかし、いくら悩めど良策は思い浮かばない。

「．．．．．飯食うか」

空腹では頭は回らない。

ちよつど良く夕食の時間だしな。

「そうと決まれば．．．．行くか」

めざすは食堂。

鉢合わせになるかもしれないリスクが伴うが、飯を食わねば始まらない。

そもそも今悩んでも絶対に解決策は思い浮かばないしな。

少し着崩れた服装を正し、玄関へ向かう。

食堂。

日替わり定食を選び、適当な机へ座る。
依然として解決策は思い浮かばない。

そも、肝心の『俺がどうしたいか』がはっきりしない。

「ここ、いいか？」

考えながら、味噌汁をかき回していると声がかかる。
・・・どうやら一夏らしい。

「どうぞ」

言われ俺の向かいに座る一夏。
珍しく一人みたいだ。

「随分苦悩してるみたいだな」

人が抱くマイナスな感情にはやたら敏感なこいつ。
好意とかは一切気付かないのに。

——それは俺も言えないか

「俺も健全な青少年だ。悩みの一つくらいある」

「シャルロットに関する事か？」

なぜ知っている

「・・・・・・・・知ってたのか」

「あんな露骨なアプローチじゃ気付かない方がおかしい」

一夏にだけは言われたくない事を言われる。
俺、コイツと同族ってことか・・・・・・・・ああ

「まさか俺が色恋沙汰で頭を悩ます日が来るとは夢にも思わなかったよ」

くそう・・・・・・・・悩み過ぎて頭が痛い。

「まあ、俺は応援してるぜ」

「・・・・・・・・何をだよ。なあ、何をだよ」

どうも一夏は面白がっている気がする。
憶えてやがれ……。いつか必ず報復してやる……

「あの……。ここ、いいかな？」

現れたのはお盆片手のシャルロット。
指しているのは俺と一夏の間の席だ。

「――！！」

因みに俺は思考がフリーズしてる。

「それならこっち座れよ。俺はもう食い終わったから」

そう言って立ち上がる一夏。

「え・・・・・・・・いや、・・・・・・・・え？」

おい、馬鹿野郎。

変な所で律義に空気読まなくて良いんだよ！

その空気を呼んでやった顔をやめろ！

むしろ空気読めてないよお前！

二人きりにされてみるお前！

気まずいったらありやしないだろうが！

「あ、うん。ありがとう一夏」

「おう、それじゃあな南戸。ごゆっくり」

頼む！

この場に居てくれ一夏！

もう報復とか思わないから！

そんな声にならない思いは一夏に届かず、あいつはそそくさと自室へ戻って行った。

—— 受けた恩は二倍で返す。

—— 受けた仇は五倍で返す。

—— 憶えてやがれあの野郎・・・・

「・・・・・・・・お、おお、さっきぶりだな」

とりあえずは一夏の処分は後回しで、目先の問題から取り組もう。

「そ、そうだね。さっきぶり」

なんともギクシャクしたやり取りだ。

自然を意識してるがどうしても緊張してしまう。

あんな事を言われては誰だってそうなる筈だ。

「・・・・・・・・あのさ」

「な、何かな？」

「お前は俺に・・・・・・・・その、どうして欲しいんだ？」

とりあえずこれだけはハッキリさせておきたい問題だ。

ここがハッキリしていれば俺も立ち回り易くなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばしの沈黙

「・・・・・・・・ああ言っておきながらこう言うのは、我儘だと思うけれど、今まで通りで接して欲しい。——でも少しはそういう感情を抱いてる事を意識してくれると、嬉しいかな」

——なるほど。

「・・・・・・・・わかった。善処する」

俺は俺なりに考えて、彼女の想いに応えよう。

それが彼女にとって、良いのか悪いのかはわからないが——

少年は苦悩する（後書き）

閲覧ありがとうございました！

古京（前書き）

武装説明回。

古京

夕刻、第三アリーナ。

現在セシリアと秘密特訓中

「——そちらの進み具合はどうでしょうか？」

「駄目だな。さっぱりわからん」

灰蓮の第二形態《古京》の^{ワソフ}<ruby><rb>単一仕様</rb>
><rp>(</rp>><rt>夢幻泡影</rt>><rp>)<
/rp></ruby>を使用し、セシリアの放ったレーザーを曲
げる。

——『夢幻泡影』の特性は言葉にするならば『支配』。

今でこそエネルギー弾の軌道を曲げるので精一杯だが、机上では、
ある程度電気を帯びている物体なら何でも制御を乗っ取る事が出来
るらしい。

……それが人の操縦しているISであつたとしても。

そして、俺が現在一生懸命取り組んでいるのが、放たれたレーザー
を空中で分解させ霧散、消滅させる事。

昼頃からずっと取り組んでいるのだが、レーザーは曲がりはずれど、消えはしない。

「わたくしの方もさっぱりですわ……」

ズーンと沈んでいるセシリア。

セシリアには『偏光制御射撃』のヒントに出来るのではないかと
言って、この練習方法に付き合って貰っている。

因みに『偏光制御射撃』とはビット型の方の《ブルー・ティアーズ》
《が最大稼働時に使用可能になる『自分の放ったビームの軌道を操
る（曲げる）』という《夢幻泡影》と似た能力だ。

故ヒントになると思ったのだが……。

「てことは根本的に原理が違うのかねえ……」

「………ですわね」

数時間にも亘る訓練にも関わらず、成果は〇に近く、そんな成果に
一人焦燥する。

日々成長する仲間たちに、置いていかれている自分。

追い付こうと努力すれども、彼女たちには届かない。

「今日はこの辺にしよう。原理が違つかもしれない以上、明日からは実戦訓練をした方がいいな」

古京の戦闘状態を解除する。

「また明日も、今日と同じ時間で問題ないでしょうか？」

「ああ、問題ない」

ここ最近、俺はセシリアと毎日練習している。

理由は単純に、利害一致だ。

俺はエネルギー兵器を主体兵装としているセシリアが相手なら、《夢幻泡影》の試行錯誤が出来る。

対するセシリアは俺が相手なら、エネルギー兵器の通用しない相手との戦闘手段を考える事が出来る。

——といった感じに。

「——それではわたくしはこれで。南戸さん、今日もありがとうございます」

「おう、こちらこそありがとうよ」

ぺこり　と一礼した後、脱衣所へ向け歩いていくセシリア。
さて、俺は――

「もう一頑張りするでしょう」

彼女たちとの距離を詰めるには彼女たち以上の努力をするのが一番手っ取り早い。

・・・幸いあと二時間ほどアリーナの使用可能時間はある。

（行くぞ、灰蓮）

呼びだすのは第二形態・古京だが、こっちの方がしっくりくるので俺は灰蓮と呼んでいる。

・・・どうでもいいな。

そんな事を思っている間に古京の呼び出しが終わる。

(さて……………)

——『越界の瞳』の解放命令を確認……………解放出力——
——九七%。損傷発生。レベル低、両目の変色。——

久々の瞳に埋め込まれているナノマシンの起動。
途端に凄まじい量の情報が脳に流れ込む。

相変わらず凄いなコレ。

《霧雪^{きりゆき}》を呼びだし、構える。

因みに霧雪の形状は和名であるにも関わらず『ハルバード』

斧と槍を足して割ったような武器だ

《驟雨》と違い特殊機能は一切なく、ただの実体武器だ。

驟雨は第二形態になった故、使えなくなってしまった。

ああ、結構気に入っていたのに……………。

その代わりに増えた武装が《甘露^{かんろ}》

形状は目視不可な程小さな『ナノマシン』

今も俺の周りに幾千個の甘露がフワフワと漂っている。

見えないけどね

ついでに説明すると甘露には驟雨と同様にギアがついている。

『普』『爆』『電』の三つ

『普』は言うまでもなく待機状態。

・・・特記事項はないな

『爆』は甘露が爆発を起こす。

甘露は俺の周りを離れないので基本的にその爆発には俺も巻き込まれる。

そのまんまの意味で自爆技だ

『電』は甘露が一定範囲に電気を放つ。

『だから何なんだ?』と思うかもしれないが、これは非常に強力だつたりする。

《夢幻泡影》の能力は『電気のある程度帯びている物体なら何でも制御を乗っ取る事が出来る』だ

甘露が電気を放ってれば、放った電気によって帯電した物体も、軌道制御が出来るようになる。

つまるところ、実体兵器までも、曲げる事が出来るようになるわけだ。

・・・まだ《夢幻泡影》を使いこなせていない以上、今は無理だけどな。

「よつと・・・よつと」

セシリアが居ない以上、夢幻泡影の練習は出来ない。

だから、とりあえず霧雪をグルグルとバトンの様に回している。

何で、そういう結論に至るのかは俺にもわからない――

「……………ただいま戻ったよ」

アリーナ閉鎖時間まで練習し尽くした後、疲労困憊として自室へ帰る。

練習し尽くした割には、ISが上達を見せないのが精神的に辛かった。

「おかえりー」

部屋の奥から聞こえる聞き慣れた声。

でも、その声はこの部屋の主の声ではない。

またなのか

「……………鈴か」

「そうよ」

寝転びながら矜持きょうじを持って言う鈴。

何でいるんだとか、もう突っ込む気にすらならない。

「一夏は？」

「さあ」

この部屋無法地帯すぎるだろ……。

どんどんとすり減っていく俺の精神。

もう、俺は駄目かもしれない

「……わかった。——俺はもう寝るから、静かにしててくれよ」

鈴を背に寝巻に着替える。

一枚脱いで着るだけなので、ものの数十秒で完了だ。

「いいけど……晩ご飯食べないの？」

「ああ、あんまり食欲が湧かんのだな」

朝食食は多く摂り、夕食は少なく、最悪抜いてもいいと一夏も言っていたし問題はないだろう。

それに、食堂に向かう元気もないしな。

とりあえず今日は疲れた。

寝よう。寝て、明日また頑張ろう――

古京（後書き）

閲覧ありがとうございました！

あくる日の織斑一夏？（前書き）

テスト期間故更新遅れました！

あくる日の織斑一夏？

夏の陽光が窓から差し込む。天気は快晴。
．．．．．なんとも気持ちの良い朝だ。

しばらく起床の余韻に浸った後、ベッドから起きて立ち上がる。

さて、まずは――

「おい、起きろ南戸。朝だぞ」

寝坊癖のルームメイトを起こそうと声をかける。
朝から疲れる仕事だが、頼まれている以上仕方ない。

「．．．．．あと三十分寝かせてくれ」

頼んだ本人がこれなのは、いただけないがな。

「はあ．．．．．セシリアと約束あんだろ？」

「――そうだったな」

聞くとむくりと起き、立ち上がって朝支度を始める南戸。

——俺も準備をしよう。

俺は俺で予定があるからな。

.....

「ではな。今日も一日頑張ってくるぜ」

ボタンと勢いよくドアを開け放って駆けていく南戸。

「.....早いな」

因みにあいつを起こしてから五分も経っていない。

その数分の間に全ての準備を済ませて出掛けてしまっ辺り、同じ時間を歩んでいるとは到底思えない。俺はあいつの一日は七十二時間ぐらいで構成されていると思う。いや、冗談抜きで。

「——いつてきます」

誰もいない部屋に言う。

誰もいないとわかっていても言ってしまうのは習慣だからだろう。

確か集合場所は.....第二アリーナだったか

「『遅い』」

場所は第二アリーナの正面入り口前。

俺が着いて早々に声を上げたのは凜と箒だ。

「……確かに待たせたのは悪いけど、遅刻ではないぞ」

現に時計の針は待ち合わせ時刻の一〇分前を指している。

「相手を待たせた時点でそれは遅刻だ」

「それだと確実に遅刻者が出るじゃねえか」

箒の理不尽な理論につっこみながらアリーナ内へ入る。

それに続く鈴、ラウラとシャルロット。

この四人が夏休み中のいつもの訓練メンバー。

もう一人の代表候補生であるセシリアは南戸と訓練をしている。

「おはよう一夏」

言うはシャルロット

「おう、おはよう」

そういえば、南戸がセシリアを訓練のペアに誘った時は本当に大変だったな。……主にシャルロットが。

あの時の幾つもの重火器を持って南戸に迫って行く様は圧巻の一言に尽きる。——思い出して少し身震いする。

「——あの、織斑一夏くんだよな？」

過去を思い返していると、女生徒から声をかけられる。

……リボンの色は二年。先輩か

「……はい、そうですけど」

セシリアと同様の金髪碧眼をしたその人に返答する。
でも顔立ちと肌色は日系人っぽい。

「出来ればいいんだけど、私と模擬戦をして貰えないかな？」

名も知らぬ先輩からの申し出。

実戦経験を少しでも積みたい俺としては、願ってもないチャンスだ。

「全然いいですよ。むしろ大歓迎です」

「ありがと。それじゃあ先に行っててくれる？私は人払いとかしておくから」

「あ、はい。了解です」

人払いをするという事は、それだけ本格的にやるという事か……。

二年生と戦えるなんて滅多にある事でもないし、本格的にやってくれるのはかなり助かるな。

「……………それじゃあ後でね」

タッタッタと駆けていく先輩。

しまった。名前聞くタイミングを逃した。……まあ、後で聞けば

いいか

「『どういこと（だ）？』」

俺に迫る鈴、ラウラ、箒の三人。どこか先日のシャルロットを思わせる雰囲気醸し出している気がする。

最初に約束していたのにも関わらず、上書きで約束してしまった事に怒っているんだろう。

とりあえず、謝るか……

現在アリーナ上空。

三人の雨の様なブーイングをなんとか宥め、先輩を待っている。

アリーナ内にはもう人はいなく、俺一人ぼつんとアリーナに飛んでいる。

『ごめんね。遅れちゃって』

ピットから飛び出してきた黒い機体。

俺
と向かい合う高度まで上がった所で、先輩の声がオープン・チャン
ネルで響く。

『いえ、大丈夫ですよ』

最初は距離があつたので気付かなかったが、俺はこの黒い機体を知
っている。

……いや、この学園生なら誰もが知っている機体だ。

『うん？何か変かな？』

そう言つて自分の体をチェックする先輩。

『てつきり専用機持ちの人かと』

彼女の乗っている機体はこの学園でも採用されている訓練機《打鉄》
外国の人だからてつきり代表候補生とばかり思っていたな。

『専用機はあるんだけど、今は使えない状況にあるんだよね。でも、
打鉄これでもいい勝負が出来ると思うから安心して』

そう自信満々に告げる先輩。
かなり舐められている気がする。

『一応言っておきますが、訓練機だからって手は抜きませんよ？』

『……………その方が助かる』

言つて、打鉄の近接装備である日本刀を模した近接ブレードを呼びだす先輩。

俺も《雪片式型》を呼びだし、構える。

さて……………作戦はどうする？

——決まっている。

突っ込んで、倒す。それだけ。

……………白式はそういう機体だから。

『零落白夜』を発動させ、雪片に輝きを持たせる。

『行きますよ』

『いつでもいいよ』

聞いて、直ぐ彼女の元へ突っ込む。

南戸は考えもなく突っ込むのは馬鹿のする事だとよく言っているが、たとえ馬鹿と言われても俺にはこれが一番性に合っている。

「でやああああああっ!!」

雪片の範囲に彼女が入ると同時に上段で振り抜く。

ギンッ! と金属音が鳴る。

どうやら、彼女の近接ブレードによって右手の雪片が大きく横に弾かれたようだ。

「特攻は愚策だよ……!!」

「くっ……!!」

先輩の回し蹴りによる攻撃。

咄嗟にそれを左腕でガードし、体制を崩す。

「ふふふ、零距离だね」

いつの間に持ち替えたのか、先輩の持っていたのはショットガン。その銃口を胸に押しつけられている。

・・・回避も、防御も間に合わない、か。

ダンッ　と響く炸裂音。

それに伴い、吹き飛ばされる。

「・・・・・・・・くそっ」

なんとか体制を立て直す。

零落白夜の発動と、さっきの零距离ショットガンのお陰で、シールドエネルギーは半分を切っている。・・・・・・・・まずいな。

先輩はかなり距離の空いた先で、近接ブレードで突きの構えをとっている。

「――次、行くよ」

突きの構えをとったまま言う先輩。

・・・どう考えてもあの突きは届かない。あれはハッタリだ

そう考え至り、《雪羅》を射撃モードに切り替えて荷電粒子砲で彼女を狙う。

「——遅いよっ!」

「なっ!?!」

瞬間、爆発的に速度を上げて突きの構えをとった打鉄が突っ込んでくる。

「…………『イグニッション・ブースト 瞬時加速』か

「ぐっつ…………!」

突発的な事態で反応できず、モロにブレードによる突きを胸に喰い吹き飛ばす。

「チエックメイトかな?」

シールドエネルギー残量的に零落白夜は使えない。
……………終わったか。

「まだまだあっ!」

その思いを振り切る為に虚勢をはり、突撃する。
手に持っている雪片は通常の物理力であり、一撃必殺の攻撃力はな
い。

たとえ彼女にこの一撃が入ったとしても、彼女を墮とせはしない。

彼女の向けたショットガンが、俺の負けを暗示していた――

あくる日の織斑一夏？（後書き）

閲覧ありがとうございました！

あくる日の織斑一夏？ / 地下で（前書き）

更新大分遅れて申し訳ないーっ

面白くなって更新亀とか（）笑 ってなっちゃいますかね

あくる日の織斑一夏？ / 地下で

相手は二年の先輩で、自分より一年分、あるいはそれ以上多くの経験を積んでいる。

だが、機体のスペックは圧倒的にこちらの方が上。……それでプラマイ〇だと思っていた時期が俺にもありました……。俺は無人の襲撃者を打ち破り、黒き姉の模造を破壊し、銀の暴走機を墮とした、と慢心していたのかもしれない。

そも、この功績は仲間が居たからこそだったと言っのに……。

そんな慢心を持ち、挑んだ勝負の結果は敗北。しかも一度も攻撃を当てる事が出来なかった。

——完全敗北。まさに、そんな言葉が似合う負けっぷりだった。

……もつと強くならなければ。

思いだけでは強くはなれない。もし強くなるのならこの世界に弱者はいない。

だから、努力する。今までより本格的に。より実戦的に。

——後で、先輩にコーチをお願いできないか、聞いてみるか。

その先輩はというと、俺との試合の後、直ぐ鈴に模擬戦を申し込まれて、まさに今、鈴と模擬戦をしている。

アリーナ中に飛び交う二つの黒い影。片方は中国製の第三世代IS『甲龍』。もう片方は日本製の第二世代IS『打鉄』。

見る限りでは押しているのは先輩の方の様だ。

自分のISほぼ完全に使いこなせている鈴でさえ押されるのだから、
一年の経験差というのはそれほど大きいものなのかもしれない。・
・世代差以上に。

「――勝負が決まりそうだな」

言うはラウラ。

その言の通り、アリーナで行われている模擬戦は今まさに終局を迎えようとしていた。

優位に立つは変わらず先輩。世代差があるのに負けている為か、鈴からはかなりの焦燥感が伺える。

「うん。鈴は一か八かの勝負に出るみたいだね」

「ああ」

ラウラと話しているのはシャルロット。

「ん？どうしてそう思うんだ？」

アリーナで戦っている鈴からは『一か八かの勝負に出る』なんて雰囲気は一切醸し出してはいない。

相手の距離には入らず、龍砲での中距離攻撃をしている鈴。どちら

かと言えば、現状維持をしながらの時間稼ぎをしている様に見える。

「うーん……。なんとなく、かな？」

「勘だ」

二人とも確かな根拠はないようだが、自信を持って言っている。こいつらは実力者が辿り着ける境地の様な所へ至っているんだろうか。わからん。

「くうっ！！なんで訓練機に勝てないのよ！？」

ピットに戻ってきて早々、悔しそうに声を上げるのは鈴。

さっきの試合の結果は鈴の負け。終盤戦で二人の言った通り鈴は防御を捨てた一か八かの特攻を行ったが、見事にその行動を先輩に読まれ、見事に打鉄のショットガンで撃ち落とされていた。

「いい経験になったよ。ありがとう」

続いて戻って来たのは先輩。

接戦した鈴と違って、一方的に負けた俺。はたしてそれはいい経験になったのだろうか。

・・・・・・気にしたら負けか

「こちらこそありがとうございました。いい経験になりましたよ」

答える

自身の遙か上に行く存在。その存在は、自分の向上心を上げるのはもってこいだ。

いつか彼女に追い付き、追い越せるように頑張らなくては。

まあ、まずは周りの代表候補生に追いつかないといけな^{やしい}いか。

「なによアンタ。悔しくないの？」

「接戦したなら兎も角、あそこまで綺麗に負けちゃ悔みようがない」

なんて達観してはいるが、悔しくない訳がない。

性能の差を補って余りあるほど、あらゆる面で相手の方が上手だった。ただそれだけの事。それだけの事だったからこそ、悔しかった。

「織斑くんは初めて白式^{それ}に乗ってから四ヶ月だってね。その短期間

でこれだけ上手くなるって事は相当才能あるよ。私が保証する」

「・・・そう言われると照れますね。あと、俺の事は一夏でいいですよ」

褒められて少し頬が緩んでしまっている。

・・・睨むな鈴よ。素直に嬉しかったんだ

「ああ！そういえば自己紹介してなかったね。私はトーカ・ガルシア。トーカでいいよ。それでも、アメリカの代表候補生だよ。それでもって――」

思い付いたように自己紹介をするトーカ先輩。
言いながらクルリと一回転。

「――これからよろしくね」

最後にスカートをつまんでにこやかに一礼する。

「こちらこそよろしくお願いします」

笑顔で返す。

「これが噂の・・・なかなかキユンとくるものがあるなあ。・・・私も気をつけなきゃいけないか」

一人呟くトーカ先輩。途切れ途切れ聞こえてくるが、全容はわからない。

きつと俺には関係の無い話だろう。

「物は相談なんだけどさ――」

独り言に一段落ついたのか、真中に立つて声を上げるトーカ先輩。そんな先輩に俺含む専用機持ち五人の注目が集まる。

「――君、コーチとか欲しくない？」

「広いなあ」

IS学園地下五十メートル。

そこには『レベル4権限』を持つ物しか入る事の出来ない、隠された空間があった。

先の無人機襲来事件の時に回収された無人ISはここで秘密裏に研

究をされていたりする。

あの事件があつてから約半年が経とうとしているにも関わらず、解析成果は無に等しいらしいが。

戦闘で一夏に木っ端微塵にしたかららしい仕方ないか。

さて、本題に戻そう。俺は今、そんな凄い所にいる。

不法侵入とかではなく、ちゃんと招かれて。

招かれた理由は二つ。

一つは『越界の瞳』の解析。俺はこの力にリスクがないのかを知っておきたい。

学園側も世界唯一の人体とナノマシンの適合例である俺を検査してみたい。

つまるところ利害の一致だ。

そしてもう一つはさっきの話に出てきた、未だ一切の成果を得ない無人機の解析の手伝いだ。

この話は結構前からオファーが来ていたのだが、断っていた。単純に時間が無い故に。

だが、最近になってめっきり暇な時間が増えたので、受ける事にした。報酬もあるしな。

因みに報酬は無人機に使われていたコアだ。

俺がそれを所望した時は、関係者達はかなり渋ったが、長期に渡って交渉した所、そのコアをしばらくの間『借りれる』事になった。

借りてどうするかって？・・・それは俺にもわからない

「まあ、期待に添えられるよう頑張りますか」

あくる日の織斑一夏？ / 地下で（後書き）

オリキャラは充分強く設定してありますです。

そしてオリキャラは一夏達のコーチに。

南戸は地下へ。

地下のくだりは、今後の文章量の補完の為だったりします。

閲覧ありがとうございます！！

刻一刻と迫る日常

夕刻、食堂。

夕食が終わり、専用機持ち七人。食後の余韻に浸りながら会話をしている。

「で！あんたはどう思うの！？」

なんて、俺に食ってかかってきているのは鈴。

なんでも、二年の先輩が一夏のコーチに立候補したらしく、その事に関して俺に意見をくれと言ってきている。

正直、知ったこっちゃないんだが。

「まあ、良いんじゃないか？一夏もその先輩にコーチして貰いたいと言っているんだろ？」

「ああ！是非ともコーチして欲しい」

元気よく声を上げるのは一夏。

相当その先輩の実力に惚れ込んでいるようだ。

そんな一夏をジトつとした目で睨んでいる鈴。・・・なるほどな。これが反対の理由か。
だが、俺はお前に協力する筋合いはない！

「実力や技術もあるんだろ？俺には反対する理由がねえよ」

その先輩は訓練機で一夏と鈴を倒したそうだ。一夏に関しては圧勝で。

理論上では打鉄では機動力が三倍以上ある一夏の白式には勝てない筈なんだが・・・。それだけぶっ飛んだ腕を有しているのか、それとも所詮理論は理論でしかないのか。

まあ兎も角として、かなり腕があるのは間違いない。

「今度俺にも紹介してくれ。どんな奴か見てみたい」

残る問題は何故そいつがコーチに立候補したか、という事か。

単純な親切心から立候補しているならいざ知らず、実際の所は男でISに乗る事が出来る稀少個体との接触が目的なんだろうな。

変な動きをしないよう監視はしておいた方がいいな。

「おう、任せとけ。どうせだったらついでに南戸もコーチしてもらったらどうだ？」

現実行き詰っているし、確かにコーチは欲しいな。

一人コーチに宛があつたけれど、その先輩に頼んでみるのもいいかもしれないな。

俺も外聞上は稀少個体だし、断られる事はないだろうしな。

まあ、会ってみて決めるとしよう

「ああ、その時はお願いしようかね」

古京に実装されているメイン装備はナノマシン。

コレの使い方のコツを教えてくれるようなコーチがいいんだが。・
・それは高望みすぎか。

「・・・・・・・・南戸、浮気は嫌だからね？」

ニコニコとしながら言うシャル。

目が笑っていないぞ。

「わかってるよ。俺はわりと誠実な人間だから」

そも浮気云々な関係になったような覚えが無い。とつつこみたい所だが、間違いなく女性陣の反感を買うので止めておいた。

『女の結束力は恐い』

これは、IS学園に来て学んだ事の一つだ。

「・・・仲睦まじい限りだな」

言うは筈。

語調からは羨望の念が込められているように感じられる。

果たしてこれは羨ましがられるような関係だろうか。

「えへへ、そうかな？」

告白以来、凄く好意が露骨になってきているシャル。

いや、俺が意識し始めたから浮き彫りになっただけで、最初からこんな感じだったのかもな。

・・・鶏が先か卵が先かみたいな話は考えても無駄だな。

とりあえず、最近わかった事だがシャルは独占欲がかなり強いみたいだ。

俺が他の女子と話していると十中八九で不機嫌になる。

俺と一夏以外は全員女子である以上、仕方のない事だと思うのだが・・・。

この間セシリアとペアで練習をしたいと俺が言った時なんてもう・・・。

・・・思い出すのはやめよう。あれはトラウマだ

「——ん？どうした南戸？」

一夏が不思議そうにこちらを見ている。

ボーっとしていたようだ。

「いや、夏休みももう終わりだなーと思っていたただだよ」

思っていた事を口にする訳にもいかず、誤魔化す。

実際、いつの間にやら八月は下旬。夏休み終盤だ。もうすぐこの自由気ままな生活とお別れ。

あー、また朝起きられなくて正座させられるのかと思うと憂鬱だぜ。

……夏休みの課題的な物が出ていた気がするが、気のせいだ
と思いたい。いや、気のせいだ。そうに違いない

「そういえばそうだな」

「夏休み最後の思い出として、ここにいるメンバーで何処か行く
つてのもいいかもな」

とは言っても予定を立てるにしては遅すぎる。夏休みはあと十日も
ない。

それに、ここに集うは代表候補生。予定が合うとは思えないな。

……もうちょっと早く考え至るべきだったかね。

「おお！それいい案だな。……この日なら、そういつのに
うってつけの催しがあるぞ」

と、やけにのりのりな一夏はカレンダーに載っている一日を指さす。
ちようど今から五日後の土曜日だ。俺は暇だな

「ん。なんかあんのか？」

「まあな。・・・何があるかは着いてからの楽しみって事にしておいてくれ」

刻一刻と迫る日常（後書き）

閲覧ありがとうございました！

夏祭り（前書き）

感想待ってます！

夏祭り

あれからその先輩『トーカ・ガルシア』という人間について調べてみた。合法、非合法いろいろつかつてな。

すると、いくつか可笑しな事があることに気が付いた。

まず一つ。

『トーカ・ガルシア』の専用機の生産社が不明な事。

まず、IS学園の生徒は専用機を持っている場合、その専用機の各種情報を学園のメインコンピュータに登録しなくてはならない。

その要明記の各種情報の内に生産社も含まれるのだが、彼女の専用機はそこが不明、となっていた。

『生産社』というのは既存の『コア』を使ってそのIS生産した会社の事だ。

セシリアのブルー・ティアーズであるなら、イギリスのアッカー社。シャルのラファール・リヴァイブであるならフランスのデュノア社つ

てことになる。

因みに『コア』の生産社は明記する必要はない。

なにせ、全世界で考えても『コア』生産できる人間はあの天才以外に存在しないのだから当然と言えば当然か。

まあ、あの人が生産した筈の無いコアがこないだ出て来たし、もしかしたらこの先、コアの生産社なんて項目も増えるかもしれないな。

・・・それは非常に不味いんだがね。

さて、話を戻そう。

どこまで話したか。……彼女の乗る専用機のデータに、生産社が明記されていないとまでは話したか。

そもそも、ISは兵器としての面もあり、生産社は自分達の作ったISに少なからぬ責任を持たなくてはならない。

——たとえば先の『銀の福音騒動』において、アメリカ・イスラエルの共同開発されたIS『銀の福音』が暴走した時、福音は外部か

らの不正アクセスによって暴走したのにも関わらず、開発に携わった両国の研究員は漏れなく処分をくらっている。重くは無い、かといっ

て軽くも無い罰。

……それが兵器を生み出す責任というものだ。

要するに、『生産社不明』というのがよっぽどな異常という事はわかってくれただろうか。

俺もいろいろな経路を使って調べてみたが、どれだけ調べてもやはり『不明』以上の結論はだせなかった。

次に二つ目。

専用機が彼女に渡された時期。

彼女がアメリカの代表候補生に選ばれたのは去年の九月。そして、彼女が専用機持ちになったのは去年の六月だ。

つまりは、彼女は代表候補生に選ばれるのより早く専用機を生産してもらったことになる。

普通は代表候補生に選ばれた後、ある程度実績をあげて、そこで初めてそいつの専用機の生産プロジェクトが発足するものなのだが・

・

・。

前に説明したように彼女のＩＳは開発社が不明。やはりそれと結びつけて考えるのが妥当か。

となるとそのＩＳ生産社と彼女は親密な関係である可能性が高いだろうか。

・・・わからんな。

そして三つ目。

これが最も不可思議で、深刻な問題。

—— アメリカに『トーカ・ガルシア』という人間は存在していない。

そんな人間はアメリカの住人表には載っていない。だが、アメリカの代表候補生だという事は事実だ。それは間違いない。

『トーカ・ガルシア』

・・・一体何者なんだろうか。

「随分と難しい顔をしているな」

思考に耽っていると目の前より声をかけられる。そこには浴衣姿のラウラが居た。

何故浴衣なのか、というと、箒の自宅の地元で開催された夏祭りに

来ているからで、どうせだからと皆浴衣を着ている。俺含めな何故夏祭りなのか、というと、いつぞやに皆で出掛けようと俺が言い、一夏が場所に当てがあると言い、ここに来た訳だ。無論、他の専用機持ちのいつものメンバーはここにいるぞ。

「ちょっとした考え事さ」

「それはトーカ・ガルシアに関する事か？」

流石はドイツの軍人というところか。鋭い。
やけに騙されやすいのが玉に瑕だが。

「まあな」

「——それで、お前から見てどうだ？あいつは」

恐らく、あいつは危険な人間かどうか、という事を聞いているんだろつ。

「……さっぱりだな。今は不明としか言い様が無い」

正直に思った事を伝える。

彼女の事は考えれば考えるほど謎は深まるばかり。やはり、本人に会ってみるのが一番だな。

「・・・こちらもあいつを調べてみたが、不自然な点が出てくるばかりで、正体を掴む事は出来そうにない」

まあ、だろうな。相手さんには相当大的なバックが付いていると思われる。

でなければここまで足がつかないと言うのは可笑いしな。

「こっちで何か進展があつたら教えるよ。今は祭りを楽しむとしよう」

「・・・そうだな」

この祭りのメインは八時より始まる花火だそうだ。
テレビとかでは見た事はあるが現物を見るのは初めてなので、その時を楽しみにしている。

されど、八時まではまだまだ時間があるので今は屋台を見て回っている最中だ。

「くっ、鳥類と見て甘く見過ぎていたか……」

「これを落とせなければ狙撃手を名乗る資格はありませんわね……」

「……っ！！何で当たってるのに倒れないのよ!？」

「……………」

現在場所は射的。

各々が獲りたい景品を獲るために頑張っている。俺と一夏、シャルは応援席だ。

因みに上からラウラ、セシリア、鈴、箒のセリフ。

最初に五発の弾が配布されるのだが、今、全員の手元には残り一発しかない。何故、専用機持ちともあろう者が射的で景品を落とせないの

かというと、理由はそれぞれにある。

まずラウラとセシリア。

この二人のISでの射撃能力はかなり高く、正確だ。射的においてもやはり、寸分狂わず狙った所に命中する。

だが……

「……何故手足を狙うんだ」

ラウラはペンギンの、セシリアはライオンのぬいぐるみを狙っているのだが、何故か執拗に手足を狙っている。

……そんなじゃ当たっても落ちねえよ

「捕虜として捕らえるなら手足を潰しておいた方がいいだろう」

とラウラ

「足を撃ち機動力を削ぎ、手を撃ち反撃を許さない。常套手段ですわ」

とセシリア

「……ぬいぐるみは機動も反撃もしないよ!」

とつつこむシャル。尤もだな。

というか、何故こつもこいつ等は戦場的な観念を持っているのか。

もしかしたら、武器を手にとると条件反射でそうなっちまうんだろ
うか。

おもちゃだけだな。それ

さて、次に鈴。

さっきの二人には及ばないがかなりの射的能力を有している鈴だが、
二人と同様に戦果を上げられていない。

理由は単純。

「鈴、何狙ってたんだ？」

「液晶テレビよ」

そう。何故か一番高価な液晶テレビを落そうとしているのだ。

射的屋としては持っていかれては大損なので、倒れないように細工
をしている筈。

現に四発『液晶テレビ』と書かれた札に当たってはいるものの、落
す事が出来ていない。紙製の札なのにあの重量感……まず細工
をしていると見て間違いないだろう。

「絶対別の物を狙った方がいいだろ……」

ていつか液晶テレビなら学園の寮に人数分置いてあるだろ……。

そして最後は箒。

「箒、下手だな」

これはもうあれだ。射撃が苦手なんだな。と結論付ける他ない。目線からしてだるまを狙っているようだが、撃った弾はあらぬ方向に飛んでいつている。剣一筋だしなこいつ。

「う、うるさい！ ゆ、弓なら必中だ！」

果たして、射的で弓を採用している所はあるのだろうか。

……という訳で、射的場で景品を得るのは無理そうだ。まあ、景品を得る事は出来なくとも、皆楽しんでるし元はとれてるかね。

夏祭り（後書き）

閲覧ありがとうございました！

次回は夏祭り後編になると思われます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2820s/>

IS～インフィニット・ストラトス～ もう一人の例外

2011年8月11日12時35分発行